

Kalpalatā と Avadānamālā の研究 (5)  
— TJAM 第1章 と Virūpāvadāna と Padmākṣāvadāna —

岡野 潔

南アジア古典学 第9号 別刷  
South Asian Classical Studies, No. 9, pp. 101-198  
Kyushu University, Fukuoka, JAPAN  
2014年7月 発行

**Kalpalatā と Avadānamālā の研究 (5)**  
**— TJAM 第1章と Virūpavadāna と Padmākṣāvadāna —**

九州大学 岡野 潔

略号

Avś = Avadānaśataka

Ed. = the edition of Ratnamālāvadāna by K. TAKAHATA (1954)

TJAM = Tathāgatajanmāvadānamālā (= Padya-Lalitavistara)

SMRAM = Subhāṣitamahāratnāvadānamālā

S34 = the chapter 34 of the Subhāṣitamahāratnāvadānamālā

S35 = the chapter 35 of the Subhāṣitamahāratnāvadānamālā

本論文は二つのネパールの梵文説話作品についての文献研究を引き続き行う。その二つの説話作品とは前回の『南アジア古典学』の拙稿でも扱った、二つのアヴァダーナ・マーラーである。

第一部は、『如来出生アヴァダーナ・マーラー』Tathāgatajanmāvadānamālā 第1章の研究であり、その校定梵文テキストならびに翻訳を示したい。

第二部と第三部はそれぞれ、『善説・偉大な宝珠アヴァダーナ・マーラー』Subhāṣitamahāratnāvadānamālā の、第34章と第35章の梵文テキストを扱い、それぞれの章の校定と翻訳を行う。それら二つの章はそれぞれ Avadānaśataka の第97章 Virūpaḥ と、第66章 Padmākṣaḥ とを源泉としているので、そちらの説話の和訳も示して、源泉資料とその再話文献との間で、内容の比較を行う。

第一部

ネパールの梵文伝の研究 (2) :  
Tathāgatajanmāvadānamālā 第1章

Tuṣitabhuvanāvātāraṇasarvalokābhisaṃbodhanābhinandana

第1節 TJAM の A 写本と 3 人の写字生

梵文 Tathāgatajanmāvadānamālā 『如来出生アヴァダーナ・マーラー』 (TJAM) のテキスト校定において、私は次のような二つの作業方針を立てた。

- (1) 現存写本の中では A 写本を重視し、それを校定の底本として使用する。
- (2) A 写本の中では、特に写字生 X の筆跡で書かれた文を優先する。

先に『南アジア古典学』8号に発表した TJAM 第8章の校定においても、また今回の TJAM 第1章の校定においても、基本的にこの二つの方針に従って作業がなされた。

この方針の中にある A 写本と写字生 X については、昨年の『印度学佛教学研究』の拙稿に私の意見をまとめたので、それも参照されたい<sup>(1)</sup>。

TJAM の現存写本の中で最重要であるのが A 写本であり、その写本は筆跡により3人の主要な写字生 (X, Y, Z) の存在を明白に区別できる。写字生 X が書いた紙の葉は見るからに古びており、それらの葉は A 写本の現存する葉の中で最初に出来た部分、つまり「元来の A 写本」に属する葉であろう。A 写本でこの写字生 X の筆跡で書かれている部分は、ほぼ A 写本全体の前半にあたる。そして A 写本の後半になると、今度は写字生 Y が書いた葉が大部分を占める。写字生 Y と Z が書いた葉は、紙の白さ（汚れの少なさ）から、写字生 X が書いたものよりもずっと新しいように見える。また A 写本の前半に属する第15章の箇所では、写字生 X が書いた紙の第93葉と94葉の間に、写字生 Y が新しい10枚の紙の葉 (\*94a-\*104bの葉) を挿入して、X が書いた葉の書き直しを行っている<sup>(2)</sup>。そのため写字生 Y は X の後に、かなりの時を隔てて作業していること

---

1. 拙稿「ネパールの仏伝アヴァダーナ・マラー Tathāgatajanmāvadānamālā」、『印度学佛教学研究』62巻1号、(199)-(206)頁。その論文で次のように記した：「TJAM には私が知る限りで6本の写本があり、その6本を A, B, C, D, E, K と私は名づけた。[...] それらの中で最も古く重要なのが A 写本である。A 写本には、字の相違から、3人の写字生が区別できる。その3人の写字生を仮に X, Y, Z と名づける。A 写本は、X の筆跡で書かれた葉が古く、分量が多い。X が書いたものが恐らく本来の A 写本であって、写字生 Y と Z の果たした主な役割は、その X が書いた写本に対する後代の補修作業であったと思われる（ただし Y は作品の最後に新たな諸章を付け足した可能性は残される。）」（(202)-(203)頁）。そして同論文の注4では次のように、X と Y と Z の3人の写字生の筆写箇所を示した：「X が筆写した所は A 写本の 1a-62b, 78a-104b, 94a-107b, 108a-148b, 153a-165b, 167a-185b である。Y が筆写した所は A 写本の 63a-77b, \*94a-\*104b, 105a-107b, 152a-152(sic!)b, 166a-b, 186a-303b である。Z が筆写した所は A 写本の 149a-151b である。（\*94a-\*104bの箇所は、X が書いた古い葉のほかに、それと内容が重複して Y が書いた新しい葉もある。152a-152(sic!)bの箇所は、Y の筆跡の 152の葉が2枚あって、中身は重複していない。）」。 (なお、この引用の「78a-104b, 94a-107b」の箇所はミスであり、ここで 78a-107b と訂正しておきたい。) この文の数字の前のアスタリスクは、葉に記された数字が重複していることを示している。この A 写本で Y と Z の筆跡の葉番号の箇所を << >> で示すと、次の様なかたちで X の筆跡の葉中に入り込んでいる：1a-62b, <<Y 63a-77b >>, 78a-93b, <<Y \*94a-\*103b >>, 94a-104b, <<Y \*104a-b, 105a-107b >>, 108a-148b, <<Z 149a-151b >>, <<Y 152a-152(sic!)b >>, 153a-165b, <<Y 166a-b >>, 167a-185b, <<186a-303b >>。

2. それらの Y が新たに追加した10葉はまだ綿密に内容が検討されていないので、写字生 Y がそ

がわかる。写字生 Y が写字生 X よりずっと後の時代に属することは前述の論文でも私は根拠を示した<sup>3)</sup>。

A 写本は TJAM という作品の伝承にとって最も歴史的に重要な役割を果たした写本であり、幾世代もの間、人によって書込をされたり補修されたりして、幾人もの写字生による作業が重層的に施されてきた写本である。A 写本の、写字生 X が書いた葉の部分においても、行間や余白などに別人の筆跡であちこち書込がある。このように権威ある写本は死蔵されずに代々読まれ、活用され、必要があれば書き足されながら受け継がれていくものである。そのため或る時代には、大きな改変の試みはその写本の上でなされることもあった。そのことの顕著な例として、恐らく後代の写字生によって二つの重要な改変の試みが或る時代に A 写本の上でなされていることに私は気づいたので、そのことを以下に指摘したいと思う。

その二つの改変は、複数の章にわたって一貫して編集的になされている性質のものである。第一の改変の試みは、各章末のコロフォンにおける作品名の改変である。第二の試みは、杵物語の文の改変である。以下の節で、それら二つの試みをそれぞれ説明したい。

## 第2節 第一の改変の試み：TJAM の各章のコロフォンにおける改変

TJAM の A 写本において、各章の終わりのコロフォンに作品名の改変が見られる。それは次の様なものである。まず第1章のコロフォンを見てみると、A 写本 (7b) は次のように記す： / << iti lalitavistare >> tathāgatajanmāvadānamālāyāṃ tuṣitabhuvanāvatāraṇasarvalokābhisambodhanābhinandano nāma prathamo 'dhyāyaḥ / (ここで << >> の記号は、その箇所が写本で行間もしくは余白への書込みであることを意味する)

この文の全体は写字生 X の筆跡なのであるが、その << >> の書込みにおける文字だけは、明らかに X の筆跡ではない。tathāgatajanmāvadānamālāyāṃ という X が記した作品名の前に、別の写字生が iti lalitavistare の語を後から書き加えている。その人の加筆による改変の意図は、Lalitavistara をこの作品の正式の書名として認めさせようとするものであろう。

この、第1章のコロフォンで見られる、作品名の箇所における書き加えは、第2章以下の各章のコロフォンにおいても一貫して、同様になされており、どれも同じ筆跡である。それは写字生 Z の筆跡によく似ていると思うが、確実ではない。

---

ここで一体何を意図して、X が書いた葉にわざわざ葉を追加したのかは、今のところ不明である。

3. X が写字生として活動した期間は恐らく17世紀の後半であるのに対して、Y が A 写本を筆写した年は西暦1889年である。前掲論文、(203) 頁参照。X が筆写した年を私は1686年を中心にした前後10年以内と推測する。

A 写本の第1～3章のコロフォンに、X によって記された元々の作品名は Tathāgatajanmāvadānamālā である。第4章には章名があるだけで書名がなく、第5章のコロフォンに記された作品名は Buddhajanmāvadāna である。そして第6章以降になると章名だけで、作品名がない<sup>4)</sup>。写経生 X が A を筆写した時には、この作品はそのような書名で呼ばれていた。本来は Tathāgatajanmāvadānamālā もしくは Buddhajanmāvadāna が書名であったと見てよい。ところがその後の時期に、すべての章末のコロフォンにおいて Latitavistare または śrī-Lalitavistare という新たな作品名を X とは異なる或る別の写字生が行間に書き足したことが、その書き加えた筆跡からわかる。A 写本の上に或る時代に一貫してなされたこの、各章のコロフォンへの [śrī-]Lalitavistare の付加は、後の時代に作られたすべての TJAM の他の新しい写本にも受け継がれてゆく。つまり A 写本のコロフォンにおける新たな作品名の付加によって、この TJAM という作品は [śrī-]Lalitavistara という別の名で、ネワールの知識人層に知られるようになった。この作品が通称で Padya-Lalitavistara と呼ばれることも、そのことに起因すると思われる。

A 写本の各章末のコロフォンにおける作品名の改変の事実を確認するため、以下に各章末のコロフォンの文をすべて列挙することにしたい。私たちはこれによって、作品名に [śrī-]Lalitavistara という名称を新たに置く、上述の改変の試みが TJAM の A 写本の全体に及んでいることが確認できる。またそれによって写字生 X が書いた所の章名と、Y や Z が書いた所の章名との間の重要な違いにも気づく。A 写本で写字生 Y や Z が書いた章のコロフォンには一貫してこの加筆の跡がなく、すでに [śrī-]Lalitavistara の語が入った形で記されている。Y や Z が書いた時期には、すでに [śrī-]Lalitavistara が章名の前の位置に置くことが決まっていたことがわかる。つまり A 写本の中でも Y や Z の手になる部分は、作品名に [śrī-]Lalitavistara という名が埋め込まれた後の時代の筆写であったことがわかる。このことは X の葉が古く、Y や Z の葉が新しいことの決定的な証拠となる。(なお、以下で特に注意すべき箇所は太字にした。また「文は X の字」とは、<< iti lalitavistare >> 以外の、地の文は写字生 X の筆跡である、という意味である。)

第1章 colophon (7b): << iti lalitavistare >> **tathāgatajanmāvadānamālāyāṃ** tuṣitabhuvanāvatāraṇasarvalokābhisaṃbodhanābhinandano nāma prathamo [']dhyāyaḥ // [文は X の字]

第2章 colophon (20b): iti << lalitavistare >> **tathāgatajanmāvadānamālāyāṃ** mānavajanmāvatāraṇasamutsāhparivartto nāma dvitīyo [']dhyāyaḥ samāptaḥ // [文は X の字]

第3章 colophon (28a): iti << śrīlalitavistare >> **tathāgatajanmāvadānamālāyāṃ** śākyakulasamutpattiprasiddho << nāma tṛtīyo >> [']dhyāyaḥ samāptaḥ // [文は X の字]

---

4. なお A 写本は、最終章のコロフォンには Sugatajanmaratnāvadānamālā という作品名が記されるが、その最終章を含めて A 写本の後半部分は、写経生 X の筆写ではなく、後代の写字生 (写字生 Y) が筆写した部分に属する。

第4章 colophon (33b) : iti << śrīlālitavistare >> kauliyasamutpattimāyādevīvivāho << nāma caturtho >> [']dhyāyaḥ samāptaḥ // [文は X の字]

第5章 colophon (38b) : iti << śrīlālitavistare >> **buddhajanmāvādāne** dharmāloka-mukhopadeśanāparivartto nāma samāptaḥ // [文は X の字]

第6章 colophon (46b) : iti << śrīlālitavistare >> tuṣitapracalanāparivartto nāma ṣaṣṭho [']dhyāyaḥ // [文は X の字]

第7章 colophon (53b) : iti << śrīlālitavistare >> garbhāvakraṅtiparivartto nāma saptamo [']dhyāyaḥ samāptaḥ // [文は X の字]

第8章 colophon (60b) : iti << śrīlālitavistare >> bodhisatvajanmaparivartto nāmāṣṭamo [']dhyāyaḥ samāptaḥ // [文は X の字]

第9章 colophon (68b) : iti **śrīlālitavistare** śuddhāvāsikadevaputrādyasitarṣisaṃdarśanāparivartto nāma navamo 'dhyāyaḥ // 9 // [文は写生字 Y の字]

第10章 colophon (72a) : iti **śrīlālitavistare** 'bhayākuleśvarīdevatāsaṃdarśanāparivartto nāma daśamo 'dhyāyaḥ // 10 // [文は Y の字]

第11章 colophon (74b) : iti **śrīlālitavistare** bodhisatvānnaprāśanāparivartto nāmaikādaśo [']dhyāyaḥ // 11 // [文は Y の字]

第12章 colophon (77b) : iti **śrīlālitavistare** lipiśālābhigamanāparivartto nāma dvādaśo [']dhyāyaḥ // 12 // [文は Y の字]

第13章 colophon (82a) : iti << lalitavistare >> grāmāntikakṛṣisaṃdarśanāparivartto nāma trayodaśo [']dhyāyaḥ samāptaḥ // [文は X の字]

第14章 colophon (93b) : iti << śrīlālitavistare >> śilpakalāsarvavidyāsaṃdarśanayaśodharāstrīrat-nasamāgamāparivartto nāma caturdaśo [']dhyāyaḥ samāptaḥ // [文は X の字]

第15章 colophon (104a) : ity << śrīlālitavistare >> antaḥpurābhiratibodhisattvaniṣkramaṇasaṃcodanāparivartto nāma pañcdaśo [']dhyāyaḥ samāptaḥ // [文は X の字]

第16章 colophon (108a) : iti << śrīlālitavistare >> svapnāparivartto nāma ṣaṣṭhadaśo [']dhyāyaḥ samāptaḥ // [文は X の字]

第17章 colophon (116a) : iti << śrīlālitavistare >> jirṇnarogigatāsudarśanaratirāgavighātano nāma saptādaśo [']dhyāyaḥ // [文は X の字]

第18章 colophon (123a) : iti << śrīlālitavistare >> pravrajyābhigamanaprārthanābhisambodhano nāmāṣṭādaśo [']dhyāyaḥ // [文は X の字]

第19章 colophon (129b) : iti << śrīlālitavistare >> niryāṇānujñāsaṃprārthanāparivartto nāmonav-iṃṣatitamo [']dhyāyaḥ // [文は X の字]

第20章 colophon (136a) : ity << śrīlālitavistare >> antaḥpurāvalokanābhiniṣkramaṇotsāhāparivartto nāma viṃṣatitamo [']dhyāyaḥ samāptaḥ // [文は X の字]

第21章 colophon (151b) : iti **śrīlālitavistare** purābhiniṣkramaṇāparivartto nāmaikaviṃṣatitamo [']dhyāyaḥ // [文は Z の字]

第22章 colophon (165b) : iti << śrīlālitavistare >> chandakani varttanasarvāntaḥpurikāśokavin-  
odanakathakasvargābhirohanaparivartto nāma dvāviṃśatitamo [']dhyāyaḥ samāptaḥ // [文は X の字]

第23章 colophon (172b) : iti << śrīlālitavistare >> maharṣitapovratasamdarśanaparivartto nāma tray-  
viṃśatitamo [']dhyāyaḥ samāptaḥ // [文は X の字]

第24章 colophon (177b) : iti << śrīlālitavistare >> bodhisatvānveṣaṇābhībodhanaparivartto nāma  
caturviṃśatitamo [']dhyāyaḥ samāptaḥ // [文は X の字]

第25章 colophon (184b) : iti << śrīlālitavistare >> magadhādhipatibimbisāraṇpābhisaṃgatiparivartto  
nāma pañcaviṃśatitamo [']dhyāyaḥ samāptaḥ // [文は X の字]

第26章 colophon (193a) : iti śrīlālitavistarāvadāne duṣkaravratacaryyāparivartto nāma ṣaṭhav-  
iṃśatitamo [']dhyāyaḥ // 26 // [文は Y の字]

第27章 colophon (199b) : iti śrīlālitavistarāvadāne bodhisatvavratābhipālānasujātābho-  
janāharaṇaparivartto nāma saptaviṃśatitamo [']dhyāyaḥ // 27 // [文は Y の字]

第28章 colophon (208a) : iti śrīlālitavistarāvadāne bodhisatvabodhimaṇḍagamanaparivartto  
nāmāṣṭaviṃśatitamo [']dhyāyaḥ // 28 // [文は Y の字]

第29章 colophon (216b) : iti śrīlālitavistare bodhimaṇḍe sarvalokapūjābhigamanamahāvūhapari-  
vartto nāmaikotrīṃśattamo [']dhyāyaḥ // 29 // [文は Y の字]

第30章 colophon (241b) : iti śrīlālitavistare mārādharaṇaparivartto nāma trīṃśatitamo [']dhyāyaḥ  
samāptaḥ // 30 // [文は Y の字]

第31章 colophon (249a) : iti śrīlālitavistare sambodhanaparivartto nāmaikatrīṃśa(!)tamo [']dhyāyaḥ  
// 31 // [文は Y の字]

第32章 colophon (257b) : iti lālitavistare saṃstavaparivartto nāma dvātrīṃśattamo [']dhyāyaḥ  
samāptaḥ // 32 // [文は Y の字]

第33章 colophon (277a) : iti śrītrapaṣabhallikavaṇīksaṃghasamāgamaparivartto nāma traya(!)-  
trīṃśatitamo [']dhyāyaḥ // 33 // [文は Y の字]

第34章 colophon (284a) : iti śrīlālitavistare 'dhyeṣaṇāparivartto nāma catustrīṃśattamo [']dhyāyaḥ  
samāptaḥ // 34 // [文は Y の字]

第35章 colophon (298a) : iti lālitavistare dharmacakrapravarttanaparivartto nāma pañca-  
trīṃśa(!)tamo [']dhyāyaḥ // 35 // [文は Y の字]

第36章 colophon (301b) : iti lālitavistare buddhajanmamahāyānasūtrabhāṣaṇaśravaṇādīpuṇya-  
praśamsāparivartto nāma ṣaṭtrīṃśo [']dhyāyaḥ // 36 // [文は Y の字]

第37章 colophon (303b) : iti śrīlālitavistare sugatajanmaratnāvadānamālāyām aśokabodhi-  
caryāvratadhāraṇaparivartto nāma saptatrīṃśo 'dhyāyaḥ samāptaḥ // 37 // [文は Y の字]

以上の全章のコロフォンの記述により、Śrīlālitavistara または Lalitavistara は後から付  
けられた作品名であることが確認できた。作品名を Padya-Lalitavistara と記す章は皆無

である。本来の作品名は第1章～3章の TJAM か、第5章に記される buddhajanmāvadāna であろう。第37章の作品名は Y の字なので、単純にそれらと同列には扱えない。

### 第3節 第二の改変の試み：TJAM における枠物語の改変

枠物語 (frame story) の形式を有することは、avadānamālā 文献の一つの特徴である。枠物語となる話は、作品の最初と最後におかれ、個々の独立性の高い説話を多数並べて構成される avadānamālā のような文献において、全話を束ねる役割をする。ネパールにおいて作られた avadānamālā 文献の多くには Upagupta の枠物語が用いられている。Upagupta の枠物語は、仏教僧である阿羅漢 Upagupta が或る時に Aśoka 王を首座とする者たちに説法を請われ、王を対告者として或る法話を説いたという常套的な文から成り、実質的な内容となる説話的な法話が始まる前に、導入部として置かれる短い輪郭物語である。この枠物語は古くはインド撰述の梵文仏教説話集 Avadānaśataka の第100章 Saṃgītiḥ で使われ始めているが、ネパールの文化において、Avadānaśataka を韻文で再話したいいくつかの avadānamālā 文献が作られるようになったため、その枠物語の形式が「Avadānaśataka 系列」の avadānamālā 文献で使われ、また更に、それ以外の梵文説話文献にも広く流用されるようになって、ネパール撰述の梵文説話文献のジャンルで好んで用いられる枠物語になった。

TJAM の各章の冒頭は、この Upagupta の枠物語で始まっている。しかし TJAM の第1章と最終章には、Upagupta の枠物語のほかに、その前に、もう一つ別の枠物語が置かれている。それは Jayaśrī の枠物語である。この Jayaśrī の枠物語は、ネパール撰述の文献だけに見られる独特のものであり、Svayambhūpurāṇa をはじめ、限られた数の文献だけに見られる。この Jayaśrī の枠物語は16世紀末～17世紀初めころから使われ始めた形式であると推測される<sup>(5)</sup>。

TJAM 第1章における Jayaśrī の枠物語は、Bodhimaṇḍapa (あるいは Bodhimaṇḍa) という名の寺で Jayaśrī という名の師が、一番弟子の Jinaśrī (この一番弟子の名前は他作品では変動することが多い) の請いに応じて、聴衆に「仏の出生アヴァダーナ」 buddhajanmāvadāna の説法を開始する、という内容のものである<sup>(6)</sup>。その仏伝アヴァダーナの説法は

---

5. 前掲論文、(203)-(204)頁を参照。

6. Jayaśrī の枠物語を有するどの作品でも、Bodhimaṇḍa(pa) という説法の場所の名と Jayaśrī という説法師の名前は、ほぼ変わらないで用いられる。この Jayaśrī の枠物語はもともと Svayambhūpurāṇa の作品の形成の過程で発生した可能性が学者によって指摘されている。インド伝来の説話を再話するためであったら、Jayaśrī の枠物語は不要であり、Upagupta の枠物語があればそれで法話の導入部として十分であるが、しかし Svayambhūpurāṇa は中核部がネパールの土着の伝説から出来た作品であるから、インドからの文献伝承を主張できず、そのため Upagupta の枠

かつて Upagupta 長老が Aśoka 王が語ったものに由来するが故に、第1章では Jayaśrī 杵物語の後に、さらに Upagupta 杵物語が置かれるわけである。Jayaśrī の杵物語の舞台である Bodhimaṇḍa(pa) 寺は恐らくネパールの Lalitpur に位置する寺と推測されるが、Upagupta 杵物語の舞台は古代インドのアショーカ王の時代の王都 Pāṭaliputra である。

このように TJAM 第1章には Jayaśrī と Upagupta の二つの杵物語が並んでおり、前者は中世ネパールにおけるこの法話の説法の因縁を語り、後者はそれ以前の、古代インドにおける同じ法話の説法の因縁を語るものである。この杵物語の二重性の必要は、TJAM の法話（仏伝）の種本がインド起源の梵語の仏伝であって、それらの種本を再話する文献として TJAM がネパールで成立したことによるものである。

さて興味深いことに、TJAM 第1章の最後の所を A 写本で読むと、この杵物語の部分を改変しようとする試みが、写字生 X による最初の筆写より後に、恐らく別のペンを使う手（恐らく X とは別人の手?）によって A 写本の上でなされたことに気づく。しかもその手による、A 写本の上でなされた字句変更の試みは、第1章だけでなく他の章でも一貫した態度で連続的になされているのである。

A 写本におけるその改変の手跡を丁寧に見てみると、次の様に理解できる。TJAM のテキストが X の手によっていったん書き上げられて出来た後に、同じ A 写本において第二の手が、各章の Upagupta の杵物語にかかわる箇所に関して、固有名詞だけを変えることで、Upagupta の杵物語を別の形に変更しようとした。しかし A 写本ではそれだけでは終わらず、その写字生（第二の手）が変更したものを、また別の写字生（第三の手）が更に修正した（恐らく元の形に戻そうとしたようだ）。このように再修正が入り、やや込み入っているため、A 写本はそれらの手が入った箇所ですら少し読みづらくなっている。

これらの改変の作業はほぼ一貫した態度で全体に及ぶものであるが、特に第1章についてこの改変を詳しく説明してみよう。A 写本の第1章のテキストにも複数の人による

---

物語とは別に、ネパールにおける精神的な権威としての Jayaśrī の杵物語を作る必要が出て来たのではないか。そしてその杵物語を使った Svayambhūpurāṇa が流行したため、同時に二つの杵物語を併用することが広まり、本来 Upagupta の杵組で十分であったはずのインド説話の再話文献にも、或る時代から両方の杵物語を併用する現象が出て来たと考えられる。この Jayaśrī の杵物語については、Guṇakāraṇḍavyūha を研究した MAJUMDAR (1948) や、Aśokāvadānamālā や Vicitraratnamālā を研究した岩本裕 (1967) も注意を払っているが、分からないままであった。近年 TATELMAN (1996) は Jayaśrī の杵物語の中の固有名詞を、ネパールの史的資料と結びつけて、この杵物語の成立地域と年代を推測した。彼によってこの杵物語は古都 Lalitpur の Bodhimaṇḍa(pa) Vihāra と繋がる可能性が指摘された。Jayaśrī の杵物語はネパールの高僧によってインド伝来の法話が再話された因縁を語るための話と理解できる。

書込みがあるので、そのテキストの変更の歴史を説明するためには、3種類の「手」を（恐らく3人の写字生を）筆跡によって区別し、次の様に3段階に分けて考えることが必要であると思われる。まず最初の「手」が（つまり上述の写字生 X が）第1章の全文を書き終えた。これが第1段階となる。この最初の「手」を第1の写字生と呼ぼう。彼が書いた字が第1章のほとんどを占めている。その後、第1の写字生が写本をいったん全部書き終えてからどれほどかの時間の経過の後に、その A 写本の上で、章末の締め括りの枠物語の箇所において、第2の「手」がその第1の写字生（X）が書いた文のあちこちを変更を試みた。この第2の「手」による字句の変更が第2段階となる。この第2の「手」の書く字は、使った筆記用具は少し違う感じがするが、第1の写字生の字と微妙に似ている。もしかすると第2の「手」の字は数年後の、別のペンを使った第1の写字生の字である可能性も捨てきれない。第1と第2の両者は数年ほどの時間を隔てた同一人物であるのかもしれないが、しかし私は第2の「手」は写字生 Y の筆跡にも似ていると感じるので、一応両者を区別し、第2の写字生という表現を使うのが無難であると思う。

この第2の写字生は、写本の余白や行間に字句を書くこともあるが、第1の写字生が書いた字に重ねて字を書いてしまうこと（上書き）も平気です。そのように上書きした場合は、地の文にあった元の字が見えなくなってしまう。そしてそれらの、別のペンをもって書かれた第2の写字生の書いた箇所は、更にしばしば全く別の字を書く第3の写字生によって再変更が施されている。この、第3の写字生による再変更の書込みが第3段階となる。第3の写字生の書込みの筆跡は、第1や第2の字と全く違って、感じとしては写字生 Z の筆跡に似ている。

このように A 写本では第1の写字生の筆写の後に、第2と第3の写字生による書込みがあったことを注意しながら、以下に A 写本の第1章の末尾の箇所がどうなっているのかを具体的に見てみよう。

A 写本で、まず第1の写字生 X は次の様に第196詩節を書いた：

*evaṃ śāstrā munīndreṇa samākhyātaṃ svajātakam /  
sāṃprataṃ tat yathādiṣṭam śrutam mayā tathocyate // 196*

（訳：以上のように、師である牟尼の王（= 仏）によってご自分の本生話（svajātaka）が語られました。今それを私（= ウバグプタ）は教示され聞いたとおりにお話ししました。[196]）

その後、第2の写字生はその文を部分的に変更し、本文に削除記号をつけながら余白に新しい読みを書いて、次の様な文に変えた：

*evaṃ mama purā kṛtyaṃ samāsaḥ svajātakam /  
sāṃprataṃ tat mayā py evaṃ samākhyātaṃ tathā khalu // 196*

（訳：以上のように、私のかつての所作である自分の本生話（svajātaka）が、簡略に今私によってそのようにそのままに語られました。[196]）

この第196詩節では第3の写字生による再変更はない。第2の写字生によるこのような第196詩節の字句変更の意図は、第195詩節まで語られた話を、ウパグプタが語った法話ではなくして、釈尊自身が語った法話だけにすることであったことは明白である。このように第2の写字生は明らかにウパグプタから釈尊自身のみには話者を変更したい立場に立っており、続く第197詩節以降も同じ立場で変更を行っている。

次の第197詩節においては、第2の写字生によって写本の本文に上書きするかたちでなされた変更が、第3の写字生（明白に第1や第2とは別人の筆跡）によって余白において再変更され、恐らく最初にあったテキストの形に戻されている（ただし hypermetre になっているが）。その改変の流れをまとめると、第197詩節では次のような3段階のテキストの変化が A 写本上であったと考えられる：

〔第1段階〕 197abの、X による本来の記述（ただし [] の箇所は読めず、推測である）：

tvam api [ca mahārāja tat] śrutvānumodya sādaram /

（訳：大王よ、あなたも敬いの心をもって、それを聞いて随喜し）

〔第2段階〕 197abの、第2の写字生が X の字に上書きして変更したテキスト：

tvam apy ānanda yūyaṃ śrutvānumodya sādaram /

（訳：アーナンダよ、あなたも敬いの心をもって、聞いて随喜し）

〔第3段階〕 197abの、第3の写字生が余白に書いて再変更したテキスト：

tvam api ca mahārāja tat śrutvānumodya sādaram /

（訳：大王よ、あなたも敬いの心をもって、それを聞いて随喜し）

ここで示した第1段階のテキストは第2段階での字の上書きによって消されてしまっているの、推測でしかない（第1段階のテキストはもう見えないが、第3段階のものと同じか、似たものであったろう）。第2の写字生の字句変更の意図は、第195詩節まで語られた法話を、Upagupta が Aśoka 王に語った話ではなく、釈尊が Ānanda に語った話にすることにあった。しかし第3の写字生の目的は、第2の写字生が施したその勝手な変更を元のかたちに戻すことにあった。

これと同様に、第1章最後の第200詩節においても、第2の写字生が本来の第1の写字生の字を見えなくするような形で上書きすることで変更を施しており、その上書きされた箇所について、また更に第3の写字生が写本の余白で修正している。第3の写字生は明らかに本来の立場に戻そうとした。

〔第1段階〕 第200詩節の、本来のテキストの記述（推測）：

iti śāstr[opagupte]na samādiṣṭaṃ niśamya te /

[aśoka]pramukhā sarve tathety uktvā prabodhitāḥ // 200

（訳：以上のように師であるウパグプタによって説かれたことを聞いて、アショーカを上首とする彼らすべての者たちは、「そういたします」と言い、覚知を得ました。）

〔第2段階〕 第200詩節の、第2の写字生が本文に上書きして変更したテキスト：

iti śāstrā munīndrena samādiṣṭaṃ niśamya te /

**ānandapramukhā sarve tathety uktvā prabodhitāḥ /**

(訳：以上のように師である牟尼の王 (= 釈尊) によって説かれたことを聞いて、アーナンダを上首とする彼らすべての者たちは、「そういたします」と言い、覚知を得ました。)

[第3段階] 第200詩節の、第3の写字生が写本余白に書いて変更したテキスト：

**iti śāstropaguptena samādiṣṭam niśamya te /**

**aśokapramukhā sarve tathety uktvā prabodhitāḥ // 200**

(訳：以上のように師であるウパグプタによって説かれたことを聞いて、アショーカを上首とする彼らすべての者たちは、「そういたします」と言い、覚知を得ました。)

以上に見られるような、第1章の法話の枠物語を「Upagupta が Aśoka 王に」の形から、「釈尊が Ānanda に」の形に変更しようとする第2の写字生の作業は、第2章以降の章においてもまた、継続的になされている。例えば、第2章第1詩節の pāda a の冒頭の、**athānando** (さてアーナンダは) の **ānando** の文字は、第2の写字生によって上書きされた字であって、第1の写字生の本来の字ではない (もとは **athāśoko** であつたろう)。その **ānando** の箇所は更に第3の写字生によって余白に **śoko** と記されており、**athāśoko** (さてアショーカは) と再度テキストが変更されて元通りになったことがわかる。

このような、A 写本の内部で起こった第2の写字生と第3の写字生との、全く立場が違う書込みは、A 写本を読みにくくし、そのおかげで A 写本から後代に作られた他の新しい写本にもテキストに基だしい混乱を生じさせている。

私はこの校定においては第1・第3の写字生の立場でテキストを一貫させる態度を取った。本来、第1章の冒頭に置かれた二つの枠物語から考えると、第1・第3の写字生の立場でなければ不自然だからである。

ネパールにおける聖者 Jayaśrī の説法は、遡れば、インドの Upagupta の説法に基づいている。しかし Upagupta の説法も、それを遡れば、釈尊が Ānanda に対して行った金口直説の説法に基づいている。つまりこの作品の伝承の歴史については次の様に、3段階があったとネパールの仏教徒たちに理解されていたであろう。

**第1の説法と伝承：**インドで釈尊の在世中に、釈尊が Ānanda に法話を語り、それは Upagupta 長老に到るまで百年間伝承された。

**第2の説法と伝承：**インドで釈尊の滅後百年に、Upagupta が Aśoka 王にその法話を語り、それはネパールまで伝承された。

**第3の説法と伝承：**ネパールで Jayaśrī が弟子たちにその法話を語った。

このような3段階の説法と伝承の理解に基づき、TJAM が作られたが、ネパールで或る時代に、この作品を仏説としてよりいっそう権威づけるために、金口直説たることが強調されるべきであると考えられるようになって、第2の写経生のようなテキスト改変の態度が出て来たと思われる。Upagupta が伝えた第2段階を省略して、法話の出所とし

て Upagupta よりも釈尊が優先されるべきであると考え、第2の写経生は Upagupta を釈尊に替え、Aśoka 王を仏弟子 Ānanda に替えた。第2の写経生の改変は、この法話のテキスト全体の聖性を高めんがためのものであった。しかし第2の写経生は、第1章の二つの枠物語の後に更にきちんと釈尊の枠物語を語る詩節を創作することなく、小手先の固有名詞の変更だけをして、目的を達成しようとした。そのように Upagupta 等の固有名詞の箇所だけを変えただけであるので、読み返して章を全体的に見てみると、第1章の話の流れが不自然になってしまった。章の最後になって唐突に対告者として Ānanda が出てくるのは変である。そのため、第3の写経生は彼の改変をキャンセルして、元の形に戻そうとしたのである。

#### 第4節 TJAM 第1章の梵文と和訳

さて以下に TJAM 第1章の校定梵文テキストを挙げ、次いでその全訳を挙げたい。

- 略号 A = NGMPP A 123/5 [a ms of TJAM, = BauDV 51(87)]  
 B = NGMPP B100/2 [a ms of TJAM, = BSP ca266(3-14)]  
 H = HOKAZONO's Lalitavistara edition, 1994  
 L = LEFMANN's Lalitavistara edition, 1902

(テキスト中の [ ] の数字は A 写本、{ } の数字は B 写本の葉を示し、例えば [1b] は A の第1葉の裏面であることを示す。また本章は特に Lalitavistara と密接に関係するため、テキストでは各詩節の右側に ~ という「類似」を意味する記号を使って、Lefmann (略号 L) と外園幸一 (略号 H) の出版本の参照すべき箇所を示した。またテキスト内の注意すべき名詞を太字にした。)

### Tathāgatajanmāvadānamālā

#### 1 Tuṣṭabhuvanāvātāraṇasarvalokābhisambodhanābhinandana

[1b]{1b) oṃ namaḥ śrī ratnatrayāya sarvabuddhabodhisattvebhyo namaḥ //

yo bhagavān mahābuddhaḥ paśyan pāti sadā jagat /  
 jayantu śāsanāny asya sarvalokeṣu sarvadā // 1  
 yā śrīprajñā mahādevī bhadrāśrīsadguṇākārī /  
 saddharmasādhanotsāhaṃ dattvā lokān sadāvatu // 2  
 ye jagaddharmabhartāro bodhisattvā jinātmajāḥ /  
 te sarve sarvalokānāṃ bhadraṃ kurvantu sarvadā // 3  
 triratnaśaraṇāsīno mahābuddhānubhāvataḥ /  
 vakṣyāmi trijagacchāstur buddhajanmāvadānakam // 4  
 tat santo ye mahāsattvāḥ sambuddhaguṇalālasāḥ /

te sarve śraddhayā bhaktyā śṛṇudhvaṃ bodhisādhanam // 5  
 tadyathārhan mahābhijño **jayaśrīḥ** sugatātmajaḥ /  
 vihāre **bodhimaṇḍākhye** vijahāra sasāṃghikaḥ // 6  
 tadaikasamaye tatra jayaśrīḥ sa jagaddhite /  
 saddharmaṃ samupākhyātum sabhāsane samāśrayat // 7  
 tad dr̥ṣṭvā sāṃghikā sarve **jinaśrī**pramukhā mudā /  
 tatsaddharmasudhāṃ pātum upācāran prasādītāḥ // 8  
 tathā santo mahāsattvā bodhisattvāḥ śubhārthinaḥ /  
 saddharmasādhanotsāhāḥ samāyayuh praharṣītāḥ // 9  
 śrāvakā bhikṣavo 'rhanto yatayo brahmacāriṇaḥ /  
 yoginaś cailakāś cāpi tathānye cāpy upāsakāḥ // 10  
 bhikṣuṇyo {2a} brahmacāriṇyo cailikāś cāpy upāsikāḥ /  
 evam anye 'pi lokāś ca brāhmaṇā ṛṣayo 'pi ca // 11  
 rājāno rājaputrāś ca vaiśyāś ca mantriṇo janāḥ /  
 amātyāḥ śreṣṭhino bhṛtyā yoddhṛsainyādhipā api // 12  
 śilpino vaṇijaś cāpi sārthavāhā mahājanāḥ /  
 paura jānapadā grāmyās tathānyadeśavāśīnaḥ // 13  
 sarve te samupāgatya samīkṣya taṃ **jayaśriyam** /  
 sabhāsanāsamāsīnaṃ praṇatvā samupācāran // 14  
 tatra sarve 'pi te lokāḥ samupetya samādarāt /  
 yathāvidhi samabhyarcya sāñjalayaḥ praṇemire // 15  
 tataḥ pradakṣiṇīkr̥tya parivr̥tya samanta[2a]taḥ /  
 puraskṛtya samudvīkṣya dharmam śrotum upāśrayan // 16  
 tān sarvān samupāsīnān dr̥ṣṭvā so 'rhan mahāmatīḥ /  
 āryasatyam samārabhya saddharmaṃ samupādiśat // 17  
 tat saddharmāmṛtaṃ pītva sarve lokāḥ prabodhitāḥ /  
 saddharmasādhanotsāhaṃ samprāpyābhīnanandire // 18  
 tataḥ sarve 'pi lokāś te śrīghanasya mahāmuneḥ /  
**buddhajanmāvadānaṃ** ca saṃśrotum abhileṣire // 19  
 tān evaṃ{2b}vāñchino dr̥ṣṭvā **jinaśrīḥ** sa mahāmatīḥ /  
 samutthāya puro gatvā praṇatvā taṃ jayaśriyam // 20  
 udvahann uttarāsaṃgaṃ jānubhyāṃ bhuvī saṃsthitam /  
 sāñjaliḥ suprasannāsyāḥ sampaśyann evam abravīt // 21  
 bhadanta śrotum icchanti **buddhajanmasubhāṣitam** /  
 sarva ime sabhāsīnās tat samādeṣṭum arhati // 22  
 iti samprār̥thite tena jinaśriyā samīkṣya saḥ /

jayaśrīṣ taṃ mahāvijñāṃ samāmantryaivam ādiśat // 23  
 sādhu śṛṇu mahāsattva yadi śrotuṃ samicchasi /  
**buddhajanmāvadānaṃ** tat saṃvakṣyāmi samāsataḥ // 24  
 yathā me guruṇādiṣṭaṃ jayabhadrena saddhiyā /  
 tathā mayā samākhyātaṃ śrutvānumodito bhava // 25  
 tathā sarve 'pi lokāś ca yan mayātrānubhāṣitam /  
 tan niśamyānumoditvā prasīdantu prabodhitāḥ // 26  
 tadyathābhūt mahīpālo rājāśoko nṛpādhipaḥ /  
 nagare pāṭalīputre saddharmasaṃpracāraḥ // 27  
 tadaikasamaye tatra sambuddhaguṇalālasaḥ /  
**sambuddhajanmasāṃkathyaṃ** saṃśrotum abhyavāñchata // 28  
 tataḥ sa nṛpatī {3a} rājā sagurumantripaurikaḥ /  
 vihāre kukkuṭārāme mahotsāhaiḥ mudācarat // 29  
 tatra prāptaḥ sa bhūmīndro dṛṣṭvārhanataṃ yatim gurum /  
 upaguptaṃ samālokya praṇatvā samupācarat // 30  
 tataḥ pūjopacārais taṃ samabhyarcya sasāṃghikam /  
 sāñjaliḥ praṇatiṃ kṛtvā saṃpaśyann evam abravīt // 31  
 bhadanta śrotum icchāmi {2b} sambodhijñānasādhanam /  
**buddhajanmāvatāraṃ** yat tat samādeṣṭum arhati // 32  
 iti saṃprārthitaṃ rājñā śrutvā so 'rhan mahāmatiḥ /  
 upagupto narendraṃ taṃ saṃpaśyann evam ādiśat // 33  
 sādhu śṛṇu mahārāja yathā śrutaṃ mayā guroḥ /  
 tathāhaṃ te pravakṣyāmi **sambuddhajanmasāṃkatham** // 34  
 etad ādiśya vijñāḥ sa upagupto mahāmatiḥ /  
 triratnasamsmaran dhyātvā tasthau kṣaṇaṃ samāhitaḥ // 35  
 tadā sādhdhinagā sarvā cacāla ṣaḍvidhā mahī /  
 puṣpareṇuvahā vātā vavuh ṣanaiḥ suśītalāḥ // 36  
 vahnīndusūryatārāś ca virejire prasādītāḥ /  
 diśaḥ prasēdire sarvā nipetuḥ puṣpavṛṣṭayaḥ // 37  
 suradundubhayo neduḥ gambhī{3b}raniḥsvanā ghanāḥ /  
 nirutpātaṃ śubhotsāhaṃ prāvartata samantataḥ // 38  
 etadbhadranimittāni dṛṣṭvā sarve surādayaḥ /  
 lokā dharmāmṛtaṃ pātuṃ samicchantāḥ pracerire // 39  
 tatra śakrādayo devā brahmādayo maharṣayaḥ /  
 sarve lokādhipāś cāpi sabhṛtyajanapaurikāḥ // 40  
 yogino yatayaś cāpi tīrthikāś ca tapasvinaḥ /

brāhmaṇāḥ kṣatriyā vaiśyā rājaputrās ca mantriṇaḥ // 41  
 amātyās ca janā bhṛtyā yoddhṛsainyādhipā api /  
 śilpino vaṇijaś cāpi sārthavāhā mahājanāḥ // 42  
 gr̥hasthāḥ paurikās cānye grāmyā jānapadā api /  
 nairgamāḥ pārvatīyās ca tathānyadeśavāsinaḥ // 43  
 sarve te dharmasāṃkathyaṃ śrotukāmāḥ pramoditāḥ /  
 vihāre kukkuṭārāme sahasā samupācaran // 44  
 samprāptās tatra te sarve dṛṣṭvā taṃ sugatātmajam /  
 saṅghamadhyāsanāsīnaṃ praṇatvā samupācaran // 45  
 tataḥ sarve 'pi te lokās tam arhantaṃ sasāṅghikam /  
 yathākramam samabhyarcya praṇemire samādaram // 46  
 tataḥ pradakṣiṇīkr̥{4a}tya parivṛtya samantataḥ /  
 tat saddharmāmṛtaṃ pātum upatasthūḥ samāhitāḥ // 47  
 sarvāṃs tān samupāsīnān dṛṣṭvā [3a] so 'rhan prasāditaḥ /  
 taṃ narendraṃ sabhālokān saṃpaśyann evam ādiśat // 48  
 śṃudhvaṃ sakarā lokāḥ sarve yūyaṃ samādarāt /  
**sambuddhajanmasāṃkathyaṃ** pravakṣāmi samāsataḥ // 49  
 tadyathāsau jagannāthaḥ sambodhinihitāśayaḥ /  
 bodhicaryāvratam dhṛtvā pracacāra jagaddhite // 50  
 tataḥ sambodhisambhāram pūrayitvā yathākramam /  
 daśabhūmīśvaro nāthaḥ sarvadharmādhipo 'bhavat // 51  
 tatra sa dharmameghākhyabodhisattvālayāśritaḥ /  
 sarvān buddhān bhajan nityaṃ samācaraṇ jagaddhite // 52  
 bodhicaryāṃ samārabhya saddharmaṃ samupādiśa[n] /  
 sarvāṃs tān sāmāraṃḥ lokān bodhimārge nyayojayat // 53  
 evaṃ sa trijagalloke saddharmaṃ samprakāśitum /  
 kāṅkṣamaṇaḥ kalau lokān paśyaṃs tasthau vicārayan // 54  
 tadātra bhūtale lokāḥ sarve pañcakaṣāyitāḥ /  
 āsan māragaṇāraktāḥ saddharmagaṇaniḥspṛhāḥ // 55  
 tat samī{4b}kṣya mahābrahmā mahāsattvaṃ tam īśvaram /  
 sametya sāñjalir natvā prārthayann evam ādarāt // 56  
 bhagavan bhavataḥ pūrvam pratijñātaṃ yathā sadā /  
 tathā tat samaye prāpte sampūrayitum arhati // 57  
 iti saṃprārthitaṃ tena brahmaṇā sa mahāmatih /  
 śrutvā bhūyaḥ samālokya manasaivam vyacintayat // 58  
 batādhunā mahīloke kalivṛttiḥ pravartate /

tat tatra kāmadhātviśo māro hi prabalībhavet // 59  
 tatas tasya narāḥ sarve vaśaṃgāḥ kāmācārīṇaḥ /  
 kleśābhīmānino duṣṭāś careyuḥ pātakeṣv api // 60  
 durāśāyā durācārā durmitrasaṅgacārīṇaḥ /  
 saddharmāṇi pratikṣīpya pracareyu yathecchayā // 61  
 tataḥ te duritāraktā daśākuśalacārīṇaḥ /  
 duḥkhāgnidāhitātmānaḥ pateyur narakeśv api // 62  
 tatraiko 'pi mahābhijñāḥ śāstā saddharmadeśakaḥ /  
 bodhisattvo mahāsattvo vidyate naiva kutracit // 63  
 tasmāt kas tān narān mūḍhān samāśvāsya prabodhayan /  
 triratnaśaraṇe sthāpya bodhimārge nya[3b]yojayet // 64  
 tad ahaṃ sāmpratam janma āsādyā nṛpasatkule /  
 bodhicaryāvratam dhṛtvā pracareyam {5a} jagaddhite // 65  
 tato gṛhāśramam tyaktvā pravrajitvā vanāśrame /  
 duṣkaram tāpasaṃ kṛtvā sarvān kutīrthikān jayan // 66  
 sarvān māragaṇān jitvā saṃprāpya bodhim uttamām /  
 niḥkleśo nirmalātmārhan saṃbuddhapadam āpnuyām // 67  
 tato yathā pratijñātam pūrayeyam tathā khalu /  
 jagad dharmamayam kṛtvā sunirvāṇam samāpnuyām // 68  
 iti dhyātvā viniścītya bodhisattvaḥ sa sanmatīḥ /  
 dharmameghābhuvāś cyutvā tuṣṭitāyām samāyayau // 69  
 tatra tam samupāyātam drṣṭvā sarve pramoditāḥ /  
 bodhisattvā mahāsattvāḥ praṇatvaivam babhāṣire // 70  
 bhagavan svāgataṃ kaccit kauśalam bhavadāśrame /  
 sametu sarvadātraiva tiṣṭhatu dharmam ādiśan // 71  
 iti saṃprārthitam sarvair bodhisattvair niśamya saḥ /  
 bodhisattvo mahāsattvas tān paśyann evam abravīt // 72  
 āyāmy atra bhavanto 'haṃ gantum mahītale 'dhunā /  
 nṛpajanma samāśādyā saṃbuddhapadam āpnuyām // 73  
 tataḥ sarvatra lokeṣu saddharmaṃ saṃprakāśayan /  
 jagad dharmamayam kṛtvā sunirvāṇam samāpnuyām // 74  
 ity evam tatsamādiṣṭam śrutvā te sugatātma{5b}jāḥ /  
 sarve 'pi tam mahāsattvam prārthayann evam ānatāḥ // 75  
 bhagavan bhavatā sārđham gamiṣyāmo mahītale /  
 yāvan na samayo gantum tāvad vijayatām iha // 76  
 iti saṃprārthitam sarvaiḥ śrutvā sa mahāmatīḥ /

≈ L 10.15-18; H 286.18-20.

tatheti pratibhāṣitvā tatra sthātum samaicchata // 77	
tatas taṃ sthātum icchantam matvā te sugatātmajāḥ /	
bodhisattvā mahāsattvāḥ prābhyanandan prasāditāḥ // 78	
tatas te taṃ mahāsattvam abhiṣiñcya yathāvidhi /	
bhadrāsane pratiṣṭhāpya samabhyarcyābhajan mudā // 79	
tato brahmādayaḥ sarve munayaḥ samupāgatāḥ /	
śakrādayaḥ surāḥ sarve sarvalokādhipā api // 80	
sarve grahās ca tārās ca svasvaparijanānvitāḥ /	
samāgatya tam ālokya praṇatvā[4a]rād upācaran // 81	
te 'pi sarve samabhyarcya taṃ vimāne maṇimaṇḍite /	
ratnāsanasamāsīnaṃ saṃstutvā prābhajan mudā // 82	
tataḥ sarve 'pi te devā dharmam śrotuṃ samantataḥ /	
parivṛtya tam ālokya samupatasthire kramāt // 83	
tān sarvān samupāsīnān samīkṣya {6a} sa mahāmatīḥ /	
bodhicaryān samārabhya saddharmam samupādiśat // 84	≈ L 11.4-7; H 288.9-12.
tat saddharmāmṛtam pītvā sarve te sampramoditāḥ /	
triratnabhajanaṃ kartuṃ protsehire prabodhitāḥ // 85	
tato 'psarogaṇās cāpi sagandharvahayānanāḥ /	
saṅgītinṛtyasaṃcāraiḥ prābhajams taṃ jinātmajam // 86	
tūryasaṅgītinādebhyas tebhyo buddhānubhāvataḥ /	
imāḥ saṃcodanāgāthā niścerus tasya daivikāḥ // 87	≈ L 11.7-9; H 288.13-14.
smara puṇyaviśuddhātman prajñāratna prabhākara /	
vyākaraṇam tvayā labdham dīpaṅkarasya sat purā // 88	≈ L 11.10-11; H 288(vs.)1.
smara nirmalasambuddhe yad dānam arthivāñchitam /	
svadeham api saṃdattam tvayā purā jagaddhite // 89	≈ L 11.12-13; H 288(vs.)2.
smara suśīla bhadrātman śamathadamakṣamāvraṭa /	
vīryadhyānavaraiḥ prajñā saṃsādhitā tvayā purā // 90	≈ L 11.14-15; H 290(vs.)3.
smarānantamahatkīrte ye 'tītāḥ sugatās tvayā /	
śraddhayānekakalpāni saṃsevītā yathāvidhi // 91	≈ L 11.16; H 290(vs.)4ab.
tatsamayo 'dhunā prāpto yatra tvayā samīkṣitāḥ /	
yathā tvayā pratijñātam tathā tat paripūryatām // 92	≈ L 11.17; H 290(vs.)4cd.
cyutvā vraja mahīloke duṣṭakleśārisūdana /	
sarve 'pi samudīkṣante lokapālās tvadāgatiḥ // 93	≈ L 11.18-19; H 290(vs.)5.
kalpako{6b}ṭisahasrāni ramitvāpi na tṛptitā /	
tat prajñāmṛtasamṛptas tathā lokān pratarpaya // 94	≈ L 11.20-21; H 290(vs.)6.
kiñ cāpy asi mahāsattvaḥ saddharmaguṇasaṃratīḥ /	

na kāmarasikas tasmād dharmāmṛtaṃ pravaraṣaya // 95	≈ L 11.22-12.1; H 290(vs.)7.
kiñ cāpi sakalā devā dharmāmṛtaṃ nipīyate /	
naiva tṛptiṃ vrajanty evaṃ mahyām api pravaraṣaya // 96	≈ L 12.2-3; H 290(vs.)8.
kiñ cāpy apāyasaṃlagnān sattvān paśya kṛpānidhe /	
kiñ cāpi sugatān paśya dharmāmṛtapravaraṣiṇaḥ // 97	≈ L 12.4; H 292(vs.)9ab.
sarve lokāḥ pi[4b]beyus te dharmāmṛtaṃ samādarāt /	
<< te 'pi sarve mahāsattvā bhaveyur bodhicāriṇaḥ // >> 98	
tat sambodhiṃ samāsādyā dharmacakraṃ pravartayet /	
śīghraṃ visarja saddharmaṃ sarvatra bhuvaneṣy api // 99	≈ L 12.5; H 292(vs.)9cd.
kiñ cāsmin tuṣite tvacchrīprabhayā śobhitam jagat /	
tathā jambudhvaje gatvā dharmāśriyā praśobhaya // 100	≈ L 12.6; H 292(vs.)10ab.
lokāḥ sarve 'bhivāñchante pātuṃ dharmāmṛtaṃ tava /	
tad āśu bodhiṃ āsādyā sarvatra saṃpravaraṣaya // 101	≈ L 12.7; H 292(vs.)10cd.
jitvā māragaṇān sarvāṃs tīrthikāṃś ca pravādiṇaḥ /	
kleśāgnitāpitāṃl lokān prahlādaya vṛṣāṃśubhiḥ // 102	≈ L 12.10-13; H 292(vss.)12-13.
tvam traidhātuvicārajña sarvakleṣāturaṃ jagat /	
trivimokṣamahauśadhaiḥ svasthī(7a)kṛtya sukhīkuru // 103	≈ L 12.14-15; H 292(vs.)14.
pracarante 'dhunā sarve tīrthikā abhimānikāḥ /	
āśrutvā siṃhasaṃnādaṃ nadantaḥ kroṣṭukā iva // 104	≈ L 12.16; H 294(vs.)15ab.
sambuddhasiṃhasaṃnādaṃ naditvā sarvataś caran /	
trāsaya tīrthikān sarvān śṛgālān iva keśarī // 105	≈ L 12.17; H 294(vs.)15cd.
prajñāratnamahādīpaṃ prajvālaya samantataḥ /	
kleśāndhatāmasaṃ hatvā dharmālokaṃ prakāśaya // 106	≈ L 12.18; H 294(vs.)16ab.
jitvā mārān samāsādyā bodhiṃ buddhapadaṃ labha /	
sarve te bhajanotsāhaṃ prāptum icchanti mānavāḥ // 107	≈ L 12.19; H 294(vs.)16cd.
catvāro lokapālās te sambuddhāya jinātmane /	
pātraṃ dātuṃ samicchantaḥ saṃtiṣṭhante samīkṣya hi // 108	≈ L 12.20; H 294(vs.)17ab.
śakro brahmā ca jātaṃ tvāṃ samāgrahītum icchataḥ /	
vyavalokaya jagatlokaṃ bhavatsaṃdarśanotsukam // 109	≈ L 12.21; H 294(vs.)17cd.
yatra jāto mahācaryāṃ saṃcārayitum icchasi /	
tad viśuddhakulaṃ paśya saddharmakarmasādhane // 110	≈ L 12.22-13.1; H 294(vs.)18.
yatraiva hi mahāratnaṃ saṃtiṣṭhate prabhāsayan /	
tatraiva śrī mahacchobhā bhājanaṃ saṃvirājate // 111	≈ L 13.2; H 294(vs.)19ab.
evaṃ matvā mahāsattva gatvāśu bhūtale 'dhunā /	
sarvadharmādhipo bhūtvā dharmāmṛtaṃ pravaraṣaya // 112	≈ L 13.3; H 294(vs.)19cd.
yathā tvayā pratijñātaṃ sadā sarveṣu janmasu /	

tathā tvam adhunā smṛtvā sampūrayitum arhati // 113	≈ L 13.5; H 294(vs.)20d.
evaṃ bahu{7b}prakārās ca tūryasaṅgītinisvanāḥ /	
tasya saṃcodanāgāthā niścera bodhisādhane // 114	≈ L 13.4-5; H 294(vs.)20a-c.
tac chru[5a]tvā sarvadharmendro bodhisattvaḥ purā kṛtam /	
praṇidhānam anusmṛtvā samīkṣaivaṃ vyacintayat // 115	
batādhunā mahīloke kalivṛtīḥ pracaryate /	
tat tatra mānavāḥ sarve bodhicaryānirutsavāḥ // 116	
māracaryāsamācārā durvṛtticāriṇaḥ śaṭhāḥ /	
kleśābhīmānino mūḍhāḥ kāmabhogātilālasāḥ // 117	
saddharmadeśakaḥ śāstā kaścin na vidyate 'dhunā /	
sarvatra tīrthikā eva pracarante pravādiṇaḥ // 118	
tad dharmasaṃnatāḥ sarve śṛṇvanti tatprabhāṣitam /	
tena te manuḷāḥ sarve bhavanti bauddhanindakāḥ // 119	
tatra kaḥ śṛṇuyād dharmam bauddham sambodhisādhanam /	
tat katham bhūtale gatvā cārayeyaṃ jagaddhite // 120	
atha yathā pratijñātam sādhya na katham tathā /	
aho yat praṇidhānam me tat katham viphalībhavet // 121	
iti cintāsamākrāntahṛdayaḥ sa mahāmatīḥ /	
samutthāya tato gatvā dhyānāgāraṃ samāśrayat // 122	
tatra svāsana āśritya sarvān buddhān anusmara{8a}n /	
sambodhipraṇidhiṃ dhṛtvā samādhiṃ vidadhe sudhīḥ // 123	≈ L 3.10-11; H 270.21-22.
samādhidadhata tasya mahoṣṇīṣaviniḥṣṛtā /	
buddhānusmṛtisaṃjñānamahāraśmiḥ prasāritā // 124	≈ L 3.11-14; H 270.22-25.
so 'vabhāsyā jagat sarvaṃ śuddhāvāsasurālayam /	
maheśvaramukhān devān sarvān ca samabhāsayat // 125	≈ L 3.14-15; H 270.25-27.
tatas tadraśminiryātā gāthāḥ saṃcodanā imāḥ /	
maheśvaramukhān sarvān devān evam acodayat // 126	≈ L 3.15-16; H 270.27-28.
yaḥ <b>śvetaketuḥ</b> sugatātmaḥ 'sau	
jñānākaro nirmalaśobhitātmā /	
bhadrārthabhṛt sarvaguṇādhirāḷaḥ	
saṃbodhisattvo jinarāḷakalpaḥ // 127	
gatvā mahīndrasya kule viśuddha	
āsādyā janmatriguṇārthakārī /	
sambodhicaryāvratam ādadhānaś	
caraṇī jagadbhadraguṇārthabhartā // 128	
vihāya rājyaṃ viṣayāṃś ca sarvān	

svayaṃ pravrajyāvratam ādadhānaḥ /  
 taptvā vane tīvratapo 'pi sarvān  
 nirjitya tīrthavratacāriṇaś ca // 129  
 mārān sasaṃghāñ caturo 'pi jivā  
 bodhidrume dhyānasamāhitā[5b]tmā /  
 sambodhim āsādyā jagaddhitārthaṃ  
 bauddhaśriyaṃ prāpya bhaven munīndraḥ // 130  
 tatas triratnānugūṇān prakāśya  
 saddharmacakraṃ parivartayan saḥ /  
 sambodhimārgān upadiśya {8b} sarvāṃl  
 lokān sudharmānucarān vidadyāt // 131  
 evaṃ sa śāstā tribhavādhināthaḥ  
 kṛtvā jagad dharmamayaṃ viśuddham /  
 sambuddhakāryaṃ sakalaṃ samāpya  
 sunirvr̥taḥ svālayam āviśec ca // 132  
 iti prabuddhā sakalā bhavantaḥ  
 sambodhicaryāpravikāśārtham /  
 taṃ śvetaketuṃ tribhavādhiraṃ  
 sametya bhaktyā śaraṇaṃ vrajantu // 133  
 tasyābhidhṛtvāpy anuśāsanāni  
 sambuddhadharmaprovikāśanārtham /  
 sambodhicaryāvratam ādadhānaḥ  
 sarvatra lokān abhicodayantu // 134  
 iti samcodanāgāthāḥ śrutvā sarve pi te 'marāḥ /  
 tadbhāspr̥ṣtasukhādyāś ca viśmayaṃ samupāyayuḥ // 135  
 batāyaṃ bodhim āsādyā śvetaketuḥ kalāv api /  
 saddharmaṃ samupādiśya pracārayet samantataḥ // 136  
 tad vayaṃ sahasā gatvā satkṛtya taṃ maheśvaram /  
 sarvalokahitārthe 'tra prārthayema samādarāt // 137  
 iti te sammataṃ kṛtvā sarve saddharmavāñchinaḥ /  
 vyutthāya taṃ mahāsattvaṃ saṃprārthitum upācaran // 138  
 tatra te samupāśṛtya bodhisattvaṃ tam ādarāt /  
 samabhyarcyābhivanditvā prārthayann evam ānatāḥ // 139  
 bhagavaṃs trijagannātha sa{9a}rvadharmādhipa prabho /  
 yathā te vāñchitaṃ sarvaṃ tathā saṃsetsyate dhruvam // 140  
 tad bhavān bhūtale gatvā kalāv api jagaddhite /

sukule janma āsādhyā saṃdarśaya mahādbhutam // 141	≈ L 4.18-20; H 274.10-13.
tato bālye 'py adhītyāśu sarvavidyāntapāragah /	
jitvā pravādinah sarvāñ jayaśriyam avāpnuyāḥ // 142	≈ L 4.20-22; H 274.13-15.
tato yuvā vivāhitvā bhāryā kāntā manoramāḥ /	
yathāvidhi ramitvāpi saṃvṛtiṃ saṃpracāraya // 143	≈ L 4.22-5.1; H 274.15-16.
tatas tā ramaṇāḥ sarvās tyaktvā saṃbhoganiḥsprḥah /	
sarvān parigrahāṃś cāpi pravrajitvā vane caran // 144	
tapo 'tiduṣkaraṃ taptvā nirjitya sarvatāpasān /	
tato bodhidrumāsī[6a]no dhyātvā mārān vinirjayan // 145	≈ L 5.2; H 274.16-17.
tato nirmalabhadrātmā samādhinihitendriyah /	
samyagbodhiṃ samāsādhyā sambuddhapadam āpnuhi // 146	≈ L 5.2-3; H 274.17.
tatas tvam bhagavāñ chāstā sarvatraidhātukādhipah /	
saddharmaṃ samupādiśya pracāraya samantataḥ // 147	≈ L 5.3; H 274.17-18.
yathātītair jinaiḥ sarvaiḥ saddharmaṃ saṃpracāritam /	
bhavān api tathādiśya saṃcārayitum arhati // 148	≈ L 5.3-17; H 274.18-276.6.
iti saṃprārthitaṃ sarvais taiḥ śuddhāvāsakāyikaiḥ /	
śrutvā sa śvetaketus tat tū(9b)ṣṇībhūtvādhyuvāsa vai // 149	≈ L 6.1-2; H 276.13-14.
tad adhivāsitaṃ matvā sarve ta īśvarādayah /	
mahāsaṃmoditātmānaḥ saddharmaguṇalālasāḥ // 150	≈ L 6.3-4; H 276.15-16.
bodhisattvaṃ tam abhyarcya natvā sāñjalayo mudā /	
tridhā pradakṣiṇīkṛtya śuddhāvāsam yayus tataḥ // 151	≈ L 6.4-6; H 276.16-18.
athāsau bhagavān bhūyas tatsamādheḥ samutthitaḥ /	
tatpravṛttim upādeṣṭum sabhāsanam samāśrayat // 152	≈ L 6.7-8; H 276.19-21.
samīkṣya taṃ mahāsattvaṃ sabhāmadhyāsanāśritam /	
bodhisattvā mahāsattvāḥ sarve 'pi samupāyayuh // 153	≈ L 6.8-9; H 276.21.
tatra te samupāśṛtya sarve taṃ sugatātmajam /	
natvā sāñjalayas tatra sabhāyāṃ samupāśrayan // 154	
tān dṛṣṭvā samupāśinān bodhisattvān sasāṃghikān /	
śvetaketur mahātmā sa sampāsyann evam ādiśat // 155	≈ L 6.9-10; H 276.21-22.
bhavantaḥ śrūyatāṃ sarvair yan mayātra samucyate /	
śrutvānumodanāṃ kṛtvā sarve yūyam prasīdata // 156	
adya dhyānālaye dhyātvā saṃsthitasya mamāntike /	
avabhāsyā samāyātāḥ sarve śuddhālayāśritāḥ // 157	≈ L 7.3-4; H 278(vs.)7.
īśvaraś candanaś ceśo nandaḥ praśāntacittakaḥ /	
mahitaḥ sunandanaś ca śānta etanmukhāḥ surāḥ // 158	≈ L 7.5-6; H 278(vs.)8.
asaṃkhyeyāś ca ta(10a)saṃghāḥ sambuddhadharmalālasāḥ /	

sambodhisādhane me 'tra saṃcodayitum āgatāḥ // 159  
 sarve te mām samabhyarcya prārthayanti jagaddhite /  
 tathā mayā pratijñāya preṣitās te nijālayam // 160  
 tad ahaṃ bhūtale janma labdhvā kule mahīpateḥ /  
 bodhicaryāvṛtam dhṛtvā saṃvṛttim saṃpracārayan // 161  
 rājyāśramam pari[6b]tyajya vane taptvā suduṣkaram /  
 jītvā māragaṇān sarvāṃs tīrthakāṃs ca durāśayān // 162  
 bodhidrumam samāśritya samādhinihitāśayaḥ /  
 sambodhijñānam āsādhya bhaveyam sugataḥ kalau // 163  
 tataḥ sarvatra lokeṣu saddharmam saṃpracārayan /  
 samāpya saugataṃ kāryam jinālayam samāpnuyām // 164  
 ity ahaṃ bhūtale gatvā pratijñātam purā yathā /  
 tathā sarvaṃ prasādhitvā saṃpūrayitum utsahe // 165  
 tad bhavantaḥ samādhāya sarve saṃbodhimānasāḥ /  
 triratnabhajanam kṛtvā saṃcarantām sadā subhe // 166  
 kāle kāle samāgatya triratnaguṇavāñchinām /  
 saddharmaśravaṇotsāham dātum arhanti sarvadā // 167  
 iti śāstrā samādiṣṭam niśamya te jinātmajāḥ /  
 sarve tatheti vijñāpya prābhyanandan prabodhitāḥ // 168  
 {10b} tatas te ca mahābhijñā bodhisattvāḥ prasāditāḥ /  
 sarve tasmai sadābhadrasiddhāśiṣam dadur mudā // 169  
 bhagavan yat pratijñātam yathā saṃbodhisādhane /  
 tathā jagaddhitārtham te tat sarvaṃ sidhyatu dhruvam // 170  
 duṣṭās te vilayam yāntu mārās ca tīrthikā api /  
 sarve sidhyantu kāryāṇi sarvatrāpi jagaddhite // 171  
 brahmaśakrādayo devāḥ sarve lokādhipā api /  
 grahās ca tārakāḥ siddhāḥ sādhyā vidyādharā api // 172  
 sarve mātṛgaṇās cāpi saganaparivārikāḥ /  
 sadā te satsahāyās te bhūtvā rakṣantu sarvataḥ // 173  
 sarve lokā prasannās te saddharmāmṛtalālasāḥ /  
 satkṛtya śraddhayā bhaktyā bhajantu śaraṇāśritāḥ // 174  
 sadā sarvatra te bhadrāśrī sukīrtisamanvitam /  
 jayasiddhimahotsāham bhavatu nirupadravam // 175  
 bodhicaryāvratam dhṛtvā prañidhānam kṛtam yathā /  
 sarvasattvahitārthe 'pi saṃsiddhyeta na saṃśayaḥ // 176  
 iti satyam pariñāya saddharmasamprakāśitam /

≈ L 7.7-8; H 278(vs.)9.

≈ L 7.13-14; H 280(vs.)12.

buddhaśrīsampadam prāptuṃ saṃcarasva jagaddhite // 177  
 iti bhadraśiṣaṃ dattvā sarve te sugatātmajāḥ /  
 bodhi[7a]sattvās tam iśāṃsaṃ natvā svasvālayaṃ yayuḥ // 178  
 tato {11a} 'sau ca mahāsattvaḥ sarvān buddhān anusmaran /  
 sambuddhajanaprepsur mudaivaṃ samaghoṣayat // 179  
 śvetaketur mahāsattvo janma āsādyā bhūtale /  
 bodhicaryāvratam dhṛtvā saṃvṛtiṃ sampracārayan // 180  
 tapasā tāpasān sarvāñ jītvā mārān satīrthikān /  
 sambodhijñānam āsādhyā saṃbuddhaḥ syāt kalāv api // 181  
 tataḥ sa trijagacchāstā sarvadharmādhipo jinaḥ /  
 saddharmān samupākhyāya pracārayet samantataḥ // 182  
 tataḥ sa trijagannāthaḥ kṛtvā dharmamayaṃ jagat /  
 samāpya sautagataṃ kāryaṃ nirvṛtaḥ svālayaṃ vrajet // 183  
 iti satyaṃ vacaḥ śrutvā sarve tridhātukāśritāḥ /  
 lokāḥ samabhinandantu bhadrāśrīsadguṇāptaye // 184  
 ity evaṃ tan mahānādaṃ sarvatra bhuvaneṣv api /  
 saraśmikaṃ samudbhāsya prasasāra samantataḥ // 185  
 tataḥ sābdhinagā bhūmiḥ pracacāla pramoditāḥ /  
 vavau vāyuh sukhasparśaḥ sudhīraḥ śubhagandhabhṛt // 186  
 sarvamaṅgalavādyāś ca saṃpraneduḥ samantataḥ /  
 jyotiṣmantaś ca sarve 'pi prabhāsvarā virejire // 187  
 diśaḥ prasedire sarvā meghāś ca {11b} saṃprasāritāḥ /  
 sunirghoṣaṃ samutsṛjya puṣpavṛṣṭīr nyapātayan // 188  
 evam anyac chubhākāraṃ sarvadharmasukhapradam /  
 nirutpātaṃ mahotsāhaṃ prāvartata samantataḥ // 189  
 tan niśamya samālokya sarve lokā bhavāśritāḥ /  
 triratnadarśanotsāhaṃ saṃprāptuṃ pranānandire // 190  
 tataḥ sarve 'pi sambuddhāḥ pratyekasugatā api /  
 bodhisattvās ca sarve taṃ sudṛṣṭyā samalokayan // 191  
 brahmaśakrādayo devāḥ sarve lokādhipā api /  
 saganā mātrkāś cāpi grahāḥ sarve 'pi tārakāḥ // 192  
 yogino yatayaś cāpi munayaś ca tapasvinaḥ /  
 sarve vidyādharāḥ siddhā arhanto brahmacāriṇaḥ // 193  
 tathānye 'pi mahābhijñās triratnaguṇālāsaḥ /  
 mahāsattvaṃ tam ālokya saṃrakṣituṃ samicchire // 194  
 evaṃ sarve 'pi lokāś ca [7b] ṣaḍgatiprabhavā api /

sambuddhadarśanaṃ kartum utsahantaḥ pracerire // 195  
 evaṃ śāstrā munīndreṇa samākhyātaṃ svajātakam /  
 sāmpratam tat yathādiṣṭam śrutam mayā tathocyate // 196  
 tvam api ca mahārāja ta{12a}t śrutvānumodya sādaram /  
 śrāvaya sakalān lokān pracāraya samantataḥ // 197  
 bhāṣantīdam prasannā ye **buddhajanmasubhāṣitam** /  
 śrunvanti śrāvayanty atra lokāṃś ca saṃpramoditāḥ // 198  
 te sarve vimalātmāno bodhisattvāḥ śubhendriyāḥ /  
 bhadrāśrīguṇasampattīr bhuktvā yāyur jinālayam // 199  
 iti śāstropaguptena samādiṣṭam niśamya te /  
 aśokapramukhā sarve tathety uktvā prabodhitāḥ // 200  
 // tathāgatajanmāvadānamālāyāṃ tuṣitabhuvanāvātāraṇa-  
 sarvalokābhisam̐bodhanābhinandano nāma prathamo 'dhyāyaḥ //

### Apparatus criticus

- 20b sa] corr.: saḥ AB.  
 23c mahāvijñam] A: mahābhijñam B.  
 24b samicchasi] B: samīcchasi A.  
 33b mahāmatīḥ] corr.: mahāmati A.  
 34d sām̐katham] sic A. (m.c. for sām̐kathyam, 28c)  
 39d samicchantah] corr.: samīcchantah AB.  
 43c nairgamāḥ] sic Ms. Read \*naigamāḥ?  
 49a sakarā] A: sakalā B.  
 52a dharmameghākhyā A: dharmameghākhye B.  
 53c sarvāṃś tān] corr.: sarvāntān A(marg.).  
 55d niḥsp̐r̐hāḥ] corr.: nispr̐hāḥ A.  
 59a batādhunā] A: tatodhnā B.  
 64a: tasmāt kas tān] A(marg.): tat kas tān A: tasmān sās tān B.  
 77a sarvaiḥ] corr.: sarvais A.  
 89d jagaddhite] A: jagaddhita B. Cf. 141b.  
 91a °mahatk̐rte] ≈ °mahatk̐rtte B: °bhahatk̐rt[e] A.  
 98cd te pi sarve mahāsattvā bhaveyur bodhicāriṇaḥ] A(marginalia, seconda manu)B.  
 108c samicchantah] corr.: samīcchantah A: samīcchantuḥ B.  
 111b prabhāsayan] corr.: prabhāsayat AB.  
 134a tasyābhidh̐rtvāpy] sic AB.

140c vāñchitaṃ] corr.: vāñcitaṃ A  
 143d saṃvṛtiṃ] corr.: saṃvṛtiṃ A.  
 144b niḥsprhaḥ] corr.: nisprhaḥ A.  
 153c mahāsattvāḥ] corr.: mahāsattvā A.  
 159a asaṃkhyeyāś] B: asaṃkhyeyāś A.  
 161d saṃvṛtiṃ] corr.: saṃvṛtiṃ A.  
 167b vāñchinām] A: vāñchinaḥ B.  
 174a prasannās te] A: prasannās tau B.  
 184c samabhinandantu] ≈ samabhina[n]dantu A: samabhinadantu B.  
 194d saṃicchire] corr.: saṃicchire A.  
 196ab śāstrā munīndreṇa samākhyātaṃ] A(ante corr.): mama purā kṛtya[ṃ] samāsata[o] A(post corr. marginalia): mama purā kṛtyaṃ samāsata B.  
 196cd yathādiṣṭam śrutaṃ mayā tathocyate] A(ante corr.): mayā py evaṃ samākhyātaṃ tathā khalu A(post corr. marginalia)B.  
 197ab api ca mahārāja tat] A(post corr. marginalia)B (hypermeter!): apy ānanda yūyaṃ A(ante corr.; seconda manu!). **Note.** In A(ante corr.), letters of original scribe are lost by overwritten letters (seconda manu) of apy ānanda yūyaṃ.  
 197c śrāvaya] corr.: śrāvayaṃ AB.  
 200a śāstropaguptena] A(ante corr.; seconda manu!): śāstrā munīndreṇa A(post corr. marginalia)B. **Note.** Letters of stropaguptena are overwritten letters (seconda manu).  
 200c aśokapramukhā] A(post corr. marginalia): ānandapramukhā A(ante corr.; seconda manu!): āa(!)śokanandapramukhā B. **Note.** Letters of aśoka are overwritten letters (seconda manu). The letters of original scribe are lost by the overwritten letters.  
 (Colophon:) // tathāgatajanmāvadānamālāyāṃ] A(ante corr.): // iti lalitavistare tathāgatajanmāvadānamālāyāṃ A(post corr. marg.)B.

## TJAM 第1章和訳（全訳）

オーム、吉祥なる三宝と一切の仏・菩薩に帰命す。

絶えず生類 [の有様] を観ながら、護っておられる、偉大な仏である世尊のお教えが、一切世界において、常に勝利しますように。[1]

幸と美とよき諸徳質の相をもつ方である、偉大な女神たる、吉祥プラジュニャー（仏母般若波羅蜜）は、正法の達成に常に努力する人々を、常にお護りくださいますように。[2]

生き物たちのために法を保持する者である、仏子たるすべての菩薩たちは、一切世界に常に幸をもたらしますように。[3]

三宝帰依に安立して、偉大な仏の威神力により、私は三界の師（釈尊）についての『仏の出生アヴァダーナカ』（buddhajanmāvadānaka）を〔これより〕語ります。[4]

それ故、仏の諸性質を求める、高貴な大士（菩薩）である全ての者は、信仰心により、敬虔さをもって「菩提の達成」（bodhisādhana）〔のこの法話〕を聞きなさい。[5]

すなわち次の如くです。阿羅漢・大通智・仏子（菩薩）であるジャヤシュリー（jayaśrī）は、ボーディマンダ（bodhimaṇḍa）という名の寺に、僧団と共に住されていました。[6]

その時或る時にかのジャヤシュリーはその場所で世間を益するため、正法を説かんとして、集会場の座席に坐しました。[7] それを見て、ジナシュリー（jinaśrī）を〔弟子の〕首座とするすべての僧団の者たちは、浄信を有して、彼の正法の甘露を飲むため、悦んで〔その座の許に〕集まり来ました。[8]

同様に、浄行を願って正法の達成に熱心である、高貴な大士・菩薩たちも喜びながら、やって来ました。[9] 声聞たち・比丘たち・阿羅漢たち・出家行者たち・梵行者たち・ヨーガ行者たち・白衣行者たちや、また他の者たち、在俗の信者（優婆塞）たち、[10] 比丘尼たち、梵行尼たち、白衣尼たち、在俗の女信者（優婆夷）たちや、同様にその他の人々、バラモンたちや仙人たち、[11] 王たち、王子たち、ヴァイシャたち、大臣たち、高官たち、長者たち、家臣たち、將軍たち、[12] 工匠たち、商人たち、隊商主たち、名士たち、都民・地方民・村民や、また他の地方に住する者たち、[13] —彼らすべての人々が集まり来て、集会場の座に坐るかのジャヤシュリーを見て、お辞儀しながら、近づきました。[14]

彼らすべての人々は恭しくそこに集まってから、作法通りに敬意を示し、合掌し拝礼をなしました。[15] それから右邊し、〔彼らは彼を〕ぐるりと圍繞し、〔彼に〕随いつつ仰ぎ見ながら、法を聴聞しようと近坐しました。[16]

大慧あるかの阿羅漢は、それらすべての坐した者たちを見つめつつ、正法を〔四〕聖諦に関してお説きになられました。[17] その正法の甘露を飲んで、すべての人々は覚知し、また正法の達成への意欲を得て、歡喜しました。[18]

その後、それらすべての人々は、光輝に充ちた方（仏）たる偉大な牟尼（釈尊）についての『仏の出生アヴァダーナ』（buddhajanmāvadāna）を聞きたいと望みました。[19]

彼らがそのように願っているのを見て、かの大慧ある〔弟子〕ジナシュリーは起ち上がり、〔師の〕面前に行き、かのジャヤシュリーに向かって作礼してから、[20] 清らかな容貌をもつ者は、偏袒右肩し、地に膝をついて、合掌し、見つめつつ次の様に言いました。[21]

「尊師よ、集会場に坐るこれらすべての者たちは『仏の出生の善説語』（buddhajanmasubhāṣita）を聞きたいと欲しています。それ故、どうかそれをお説き下さい。」[22]

このようにそのジナシュリーに請われたかのジャヤシュリーは、大賢者である彼をみつめつつ話しかけて、次の様に説かれました。— [23]

よいことである（善哉）。大士よ、もしあなたが聞きたいと願うなら、聞きなさい。かの『仏の出生アヴァダーナ』（buddhajanmāvadāna）を簡略に私は語りましょう。[24] 私が師である勝慧者ジャヤバドラ（jayabhadrā）から教示されたその通りに、私は説きましょう。聞いて、随喜を得なさい。[25] 同様に、みなの人衆も、私がここで〔師説に〕従って説くこと（anubhāṣita）を聴聞して、覚知し、随喜して、淨信をもちなさい。[26]

すなわちかくの如くです。—かつて、大地の守護者・王中の王であるアショーカ王が、正法の宣布者として、都城パータリプトラにいました。[27]

その時或る時に、其処で、仏の勝れた諸性質を熱望する彼は、『仏の出生の法話』（sambuddhajanma-sāṃkathya）を聴聞したいと欲しました。[28]

そこでかの王・人民の主（アショーカ）は、師長や大臣や都民たちを伴って、大きな意欲をもって、クックターラマ（kukkuṭārāma）寺院に悦んで赴きました。[29] そこに到着すると、かの大地の王は、阿羅漢・出家行者・師ウパグプタ（upagupta）を見て、作礼して、近づきました。[30] そして供養の品々をもって、彼と僧団の人々に敬意を示し、合掌し拜んでから、見つめつつ次の様に言いました。[31]

「尊師よ、「菩提の知の達成」（sambodhijñānasādhana）、「仏陀の誕生・降下」（buddhajanmāvātāra）をどうかお説きください。」[32]

このように王が請うのを聞いて、かの阿羅漢・大慧者ウパグプタはその王を見つめて、次の様に教示しました。[33]

「よいことである（善哉）。大王よ、聞きなさい。私が師から聞いたとおりに、そのままあなたに『仏の出生の法話』（sambuddhajanmasāṃkatha）をお話ししましょう。」[34]

こう説いて、かの学識ある大慧者ウパグプタは三宝を憶念しつつ、静慮して、瞬時に精神を集中しました。[35]

その時、大地すべては海や山と共に、六種に震動しました。花粉を運ぶ、清涼な風が穏やかに吹きました。[36] 火と月と太陽と星々は清明に輝きました。あらゆる方角の空間が澄んで明るくなり、花の雨が落ちました。[37] 天鼓が響き、雲は深い音を出しました。災害のなさや幸福の喜びがあらゆる処に起こりました。[38]

そのめでたい前兆を見て、神々などすべての生類が、法という甘露を飲もうと願って、やって来ました。[39] シャクラ（インドラ神）などの神々、ブラフマー神をはじめとする大仙たち、あらゆる世間主たち、その家臣や都民たち、[40] ヨーガ行者・出家行者・外道師・苦行者たち、バラモン・クシャトリア・ヴァイシャたち、王子や大臣たち、[41] 高官・家臣・将軍たち、工匠・商人・隊商主・名士たち、[42] 資産家たち、都民たちや他の、村民や地方民たち、町民や山の民、また他の地方居住民たち、[43] —それらすべての者たちは喜び、法話を聞かんと欲して、クックターラマ寺院にただちに集まって来ました。[44]

そこに到着した彼らすべては僧団の中央の座に坐っているかの仏子〔ウパグプタ〕を見て、拝礼をなし、近づきました。[45] それからそれらすべての生類は、礼法の順序どおりに敬意を示し、恭しく〔彼を〕拝みました。[46] それから右邊し、〔彼を〕ぐるりと囲繞し、その正法の甘露を飲まんがため、心を集中して近坐しました。[47]

それらすべての坐した者たちを見て、心よろこぶかの阿羅漢（ウパグプタ）は、その王（アショーカ）と集会場の衆を見つめながら、次の様に説きました。— [48]

よく注意を払って聞きなさい、あなた方、光輝くすべての方々よ。『仏の出生の法話』（sambuddhajanmasāṃkathya）を私は簡略に語りましょう。[49]

すなわち、次のとおりです。かの世の守護者、悟りにむけて心を定めた者（菩薩、前世の釈迦牟尼）は、菩提行の誓戒を堅持しつつ、生類の益のために活動していました。[50] そして〔菩薩道の〕順序どおりに、悟りに〔必要な〕資糧を円満させて、十地の王・守護主・一切法王となりました。[51]

その時彼はダルマメーガー（法雲）という名の〔第十の〕菩薩地にいて、あらゆる仏たちを供養しつつ、また常に世の益のために活動しつつ、正法を菩提行に関して説法し、天を含むあらゆる生類を、菩提道へと安立させました。[52-53]

このようにして彼は三界の生類に正法を説き明かさんと〔適時を〕待ちながら、カリ期にいる人々を見ながら、考慮しつつ居ました。[54]

その時、この地上においてはすべての生類が五濁に墮落し、魔の〔悪い〕性質を楽しみ、正法の〔善い〕性質を望みませんでした。[55]

そのことを見て、大梵天はかの大士・自在者（菩薩）の許に来て、合掌して拝み、丁寧に次の様にお願ひしました。[56]

「世尊よ、あなた様がかつてされました誓いを、その通りに、適切な時が来た時に、成し遂げてくださいますよう、お願ひ致します。」[57]

このようにその梵天が請うのを聞いて、かの大慧者はもう一度観察して、心中に次の様に熟慮しました。[58]

「ああ、今、地上ではカリ期の所業が起こっている。そのため其処では欲界の王である魔が支配力をふるっている。[59] それ故、すべての人間は彼に服従し、欲望のままに振舞っている。煩惱と慢心をもち、墮落して、罪悪をなしている。[60] 悪心をいだし、悪行をなし、悪友と交わり、正法の徳を拒絶して、恣に振舞っている。[61] そして彼らは罪行を楽しみ、十不善業をなしたため、苦しみの火に焼かれて、地獄に墮ちている。[62]

かしこ（地上）には、大智者・師・正法を説く者・菩薩・大士が、たった一人も、どこにも存在しない。[63] それ故、一体誰がかれら痴迷の人々を鼓舞し、諭して、三宝という依り処に在ることを得させ、菩提道に安立せしめるだろうか。[64]

そこで、私は今や、王家のよい家系に誕生し、菩提行の誓戒を保ちながら、世の益のために活動することにしよう。[65] その後、私は家住期を捨てて、出家し、森の庵

において、[余人が] なしがたい苦行をなし、あらゆる悪い外道師たちを降伏せしめ、[66] あらゆる魔の群に打ち勝ち、最高の悟りに達して、煩惱のない清らかな心の者、阿羅漢となって、仏の位に私は達しよう。[67] そしてかつて[私が] 誓いをした、その通りに完遂して、世を[正しい] 法から成るもの (dharmamaya) に変えて、完全な涅槃を私は得よう。」[68]

このように熟考し決断して、善慧者であるかの菩薩は、ダルマメーガー (法雲) の[第十] 地から死没して、トゥシタ天 (兜率天) に[転生して] 行きました。[69]

其処で、[生まれ] 来た彼を見て、すべての菩薩・大士たちは喜び、拝礼をなして、次の様に語りました。[70]

「世尊よ、よくいらっしゃいました。望むらくは、[ここでの] あなたの住まいに幸いがあることを。どうか法を説かれながら、いつまでもここに留まって下さい。」[71]

このようにすべての菩薩・大士たちが請うのを聞いて、かの菩薩・大士は彼らを見つめながら次の様に言いました。[72]

「あなた方よ。私がここに来たのは、今地上に降りるためなのです。王家に誕生し、仏の位を得ます。[73] そしてあらゆる生類に正法を説き明かし、世を[正しい] 法から成るものに変えて、完全な涅槃に私は至ろうと思います。」[74]

以上のように彼が説くのを聞いて、それらの仏子すべては、その大士を拝しながら次の様に請いました。[75]

「世尊よ、あなた様と一緒に、私たちも地上に行きましょう。出発の時が来るまでは、どうかここを統治してください。」[76]

このようにすべての者たちが請うのを聞いて、かの大慧者は「わかりました」と答え、そこに留まろうと欲しました。[77]

するとかれら仏子たち、菩薩・大士たちは、彼が留まろうと欲したと考えて、心が晴れやかになり、歓喜しました。[78] その後、彼らはその大士を礼式どおりに灌頂し、王座に立たせて、悦んで常に恭敬し、信奉しました。[79]

その後、梵天をはじめとする一切の牟尼たちが[彼の許に] やって来ました。またシャクラ (インドラ) などのあらゆる神々、すべての世界支配者たち、[80] すべての[九] 曜、星々 (星宿) たちもそれぞれの眷属を連れてやって来て、彼を見て拝礼し、遠くから近づきました。[81] 彼ら (諸天) すべては、宝玉に飾られた天車 (vimāna) の上で彼を恭敬し、宝石の座に坐る彼を讃嘆しつつ、悦んで信奉しました。[82] それから彼ら神々は法を聴聞せんとして、[彼を] ぐるりと圍繞して、彼を見つめながら整然と並んで、近坐しました。[83]

---

7. 後の第127詩節から、菩薩はこの時 Svetaketu (淨幢) という名であることが判明する。

それらすべての坐した者たちを見て、かの大慧者は菩提行に関する正法の説法を行いました。[84] その正法の甘露を飲んで、かれらすべては歓喜し、覺知を得て、三宝を奉事せんと意欲しました。[85]

そして天女たち、ガンダルヴァ（天の樂師）たち、馬面（hayānana）たちは合奏・舞踏の振舞をもって、かの仏子を奉事しました。[86]

〔その時〕諸仏の威神力によって、トゥールヤ樂器の合奏の音から、彼への勸発の偈頌が神々しく次の様に現れました。[87]

「思い出せ、福德によって心清き者よ、智慧の宝石よ、光輝を作り出す者よ。汝がかつてディーパンカラ（燃燈仏）のよき予言を得たことを。[88]

思い出せ、汚れなき知性を有する者よ。汝がかつて前世に、乞う者たちに望む布施を与え、自分の身体までも、世を益するために与えたことを。[89]

思い出せ、よき戒徳の者よ、麗しい心の者よ、寂止と自制と忍耐の誓戒を堅持する者よ。汝がかつて前世に、すぐれた精進と禪定により、般若（智慧）を成就したことを。[90]

思い出せ、無限の偉大な名声をもつ者よ。汝が信仰心により過去の善逝たちに多くの劫の間、丁重に仕えたことを。[91]

今や、汝が待っていたその時が到来した。汝が誓いをしたとおりに、それを完遂せよ。[92]

罪と煩惱という敵を滅ぼす者よ。下生して、地上世界へ行くがよい。すべての世間主（護世神）たちが汝の到来を待っている。[93]

〔たとえ〕百億劫の間、楽しんだとしても、飽き足りることは無い。〔汝は〕般若という甘露によって満腹した者として、同様に生類を満腹させよ。[94]

また更に、汝は正法の性質を楽しむ大士であり、愛欲を楽しむ者ではない。それ故、〔下生して〕法の雨を降らせよ。[95]

また更に、すべての神々は〔汝の〕法の甘露を飲んでいますが、それでも飲み飽きることはない。〔しかし〕同様に地上にも〔法雨を〕降らせよ。[96]

また更に、憐愍の宝蔵よ、悪趣に墮ちている有情たちを見よ。また更に、法の甘露を雨降らせている善逝たちを見よ。[97]

すべての生類は汝の法の甘露を熱心に飲むであろう。＜彼らすべては菩提行をなす大士となるであろう。＞[98]

それ故に悟りに達して、法輪を転ぜよ。すみやかに正法〔の雨〕をあらゆる世界に注げ。[99]

また更に、このトゥシタ天において、生類は汝の威徳の光線によって、光輝くものとなった。同様に、閻浮提に行つて、法の威光をもって輝かせよ。[100]

あらゆる生類は汝の法の甘露を飲まんと欲する。それ故、速やかに悟りに達して、一切処に雨降らせよ。[101]

魔の群と、あらゆる外道師たち・説教者たちに勝利して、煩惱の火に焼かれている生類を、徳行の光線 (vṛṣāṃśu) をもって清涼たらしめよ。[102]

三界の審判者よ。汝は一切煩惱に病んだ生類を、三解脱門という大薬により、健康にさせ、安楽にさせよ。[103]

今や [地上では] あらゆる傲慢な外道師たちが横行している。まるで獅子の咆哮を聞かずに吠えているジャッカルどものように。[104]

仏という獅子の咆哮を響かせて、一切処に遊歩し、すべての外道師たちを恐れさせよ。獅子がジャッカルを恐れさせるが如く。[105]

智慧 (般若) という宝石で出来た、偉大な灯明を燃え立たせて、あまねく照らし示せ。煩惱の闇を打ち破って、法の光明を輝かせよ。[106]

魔どもに勝利して、悟りを、仏の位を得よ。すべての人間は汝を信奉することの歓びを得ようと欲する。[107]

あれら四人の護世天たちは、悟った仏子のために鉢を与えんと欲しつつ、待っている。[108]

シャクラ (インドラ) と梵天は誕生した汝を抱持せんと願っている。汝に会いたいと切望している生類たちを観察せよ。[109]

正法の行為の達成の時に汝が偉大な行をなさんと欲してその生まれる所となる、清らかな家系を観察せよ。[110]

偉大な宝石があつて [周囲を] 照らしている場所、そのみに、偉大な美しさをもつ光輝があつて、器 (bhājana) が輝くのだ。[111]

このように理解し、大士よ、すぐに今地上に行き、一切法王となつて、法雨を降らせ。[112]

あらゆる生においていつも汝は誓いをしてきたが、その通りに今や汝は思い出して、完遂されよ。」[113]

— 以上のように、トゥールヤ楽器の合奏中の多種多様な音が、彼を勧発する偈頌として、悟りの達成のために現れました。[114]

それを聞いて、一切法王たる菩薩は前生でなした誓願 (praṇidhāna) を思い出し、[下界を] 観察しつつ思惟しました。[115]

「ああ、現在地上世界ではカリ期の所業がなされ、それ故其処ではあらゆる人間が菩提行を欲しない。[116] 魔どもの行為に等しい行為をなす者、罪行をなす者、詐る者、煩惱と高慢を有する者、痴迷の者、欲望の享樂を欲する者たちである。[117] 今や正法を教える師は、皆無である。至る処で外道師ばかりが説教者として横行している。[118] それ故、法に思いを寄せる者たちは皆、彼らの説法を聴聞している。そのせいで彼らすべての人間たちは仏教徒 (bauddha) を非難する者となっている。[119]

其処では一体誰が諸仏の教法を、悟りの達成を聴聞できるだろうか。そのため私はどのように地に下生して、世の益のために行じるべきだろうか。[120] [わが] 誓いが

その通りにどうして達成できないことがあろうか。ああ、私の誓願がいかに空しくなりえようか。」[121]

と、思案に占められた心で、かの大慧者はそこから起ち上がり、禪定堂に行きました。[122] そこで自らの座席に坐り、あらゆる仏たちを憶念しながら、悟りの誓願を持しつつ、賢者は三昧に入定しました。[123]

彼が三昧に入っている間、[彼の]偉大な頂髻から、諸仏憶念智の大光明が発せられて拡がりました。[124] それは一切の有情世界、淨居天の住まいを照らし、大自在天を頭目とする神々すべてを照らしました。[125]

そしてその光明から、次のような勸発の偈頌が現れて、大自在天を頭目とするすべての神々を勸発しました。[126]

「かの仏子、シュヴェータケートゥ (*śvetaketu* 淨幢) は、智の宝庫・無垢なる輝ける者・気高い目的を懐く者・一切の徳質の王・仏にも等しい菩薩であり、[127]

下生して王家の清らかな家系に入り、[義務として] 人生の三種の目的を行いつつ、菩提行の誓戒を堅持し、生類たちの幸と [よき] 徳質という目的の保護者として行なうつつ、[128]

王権とあらゆる [感覚的享樂の] 領域を捨て、自ら出家の誓戒を保ち、森で激しい苦行をなし、外道の誓戒行者たちを打ち負かし、[129]

四 [軍] から成る群なす悪魔どもに勝ち、菩提樹の下で禪定に集中し、悟りに達して、世の利益のために仏としての栄光を得て、牟尼の王となるであろう。[130]

その後彼は三宝に適合した [法] を宣説して、正しい法輪を転じ、悟りへの道を説き示し、あらゆる生類をすばらしい法に随従する者にするであろう。[131]

このようにしてかの師・三界の守護主は、世界を法から成る、清らかなものに変え、あらゆる仏の仕事成し遂げてから、涅槃し、自らの住まいへと入るであろう。[132]

汝らすべての者はこのように理解し、菩提行の顯説のため、かの三界の王たる [菩薩] シュヴェータケートゥに親近して、熱誠をもって帰依せよ。[133]

彼の教えを堅持し、正法の開頭のため、菩提行の誓戒を保ちつつ、あらゆる場所で生類を鼓舞勸発せよ。」[134]

以上の勸発の偈頌を聞き、その光明に触れて安樂などを有した神々は、驚愕しました。[135]

「ああ、カリ期であっても、このシュヴェータケートゥは悟りに達し、正法を説き示して、それを世界中に普及させるであろう。[136] それ故、私たちはすぐに行って、大自在者である彼を供養し、一切の生類の益のために、丁重にそれについてお願いしよう。」[137]

と、このように正法を欲する彼らすべては相談して同意し、出発してかの大士に懇請するために近づきました。[138] そこに到着して、彼らはかの菩薩に丁重に敬意を示して、挨拶の礼をなし、お辞儀して次の様をお願いしました。[139]

「世尊、三界の守護者よ、一切法王、主よ、あなた様が欲されるように、一切はその通りに間違いなく成就されるであります。[140]

それ故、あなた様は地上に降りて、カリ期であっても、世の益のため、高貴な家系に生まれて、大いなる奇跡を示して下さい。[141] それから〔あなた様は〕幼童期においても、学習してたちまち一切の学問の通達者になり、あらゆる説教者を打ち負かして、勝利の栄光を得ることでしょう。[142] その後、青年となって結婚し、定則に従い、美しく愛らしい妻たちと楽しみながら、世俗の行い (saṃvṛti) を現ぜしめてください。[143] その後、享樂を厭って、それらすべての美女たちやあらゆる所有物を捨てて、出家して森を遊行され、[144] なしがたい苦行をされて、あらゆる苦行者たちに勝ち、その後、菩提樹に坐して禪定をなし、魔どもを打ち負かして、[145] その後、〔煩惱の〕汚れない高貴な心で、三昧において感官を制御し、正等覚を達成し、仏の位を得てください。[146]

その後、あなた様は世尊・師・三界すべての王として、正法を説き示し、全世界に弘めてください。[147] 過去のあらゆる仏たちによって正法が弘められた如く、あなた様も同様に教えられて、お弘めになってください。」[148]

このように彼らすべての浄居天たちが懇請するのを聞き、かのシュヴェータケートゥはそれを沈黙によって承諾しました。[149]

「これが承諾された」と考えて、正法の徳質を熱望するそれらすべての自在天をはじめとする〔神々〕は、大いに歡喜しました。[150] 悦んで、かの菩薩に敬意を示し、作礼し合掌して、三度右邊して、そこから浄居天に戻りました。[151]

さてかの世尊は次に、その三昧から出定すると、その事の報せを説くために、集会場の座につきました。[152]

集会場の中央の座についたかの大士を見て、すべての菩薩・大士たちは集まり来ました。[153] 其処に集まり来て、彼らすべての者たちはかの仏子に作礼し合掌して、その集会場に坐りました。[154]

近坐した彼ら菩薩たちと僧団の者たちを見て、かの大慧者シュヴェータケートゥは見つめつつ〔彼らに〕次の様に説きました。[155]

「あなた方よ。ここで私によって語られることを、全員でお聞き下さい。それを聞かれて、あなた方すべてが隨喜され、心の澄明を得ますように。[156]

今日、禪定堂において瞑想をしながら居る私のもとに、輝きを放ちながら、すべての浄居天たちがやって来ました。[157] 〔彼らは〕イーシュヴァラ、チャンダナ、イーシャ、ナンダ、プラシャーンタ・チッタカ、マヒタ、スダングナ、シャーンタ、ならびにかれらを頭目とする神々たちです。[158] 無数のそれらの〔浄居天の〕衆は、仏の教えを熱望しており、悟りの達成のため、私を勧発するためにここにやって来たのです。[159] 彼らすべては私を敬い、世の益のために懇請しました。私はその通りに承諾して約束し、彼らを自らの住まいに送りました。[160]

それ故、私は〔これから〕地上において王の家系に生を得て、菩提行の誓戒を堅持しつつ、世俗の行い (samvṛti) を現ぜしめて、[161] 王家の生活期を捨てて、森でなしがたい苦行をし、魔の群とあらゆる悪心の外道師たちに打ち勝ち、[162] 菩提樹に坐して、心を三昧に没入させ、悟りの智慧に達して、私はカリ期における善逝 (仏) になりましょう。[163] そして世間すべてに正法を普及させ、仏の仕事を完遂させて、私は仏の住まいに到りましょう。[164] このように、私は地上に降りて、かつて誓った通りに、すべて達成して、〔誓いを〕満たそうと意欲しています。[165]

それ故、あなた方は皆、心集中して、悟りに心を向け、三宝を信奉し、常に浄行をなして下さい。[166] 〔あなた方は〕時々、三宝の徳質を熱望する者たちのところに来て、〔彼らに〕正法を聴聞する喜びを絶えず与えて下さい。〕[167]

このように師が説かれたのを聞いて、かの仏子たちは皆、「わかりました」と返事し、覚知し、喜び同意しました。[168]

その後、彼ら大通智の菩薩たちすべては心の澄明なるを得て、悦んで彼のために常なる幸いの成就の祈願をしました。[169]

「世尊よ、あなた様が悟りの成就に関して誓われたこと、そのすべてが、世の益のためにその通りに確実に成就いたしますよう、お祈りいたします。[170] 彼ら墮落者たち、魔どもや外道師たちは消滅に向かいますように。世の益のために、あらゆる者がなすべき仕事を常にどこでも成就しますように。[171] プラフマーとシャクラ (インドラ) をはじめとする神々、あらゆる世間主 (護世神) たち、〔九〕曜、星々 (星宿) たち、シッダたち、サーデイヤたち、ヴィドゥヤーダラたち、[172] すべての母神の群、〔眷属の〕群に圍繞された者たち、彼らが常にあなた様の善き助力者となって、常にどこでもお護りしますように。[173] すべての生類は浄信をいだき、正法の甘露を熱望し、帰依して、あなた様を信心により恭敬し、誠信をもって尊崇しますように。[174] 常にあらゆる場所で、あなた様には幸と美とよき名声を伴った、災い無き、勝利の達成の大きな喜びがありますように。[175] 菩提行の誓いを堅持しつつ、なされた誓願がそのとおりに、一切有情の益のために、滞りなく成就しますように。[176] 以上を「本当のことである」と承知されて、正法を説き明かすため、世を益するため、仏という栄光の達成を得んがため、行動なさってください。〕[177]

以上のような祝祷を、彼らすべての仏子・菩薩たちは与えて、自在者の〔具現〕身たる彼を拝して、自らの住まいに戻ってゆきました。[178]

その後、かの大士 (シュヴェータケートゥ) は、すべての仏たちを憶念しながら、仏としての誕生を望んで、悦んで次の様に大声を發しました。[179]

「大士シュヴェータケートゥは地上に誕生し、菩提行の誓戒を堅持しつつ、世俗の行い (samvṛti) を現ぜしめ、[180] 苦行によってあらゆる苦行者たち、魔と外道師たちを打ち負かし、仏の智慧を達成して、カリ期であっても、仏となりましょう。[181] そしてその者は三界師・一切法王・勝者 (仏) として正法を説いて、全世界に普及せしめ

ましよう。[182] そしてその者は三界の守護者として、世間を法から成るものに変え、仏としてのなすべき仕事を完遂して、涅槃し、自らの住まいに赴きましよう。[183] 以上の〔わが〕真実語を聞いて、すべての三界に住む生類は、幸と美とよき徳質の獲得のために歓喜しますように。」[184]

と、このように〔発された〕その大声は、光明を伴って、輝き照らしながら、あらゆる世界に普く拡がりました。[185]

すると海と山を含む大地が歓喜して震動しました。触れて快い、好い薫りのする穏やかな風が吹きました。[186] あらゆるめでたい楽の音が至る処に鳴り渡りました。あらゆる発光する〔諸天体〕が光り輝きました。[187] あらゆる方角の空間が澄みわたりました。拡がった雲は好い音を発しつつ、花の雨を降らせました。[188] 同様に、その他の美しい様相をもつ、一切法の安楽を与える、災いなき、大歓喜をともなう状態があらゆる所で起こりました。[189]

それを聞き、目で見て、〔輪廻の〕生存にいるあらゆる生類は、三宝に出会う歓びを得ようと〔望み〕、歓喜（信受）しました。[190] そして、すべての仏たちや辟支仏たち、あらゆる菩薩たちも、すぐれた視力（天眼）をもって彼を眺めました。[191] ブラフマーやシャクラ（インドラ）をはじめとする神々、あらゆる世間主たち、〔眷属の〕群を有する者たち、〔八〕母神たち、〔九〕曜、あらゆる星々（星宿）たち、ヨーガ行者、出家行者、牟尼、苦行者たち、すべてのヴィドゥヤーダラたち、シッダたち、阿羅漢たち、梵行者たち、また同様に、その他の大通智を有する者たち、三宝の徳性を熱望する者たちは、かの大士を眺めて、守護しようと欲しました。[192-194] 六道に属するすべての生類は、仏と会うことを待ち望みつつ、〔正しく〕振舞いました。[195]

以上のように、師である牟尼の王（仏）によって、ご自分の本生話（svajāta）が語られました。今それを、私（ウパグプタ）は教示され聞いたとおりにお話しました。[196] 大王よ、あなたも敬いの心をもって、それを聞いて、随喜し、あらゆる生類に聞かせて、至る処に普及させなさい。[197]

浄信をいだいて『仏の出生の善説語』（buddhajanmasubhāṣita）を説く者たち、聞いて歓喜してこの世界で〔他に〕聞かせる者たちは、すべて汚れない心の、清らかな感官の菩薩たちであり、幸と美と〔よき〕徳質の達成を享受しつつ、仏の住まい（極楽）に赴くであろう。— [198-199]

以上のように師であるウパグプタに説かれたことを聞いて、アショーカを上首とする彼らすべての者たちは、「そういたします」と言い、覺知を得ました。[200]

以上、『如来出生アヴァダーナ・マーラー』における、「トゥシタ天の住まいからの降下を一切生類が知らしめられ歓喜した」という名の第1章。

## 第二部

### 醜く生まれついたヴィルーパが仏に救われた話 — SMRAM 第34章と Avadānaśataka 第97章 —

SMRAM 第34章『ヴィルーパ (virūpa 醜異な姿)・アヴァダーナ』は、Avś 97 話『ヴィルーパ』(Virūpaḥ) を韻文で再話することで作られた梵文作品である。

SMRAM 第34章は、ネパールの別の説話集成写本 Ratnāvadānatattva の中でも同じ章名で存在し、内容は同じであるが(章の最後のコロフォンに記された説話集成の作品名だけが違う)、Ratnāvadānatattva の写本をローマ字転写した高島寛我の Ratnamālavādāna 出版本(1954年)では、その章は本の第32章にあたる(359-368頁)。ただし高島が用いた Ratnāvadānatattva の京大写本(A' 写本; Goshima・Noguchi 87)ではその章は作品の第20章となっている。

今回の SMRAM 第34章の校定にあたっては、これまで私が『南アジア古典学』の誌上で行った SMRAM の第16章や17章や33章の校定と同様に、次の三つの資料を使用して校定テキストを作成した：(1) SMRAM 写本、(2) Ratnāvadānatattva の写本 N (= NGMPP E1343/4)、(3) 高島出版本 (Ratnāvadānatattva 京大写本 A' に基づくローマ字転写、略号 Ed.)。本章においても (1) の SMRAM 写本がテキストの底本としての役割を果たして、(3) の高島が発表したローマ字テキストを大きく改良するのに役立った。高島本の読みは Ed. という略号で Apparatus criticus に示した。(2) の写本 N は誤りが多く、校定に役立たない読みがほとんどであるため、徒に無意味な異読を増やすことを避けて、Apparatus criticus においてすべての異読を報告することはせず、読みの伝承を確認したい箇所においてのみ報告するに留めた。

SMRAM の本章の種本たる Avś 第 97 話『ヴィルーパ』(Virūpaḥ) は、漢訳撰集百緣経では卷十、諸緣品第十の(97)「醜陋比丘緣」にあたる(大正蔵第4巻、253頁中～254頁上)。

#### 第1節 SMRAM 第34章 Virūpāvadāna の梵文と訳

以下に SMRAM 第34章『ヴィルーパ・アヴァダーナ』の校定梵文テキストを挙げ、続いて和訳 (vv.15-192) を挙げる。

#### 34 Virūpāvadāna

Ed. (= TAKAHATA 1954), pp. 359-368; N (= NGMPP E1343/4) 245b6-253a9;

Ms. (= SMRAM) 252b8-260a7

athāsoko maharājaḥ kṛtāñjalipuṭo mudā /	
upaguptaṃ yatiṃ natvā [253a] prārthayac caivam ādarāt // 1	[= Ed. 1]
bhadanta śrotum icchāmi punar anyat subhāṣitam /	
tad yathā guruṇādiṣṭaṃ tathādeṣṭum ca me 'rhati // 2	[= Ed. 2]
iti saṃprārthitaṃ rājñā śrutvā so 'rhan sudhīr yatiḥ /	
tam aśokaṃ mahārājaṃ samālokyaivam ādiśat // 3	[= Ed. 3]
sādhu śṛṇu mahārāja yathā me guruṇoditam /	
tathāhaṃ te 'tra vakṣyāmi tava dharmapravṛddhaye // 4	[= Ed. 4]
tadyathaivaṃ puraikasmin samaye sa munīśvaraḥ /	
bhagavān sa jagacchāstā dharmarājas tathāgataḥ // 5	[= Ed. 5]
sarvajñaḥ śākyasiṃho 'rhañ chrāvastyā bahir āsrame /	
jetodyāne vihāre 'smin vijahāra sasāṃghikaḥ // 6	[= Ed. 6]
tadā tatra sabhāmadhye siṃhāsane sumanḍite /	
sarvasattvahirthena dharmam ādeṣṭum āśrayat // 7	[= Ed. 7]
tatra te bhikṣavaḥ sarve bhikṣuṇyo 'pi samāgatāḥ /	
yatinaś cailakāś caivam upāsakā upāsikāḥ // 8	[= Ed. 8]
vratino bodhisattvās ca saṃbodhiguṇalālasāḥ /	
nirgranthās tīrthikāś cāpi tāpasās ca maharṣayaḥ // 9	[= Ed. 9]
brahmaśakrādayo devā lokapālā maharddhikāḥ /	
daityā yakṣās ca gandharvāḥ kinnarās cāpi rākṣasāḥ // 10	[= Ed. 10]
siddhā vidyādharās cāpi nāgās ca garuḍā api /	
sādhyā grahāḥ satārās ca vasavaś cāpsarogaṇāḥ // 11	[= Ed. 11]
brāhmaṇāḥ kṣatriyās cāpi nṛpā rājakumārakāḥ /	
vaiśyās ca mantriṇo 'mātyāḥ śreṣṭhinaś ca mahājanāḥ // 12	[= Ed. 12]
gṛhasthā vaṇijaḥ sārthavāhās ca dhanino 'pi ca /	
śilpinaḥ paurikāś cāpi jānapadās ca naigamāḥ // 13	[= Ed. 13]
grāmyāḥ kārvaṭikāś cāpi saddharmaśravaṇārthinaḥ /	
sarve te samupāgatya vihāre samupāviśan // 14	[= Ed. 14]
tatra taṃ śrīghanaṃ dṛṣṭvā sarve te saṃprasāditāḥ /	
natvā pradakṣiṇīkṛtya purataḥ samupācaran // 15	[= Ed. 15]
tatra sarve 'pi te lokāḥ samabhyarcya yathākramam /	
taṃ munīndraṃ praṇatvaiva dharmam śrotum upāśrayan // 16	[= Ed. 16]
tataḥ sa bhagavān dṛṣṭvā tān sarvān samupāśritān /	
bodhicaryāṃ samārabhya saddharmaṃ samupādiśat // 17	[= Ed. 17]
tat saddharmāmṛtaṃ pītvā sarve te tridaśādayaḥ /	

lokāḥ satyam iti jñātvā prābhyanandan prabodhitāḥ // 18	[= Ed. 18]
tasminn avasare tatra śrāvastyāṃ pauriko gr̥hī /	
āsīn mahādhanāḥ śrīmāñ chrīdopamo mahājanaḥ // 19	[= Ed. 19]
sa *svakulasamāṃ *vāmāṃ svakuladharmacārīṇīm /	
kāntāṃ bhāryāṃ samānīya samyag vyūhe yathāvidhi // 20	[= Ed. 20]
tataḥ sa kāmasaṃraktaḥ sukāminyā tayā saha /	
yatheccchayā sukhaṃ bhuktvā reme nityaṃ pramoditaḥ // 21	[= Ed. 21]
tatas tasya gr̥hasthasya yathākāmaṃ prabhuñjataḥ /	
samaye sā satī bhāryā garbhitābhūt kṛśāṅgikā // 22	[= Ed. 22]
tataḥ sā samaye 'sūta dāraḥ durbhagākṛtim /	
durvarṇaṃ duritākāraṃ virūpaṃ vikṛtāśrayam // 23	[= Ed. 23]
dṛṣṭvā taṃ dāraḥ mātā bhinnāśayā viśāditaḥ /	
kiṃ idṛśātmajenāpi dhig mām iti vyacintayat // 24	[= Ed. 24]
tataḥ sa janakaḥ śrutvā taṃ jātaṃ vikṛtāśrayam /	
virūpaṃ durbhagākāraṃ ity evaṃ samacintayat // 25	[= Ed. 25]
aho kiṃ prakṛtaṃ pāpaṃ janmānta[254a]re purā mayā /	
yenāyaṃ durbhagākāro virūpo jāyate sutāḥ // 26	[= Ed. 26]
tad atra kiṃ mayopāyaṃ kartavyaṃ nāpi manyate /	
dhig mām yena sute jāte lajjayā me sukhaṃ hr̥tam // 27	[= Ed. 27]
tathāpi kiṃ kariṣyāmi daivān me jāyate hy ayam /	
tad virūpo 'pi putro 'yaṃ pālanīyo mayātmajaḥ // 28	[= Ed. 28]
iti bhartroditaṃ śrutvā sā bhāryāpy evaṃ abravīt /	
yad ābhyāṃ prakṛtaṃ pāpaṃ tatphalaṃ bhujyate khalu // 29	[= Ed. 29]
yad abhāvi na tad bhogyaṃ bhāvi cen na tad anyathā /	
sarvatra bhāvino bhogyaṃ bhuñjate sarvajantavaḥ // 30	[= Ed. 30]
tad atrāham imaṃ bālaṃ pālayeyaṃ prayatnataḥ /	
ity uktvā sā vibhinnāsyā nārī tasthau pralajjitā // 31	[= Ed. 31]
taṃ virūpaṃ sutāṃ jātaṃ vīkṣya sa janako 'pi ca /	
lajjāvidīrṇacitto 'bhūn nirutsāho viśāditaḥ // 32	[= Ed. 32]
hā mayā kiṃ kṛtaṃ pāpaṃ manyate na bhavāntare /	
yato 'yaṃ dāraḥ jāto virūpo durbhagākṛtiḥ // 33	[= Ed. 33]
tathāpi kiṃ kariṣyāmi daivān no jāyate hy ayam /	
daivabhogyaṃ prabhoktavyaṃ sarvair api hi jantubhiḥ // 34	[= Ed. 34]
avaśyaṃ bhāvino bhāvā bhavanti sarvadehinām /	
tad ayaṃ svātmajo bālaḥ pālanīyas tayā mayā // 35	[= Ed. 35]
iti dhyātvā pitā so 'tha dṛṣṭvā tasya śīśor mukham /	

lajjayā pratibhinnāsyas tasthau daiivānucintayan // 36	[= Ed. 36]
tato jñātīn samāhūya kṛtvā jātimahaṃ sa ca /	
pitāsyā nāma vikhyātaṃ kuruteti samabravīt // 37	[= Ed. 37]
tatas te jñātayaḥ sarve saṃskṛtvā *saṃmataṃ tathā /	
taṃ gṛhasthaṃ samāmantrya pura evam upādīsan // 38	[= Ed. 38]
gṛhapate virūpo 'yaṃ putro yat tava jāyate /	
tasmād bhavatu nāmnāyaṃ prasiddho bālako bhuvī // 39	[= Ed. 39]
[254a] tataḥ snehād virūpo 'sau mātṛā yatnena pālitaḥ /	
kramāt puṣṭo vivṛddho 'bhūd dhradastham iva paṅkajam // 40	[= Ed. 40]
tato yadā kumāratvaṃ prāptaḥ sa vikṛtāśrayam /	
svarūpaṃ darpaṇe dṛṣṭvā virūpo lajjito 'bhavat // 41	[= Ed. 41]
tato jehrīyamāno 'sau virūpaḥ parimohitaḥ /	
pāpacintāparītātmā manasaivaṃ vyacintayat // 42	[= Ed. 42]
hā mayā kiṃ kṛtaṃ pāpaṃ yenāhaṃ duritākṛtiḥ /	
kiṃ mamānena kāyena mṛtyuṃ me 'tra varaṃ dhruvam // 43	[= Ed. 43]
kiṃ kariṣye virūpo 'haṃ kva yāsyāmi durākṛtiḥ /	
kiṃ mamānena jīvena kevalaṃ duḥkhabhogaṇā // 44	[= Ed. 44]
tad atrāhaṃ gṛhaṃ tyaktvā vanodyāne samāśrayan /	
saṃbuddhaṃ sugataṃ dhyātvā mṛtyuṃ gaccheya muktaye // 45	[= Ed. 45]
avaśyam eva sarveṣāṃ jantūnāṃ maraṇaṃ bhava /	
tan mamedṛgvirūpe 'smin śarīre jīvite 'sprhā // 46	[= Ed. 46]
yady atrāhaṃ ciraṃ jīvī nindito duḥkham āpnuyām /	
tadbuddhaṃ sugataṃ dhyātvā tiṣṭheya prāṇamuktaye // 47	[= Ed. 47]
tatsaṃbuddhaṃ jinaṃ dhyātvā mṛto 'haṃ yadi sāmpratam /	
tatpuṇyaiḥ parītātmā sugatiṃ gaccheya sarvathā // 48	[= Ed. 48]
ye buddhaṃ sugataṃ smṛtvā gacchanti mṛtyum ātmanā /	
durgatiṃ te na gacchanti samyānty eva sukhāvatīm // 49	[= Ed. 49]
tasmāt te sudhiyaḥ santaḥ tyaktvā pāpākulaṃ gṛham /	
saṃbuddhasmaraṇaṃ dhyātvā tiṣṭhanti nirjane vane // 50	[= Ed. 50]
tathāhaṃ tat samālokya saṃbuddhaṃ śaraṇaṃ gataḥ /	
samādhāya sadā smṛtvā vaseya vijane vane // 51	[= Ed. 51]
ity evaṃ manasā dhyātvā virūpaḥ sa prasannadhīḥ /	
sasampadaṃ gṛhaṃ tyaktvā jīṇodyānaṃ samāśrayat // 52	[= Ed. 52]
tatrodyāne vivikte sa paṇakuṭīm samāśrayan /	
bhagavantam anusmṛtvā tasthau dhyānasamāhitaḥ // 53	[= Ed. 53]
tadā sa bhagavañ chāstā taṃ virūpaṃ tathā sthitam /	

viśuddhāśayam ālokya samuddhartuṃ samaicchata // 54	[= Ed. 54]
tataḥ sa bhagavān nātho bhikṣusaṃghasamanvitaḥ / tatrodyāne virūpaṃ taṃ paśyan bhāsvān upācarat // 55	[= Ed. 55]
tatprabhāpariṣṛṣṭo 'sau virūpaḥ satsukhānvitaḥ / vismitas taṃ samāyātaṃ sasāṃghikam apaśyata // 56	[= Ed. 56]
taṃ munīndraṃ samālokya virūpaḥ sa vimohitaḥ / jehrīyamāna utthāya parāyituṃ tato 'carat // 57	[= Ed. 57]
tatra sa bhagavān dṛṣṭvā virūpaṃ taṃ parāyitam / sahasarddhyā diśo mārge nirudhyābhyadhyatiṣṭhata // 58	[= Ed. 58]
tathā nirudhyamānaḥ sa virūpas tena śāsinā / parāyituṃ prayatnena na śāśāka kathaṃ cana // 59	[= Ed. 59]
tataḥ sa parikhinnātmā virūpo lajjitāśayaḥ / parṇakuṭīsamālīnas tasthau bhīto divāndhavat // 60	[= Ed. 60]
tatra sa bhagavān dṛṣṭvā nilīnaṃ lajjayāsane / saṃnirodhasamāpattiṃ samādhiṃ vidadhe tadā // 61	[= Ed. 61]
tataḥ sa bhagavañ chāstā tatsamādheḥ samutthitaḥ / svayaṃ virūpaṃ ātmānaṃ nirmāya vikṛtāśrayam // 62	[= Ed. 62]
bhojanapūrṇam ādāya śārāvaṃ mṛṇmayam tataḥ / śanais tasya virūpasya parṇakuṭīyantike 'carat // 63	[= Ed. 63]
tatra taṃ samupāyātaṃ virūpaṃ vikṛtāśrayam / sa virūpaḥ samālokya harṣita evam abravīt // 64	[= Ed. 64]
svāgataṃ bhoḥ sahāyaihi kutra gantum ihāgataḥ / tiṣṭhātrāvāṃ sadāvāse vatsyāvahe sukhānvitau // 65	[= Ed. 65]
iti tenoditaṃ śrutvā bhagavān sa virūpadhṛk / tvāṃ [255b] draṣṭuṃ ihāyāmi proktveti samupāśrayat // 66	[= Ed. 66]
tatra sthitaḥ kathāṃ kṛtvā bhagavān sa virūpikaḥ / dadau tasmai virūpāya surasāmṛtabhojanam // 67	[= Ed. 67]
tat pradattaṃ prabhuktvānnaṃ sa virūpaḥ pramoditaḥ / tatkaṣṇāt paripuṣṭāṅgo babhūva prīṇitendriyaḥ // 68	[= Ed. 68]
tataḥ sa bhagavañ chāstā dṛṣṭvā taṃ saṃpramoditam / svarūpeṇa sthitas tatra vyarājat saṃprabhāsayan // 69	[= Ed. 69]
taṃ saumyaṃ bhadrarūpāṅgaṃ śrīghanaṃ śubhitendriyam / sa virūpaḥ samālokya vismitāś caivam abravīt // 70	[= Ed. 70]
aho kathaṃ bhavaty evam abhirūpataro bhavān / kasya puṇyavipākāt tad vaktum arhati me puraḥ // 71	[= Ed. 71]
iti saṃprārthite tena bhagavān sa munīśvaraḥ /	

bodhayituṃ virūpaṃ taṃ samālokyaiivam ādiśat // 72	[= Ed. 72]
mahāvīdyāsti me sādho saṃbodhisādhanottamā /	
cittaprasādasamjātananyākhyā *mahābalā // 73	[= Ed. 73]
tasyā eva prabhāvena bhavāmy ahaṃ śubhendriyaḥ /	
samantabhadrarūpāṅgaḥ sarvasattvamanoharaḥ // 74	[= Ed. 74]
ity ādiśya munīndraḥ sa bhagavāṃs tatra śubhāsane /	
saddharmaṃ samupādeṣtuṃ samāśrayat prabhāsayan // 75	[= Ed. 75]
tatas te sāṅghikāḥ sarve saumyarūpāḥ śubhendriyāḥ /	
parivṛtya munīndraṃ taṃ puraskṛtyopatasthire // 76	[= Ed. 76]
tān sarvān samupāsīnān saumyarūpāñ chubhendriyān /	
dr̥ṣṭvā taṃ sugataṃ matvā babhūva vismayānviṭaḥ // 77	[= Ed. 77]
aho *bhāgyaṃ mayā labdhaṃ mahat puṇyam ihādhunā /	
yan mamārthe munīndro 'yaṃ sasāṃghika upāgataḥ // 78	[= Ed. 78]
nūnam atra munīndro 'yaṃ matkarmaparicoditaḥ /	
saddharmaṃ samupādeṣtuṃ sasāṃghaḥ kṛpayāgataḥ // 79	[= Ed. 79]
tad aham asya munīndrasya śraddhayā śaraṇaṃ gataḥ /	
satkṛtya saugataṃ dharmāṃ śrotum arhe samāhitaḥ // 80	[= Ed. 80]
ity evaṃ manasā dhyātvā virūpaḥ sa pramoditaḥ /	
upetya sāñjalir natvā taṃ munīndraṃ upāśrayat // 81	[= Ed. 81]
tadā tasya virūpasya buddhapuṇyānubhāvataḥ /	
lakṣmīḥ prādur abhūt tatra divyabhogapradāyini // 82	[= Ed. 82]
tadā so 'bhūd virūpo 'pi divyābhirūpasundaraḥ /	
parisuddhatrikāyo 'pi sadguṇārthī śubhāmśikaḥ // 83	[= Ed. 83]
tataḥ so 'tiprasannātmā dr̥ṣṭvaitan mahad adbhutam /	
mudā tasya muneḥ pādaḥ vavande sa kṛtāñjaliḥ // 84	[= Ed. 84]
tata utthāya taṃ nāthaṃ bhagavantaṃ sasāṃghikam /	
samālokyā prasannātmā prārthayat sa samādarāt // 85	[= Ed. 85]
bhagavan bhavato śāstaḥ kṛpādr̥ṣṭiprasādataḥ /	
prādurbhūtātra me lakṣmīr bhavāmi cātisundaraḥ // 86	[= Ed. 86]
tad etan mahad āścaryaṃ dr̥ṣṭvā me rocate manaḥ /	
bhavatāṃ śaraṇe sthitvā carituṃ saṃvaram sadā // 87	[= Ed. 87]
tad atra bhagavan nātha kṛpayā bauddhaśāsane /	
anvāhṛtya śubhe dharme niyoktuṃ māṃ samarhati // 88	[= Ed. 88]
śraddhayāhaṃ jagannātha bhavatāṃ śaraṇaṃ gataḥ /	
pravrajya saṃvaram dhṛtvā carīṣye 'tra samāhitaḥ // 89	[= Ed. 89]
iti tatsaṃprārthitaṃ śrutvā bhagavān sa munīśvaraḥ /	

tasya śuddhāsāyam ālokya samāmantryaivam ādiśat // 90	[= Ed. 90]
yadi vāñchāsti te vatsa carituṃ saugataṃ vratam /	
pitur ājñāṃ samāsādya prāgaccha dāsyate tadā // 91	[= Ed. 91]
ity ādiṣṭaṃ munīndreṇa śrutvā sa pratiharṣitaḥ /	
mudā tasya muneḥ pādaḥ praṇatvaiva tato 'carat // 92	[= Ed. 92]
tatra sa svagr̥he gatvā pādaḥ pituḥ kṛtāñjaliḥ /	
praṇatvā purataḥ sthi[256b]tvā prāvadaḥ evam ādarāt // 93	[= Ed. 93]
tātodyāne virūpo 'ham iti lajjāviśāditaḥ /	
parṇakutyāṃ samāsīno dhyātvā vasāmi yogivat // 94	[= Ed. 94]
tatra sa bhagavān buddhaḥ saṃghaḥ svayam āgataḥ /	
bodhayitvāmṛtaṃ bhojyaṃ dadāti samupāyavit // 95	[= Ed. 95]
taddattaṃ amṛtaṃ bhuktvā bhavāmi sundarākṛtiḥ /	
lakṣmīś cāpi samudbhūtā mamaivam jāyate śubham // 96	[= Ed. 96]
etat sarvaṃ munīndrasya kṛpādṛṣṭiprasādataḥ /	
nānyathā hīti vijñāya prasīda sugate sadā // 97	[= Ed. 97]
evam etan mahac citraṃ dṛṣṭvā me saṃprasāditaṃ /	
mano 'dya śāsane bauddhe carituṃ rocate vratam // 98	[= Ed. 98]
etat saṃprārthanāṃ kartum ihāhaṃ prāgato mudā /	
tad atra kṛpayā tāta tadanujñāṃ pradehi me // 99	[= Ed. 99]
etatpuṇyavibhāgena tvam cāpi sugatiṃ vrajeḥ /	
tatra ca sarvadā saukhyaṃ bhuktvā yāyā jinālayam // 100	[= Ed. 100]
iti matvā prasīdātra mā kuruṣva mano 'nyathā /	
śraddhayānugrahaṃ kṛtvā tadanujñāṃ pradehi me // 101	[= Ed. 1]
iti saṃprārthitaṃ śrutvā sa gr̥hasthaḥ savismayaḥ /	
pitā taṃ svātmajaṃ dṛṣṭvā sucirād evam abravīt // 102	[= Ed. 2]
aho hi bhāgyavān putra puṇyavāñcho 'si sāmpratam /	
yato 'sau kṛpayopetya buddhas tvām abhirakṣati // 103	[= Ed. 3]
tat te 'sti yadi vāñchātra carituṃ saugataṃ vratam /	
taṃ buddhaṃ śaraṇaṃ gatvā vrataṃ cara samāhitaḥ // 104	[= Ed. 4]
iti pitroditaṃ śrutvā sa virūpaḥ prasāditaḥ /	
pādān pitroḥ praṇatvaiva sahasā prācarad gr̥hāt // 105	[= Ed. 5]
tato jetāśrame gatvā sa virūpaḥ pramoditaḥ /	
pādaḥ tasya muner natvā prārthayed evam ādarāt // 106	[= Ed. 6]
bhagavan nātha sarvajña labdhānujñāḥ sāmāgataḥ /	
tad bhavān kṛpa[257a]jyā mahyaṃ saṃvaram dātum arhati // 107	[= Ed. 7]
iti saṃprārthite tena bhagavāṃs tasya mastake /	

savyahastena saṃspr̥ṣṭvā śāsane taṃ samagrahīt // 108	[= Ed. 8]
tatra pravrajītaḥ śāstrā virūpo muṇḍito 'pi saḥ /	
khikkhirīpātra*hasto *'bhūc cīvaraprāvṛto babhau // 109	[= Ed. 9]
tataḥ sa bhikṣur ātmajñāḥ saṃyamī vijitendriyaḥ /	
matvā saṃsārasaṃskāragatīḥ kṣaṇavighātīḥ /	[= Ed. 10(!)]
bhittvāvidyāgaṇān bodhipakṣadharmeṣu prodyataḥ // 110	[= Ed. 10(!)]
tataḥ sa dhāraṇīvidyāsamādhinirato yatīḥ /	
sarvakleśagaṇāñ jītvā sāksād arhattvam āptavān // 111	[= Ed. 11]
saṃsāralābhasatkāraṇiḥspṛho nirmalāśayaḥ /	
parisuddhatrikāyaś ca nirvikalpo nirañjanaḥ // 112	[= Ed. 12]
sadevāsuralokānām api traidhātucāriṇām /	
mānyaḥ pūjyo 'bhivandyo 'bhūd brahmacārī sa yogadhṛk // 113	[= Ed. 13]
tadā te bhikṣavaḥ sarve dṛṣṭvā taṃ yatim uttamam /	
vismitās taṃ munīṃ natvā papracchus tatpurākṛtam // 114	[= Ed. 14]
bhagavann arhatānena kiṃ karma prakṛtam purā /	
yenāyaṃ duritākāro virūpo jāyate 'dhunā // 115	[= Ed. 15]
yac cāyaṃ bhagavañ chāstar bhavatā saṃprasāditaḥ /	
lakṣmīvān abhirūpaś ca bhavati sadguṇārataḥ // 116	[= Ed. 16]
yac cāyaṃ śāsane bauddhe śraddhayā śaraṇaṃ gataḥ /	
sahasā kleśasaṃghārīñ jītvārhattvaṃ samāptavān // 117	[= Ed. 17]
tad asya sarvavṛttāntaṃ yad anena purākṛtam /	
suvistaraṃ samākhyāya sarvān naḥ paribodhaya // 118	[= Ed. 18]
iti tair bhikṣubhiḥ sarvaiḥ prārthite sa munīśvaraḥ /	
sarvāṃs tān sāmghikān bhikṣūn samālokyaiavam ādiśat // 119	[= Ed. 19]
śṛṇuta bhikṣavaḥ sarve yad anena purākṛtam /	
tat sarvaṃ karma vakṣyāmi sarvalokaprabodhane // 120	[= Ed. 20]
tadyathābhūt purā buddhaḥ puṣyābhidhas tathāgataḥ [257b] /	
sarvajño 'rhañ jagacchāstā dharmarājo munīśvaraḥ // 121	[= Ed. 21]
sa bhagavañ jagannāthaḥ kṛtvā bhadraṃ samantataḥ /	
sarvatra saugataṃ dharmam upadeṣṭum upācarat // 122	[= Ed. 22]
evaṃ sarvatra lokeṣu sasāmghikaḥ sa mārājī /	
pūrvottaradiśo bhāge rājadhānīm upāśrayat // 123	[= Ed. 23]
tatra sa bhagavañ chāstā sarvasattvahitārthabhṛt /	
ādimadhyāntakalyāṇam āryadharmam upādiśat // 124	[= Ed. 24]
tat saddharmāmṛtaṃ pītvā sarve lokāḥ prabodhitāḥ /	
triratnabhajanaṃ kṛtvā pracerire śubhe sadā // 125	[= Ed. 25]

tatra sa bhagavān puṣyo buddhadṛṣṭyā samantataḥ / loke paśyan hitaṃ kartuṃ dadarśa dvau jinātmajau // 126	[= Ed. 26]
ekaḥ śākyamunir nāma maitreyaś cāparaḥ sudhīḥ / tasmin kāle ubhāv etau bodhisattvau jinātmajau // 127	[= Ed. 27]
maitreyasya subuddheḥ svasaṃtatiḥ paripācitā / tasya śāstuś ca vaineyaḥ sattvā na paripācitāḥ // 128	[= Ed. 28]
śākyamunes tu vaineyaḥ paripakvā na saṃtatiḥ / evaṃ sa sugataḥ puṣyo dṛṣṭvaivaṃ samacintayat // 129	[= Ed. 29]
aho śākyamuner na svasaṃtatiḥ paripācitā / tatsvasaṃtatipākārthaṃ careyāhaṃ tadantike // 130	[= Ed. 30]
iti vicintya puṣyaḥ sa tathāgataḥ sasāṃghikaḥ / himavantam girim gatvā pracakrāma prabhāsayan // 131	[= Ed. 31]
tatra ratnaguhāyāṃ sa praviśya sa munīśvaraḥ / tejodhātusamāpanno dhyātvā tasthau śubhāsane // 132	[= Ed. 32]
tasmimś ca samaye tatra śākyamuniḥ sa sanmatiḥ / phalamūlaṃ samāhartuṃ tadantikam upācarat // 133	[= Ed. 33]
tatra ratnaguhāyāṃ taṃ puṣyaṃ tathāgataṃ munim / suparyaṅka[258a]samāsīnaṃ dhyānalīnaṃ prabhāsitam // 134	[= Ed. 34]
dvātriṃśallakṣaṇāśītivyañjanaiḥ paribhūṣitam / ratnāvalim ivojjvālaṃ śatasūryādhikaprabham // 135	[= Ed. 35]
saumyaṃ divyātirikṭābhaṃ samantabhadrarūpiṇam / suprasannamukhāmbhojaṃ dharmarājaṃ samaikṣata // 136	[= Ed. 36]
tatra taṃ sugataṃ dṛṣṭvā śākyamuniḥ sa moditaḥ / sahasā sāñjalir natvā pūjāṅgair ārcayan mudā // 137	[= Ed. 37]
tataḥ sa ekapādena sthitvā saptaniśāṃ mudā / sāñjaliḥ prañatiṃ kṛtvā tuṣṭāva gāthayānaya // 138	[= Ed. 38]
na divi bhuvi vā nāsmiml loke na vaiśravaṇālaye na marubhavane divye sthāne na dikṣu vidikṣu vā /	[= Ed. 39]
caratu vasudhāṃ sphītāṃ kṛtsnāṃ saparvatakānanām puruṣavṛṣabhasya tulyo 'nyo mahāśramaṇaḥ kutaḥ // 139	[= Ed. 40]
etayā gāthayā stutvā taṃ puṣyaṃ sugataṃ munim / sa śākyamunir utsāhāt saptarātriṃ mudābhajat // 140	[= Ed. 41]
tataḥ saptadinānte sa puṣyas tathāgato mudā / pariṣṭutas tam ālokya śākyamunim abhāṣata // 141	[= Ed. 42]
sādhu sādhu mahāsattva tvam evaṃ yat samudyataḥ / anena balavīryeṇa saṃpannena dvijottama // 142	[= Ed. 43]

navakalpāḥ parāvṛttāḥ saṁstutyādya tathāgatam / kramāt pāramitāḥ pūrya saṁbodhiṁ samavāpnuyāḥ // 143	[= Ed. 44]
ity ādiśya munīndro 'sau puṣyo dharmādhipo jinaḥ / parivṛtto maheśākhyais tatra dhyānārato 'vasat // 144	[= Ed. 45]
so 'pi śākyamunir bodhisattvo dvijottamaḥ sudhīḥ / tasya puṣyasya sadbhaktyā śaraṇasthaḥ sadābhajat // 145	[= Ed. 46]
tatra tasmin sthite buddhe devī guhānivāsini / tadguhāyāṁ praveṣṭum 'sau [258b] na śaśāka kathamcana // 146	[= Ed. 47]
tataḥ sātivirūpākṣā vikṛtāṁsā durākṛtiḥ / bhūtvā taṁ sugataṁ puṣyaṁ dhyānālīnam abhīṣayat // 147	[= Ed. 48]
tathā sā sucireṇāpi bhīṣayitvāpi durmatih / kiñcit tasya muneś cittaṁ cārayitum śaśāka na // 148	[= Ed. 49]
tadā sā śaṅkitākhinnā vismayāhatamānasā / svarūpeṇaiva taṁ draṣṭum praṇatā samupācarat // 149	[= Ed. 50]
tatra taṁ sugataṁ puṣyaṁ tathāgatam munīśvaram / dvātriṁśallakṣaṇāśīti vyañjanaiḥ parimaṇḍitam // 150	[= Ed. 51]
sarvātikrāntasaumyābhaṁ śatasūryādhiprabham / śāntarūpaṁ subhadraṅgam dhyānālīnam apaśyata // 151	[= Ed. 52]
drṣṭvaiva sā prasādantī puṇyātmāyaṁ susiddhimān / iti dhyātvā surūpeṇa tadantikam upācarat // 152	[= Ed. 53]
tatra sā sāñjalir natvā pādaḥ tasya muneḥ puraḥ / sthitvā kṣamārthanāṁ kartum prārthayad evam ānatā // 153	[= Ed. 54]
bhagavan nātha sarvajña yan mayā prakṛtaṁ tvayi / tat kṣamasva jagannāthaḥ kṣāntidharmādhipo 'si hi // 154	[= Ed. 55]
tad atrāhaṁ jagacchāstar bhavatāṁ śaraṇaṁ gatā / sarvadā samupāśritya bhajeya śraddhayā mudā // 155	[= Ed. 56]
yad atra te saṁghasya yathāvidhi samarcitum / icchāmy ahaṁ jagannātha tad adhyuṣitum arhati // 156	[= Ed. 57]
iti tenārthite puṣyo bhagavān sa munīśvaraḥ / tāṁ viśuddhāśayāṁ drṣṭvā tūṣṇībhūtvādhyuvāsa tat // 157	[= Ed. 58]
tathādhivāsitaṁ śāstrā matvā sābhyanumoditā / āśu tadbhojyasāmagrīṁ sahasā samasādhayat // 158	[= Ed. 59]
tataḥ sā muditopetya pūjāṅgais taṁ munīśvaraṁ [259a] / abhyarcya bhojanair divyaiḥ saṁghaṁ samatoṣayat // 159	[= Ed. 60]
tataḥ sā bhojanānte 'pi praṇatvā sāñjalir mudā / bhūtvā kṣamāpayitvā ca prārthayad evam ānatā // 160	[= Ed. 61]

bhagavan nātha sarvajña bhavatām śaraṇe sthitā / sadopasthānam ādhāya bhajīṣyāmi samāhitā // 161	[= Ed. 62]
tat kṣamasva jagannātha yan mayāpakṛtaṃ vṛthā / prasīdatu bhavañ chāstā saṃbuddho hi kṣamākarah // 162	[= Ed. 63]
iti tathārthitaṃ śrutvā puṣyaḥ sa bhagavān munih / devatām tāṃ samālokya saddharmaṃ samupādiśat // 163	[= Ed. 64]
śṛṇuṣva devate dharmam ihāmutra śubhāptaye / dharmaṇa rakṣito loka sarvatrāpi sukhī bhavet // 164	[= Ed. 65]
tad ādau śraddhayā dharmam śrotavyam saugataṃ varam / tatas triratnam abhyarcya dātavyam dānam arthine // 165	[= Ed. 66]
tataḥ śuddhatrikāyaḥ syāc chuddhaśīlah śubhāsayah / tataḥ satyasamādhānaḥ sarvasattvaḥkṣamākarah // 166	[= Ed. 67]
saṃbodhisādhanodyogāt sarvakleśān vinirjayet / tato dhyānasamādhistaḥ prajñāratnam avāpnuyāt // 167	[= Ed. 68]
taturatnānubhāvena sarvamārān vinirjayan / sarvasattvahitārthena saṃbuddhapadam āpnuyāt // 168	[= Ed. 69]
evaṃ matvātra saṃsāre sarvadā śubhavāñchibhiḥ / dharmam śrutvā sadā dānam prakartavyam yathepsitam // 169	[= Ed. 70]
tvam cāpy evaṃ sadā saukhyam yadīcchasi śubhānvitam / triratnabhajanaṃ kṛtvā kuru dānam yathepsitam // 170	[= Ed. 71]
etat puṇyam tu saṃbodhiprāptaye pariṇāmaya / etatpuṇyavipākena nūnam bodhiṃ samāpnuyāḥ // 171	[= Ed. 72]
ity ādiṣṭam munī[259b]ndreṇa śrutvā sā devatā mudā / tathā hīti pratijñāya prābhyanandat prabodhitā // 172	[= Ed. 73]
tataḥ sa sugataḥ puṣyas tathāgataḥ sasāṃghikaḥ / prabhāsayan samutthāya svāśrame samupāśrayat // 173	[= Ed. 74]
eṣa hy ayaṃ virūpo 'sau devatā yā guhāśritā / yuṣmābhiḥ satyam eveti manyatām nānyathā khalu // 174	[= Ed. 75]
evaṃ matvātra saṃsāre sarvadā sukhavāñchibhiḥ / triratnabhajanaṃ kṛtvā caritavyam śubhe sadā // 175	[= Ed. 76]
śubhasya karmaṇaḥ pāke śubhataiva sadā bhavet / kṛṣṇasya duḥkhattaivaṃ hi miśritasyāpi miśritam // 176	[= Ed. 77]
abhuktaṃ kṣīyate naiva karma kvāpi kadācana / yenaiva yat kṛtaṃ karma tenaiva bhujyate phalam // 177	[= Ed. 78]
nāgnibhir dahyate karma klidyate nāpi codakaiḥ / śuṣyate vāyubhir naiva kṣīyate ca na bhūmiṣu // 178	[= Ed. 79]

nānyathāpi bhaven naiva karma kvāpi kathamcana / yad yathā prakṛtaṃ karma tat tathaiva *phaled dhruvam // 179	[= Ed. 80]
yad asau devatā tatra guhāśritā durāśayā / vikṛtāngā virūpākṣā bhūtvā puṣyaṃ vyabhīṣayat // 180	[= Ed. 81]
etatpāpavipākena pañcajanmaśatāny api / vikṛtāngo virūpākṣo babhūvāyaṃ bhave sadā // 181	[= Ed. 82]
etatpāpavimukto 'yaṃ virūpo vikṛtākṛtiḥ / vibhramśyo durbhagākāro bhavaty atrāpi sāmpratam // 182	[= Ed. 83]
yac cāsau devatā paścāt tāpasamtapitāśayā / tasya puṣyasya buddhasya prasannā śaraṇaṃ gatā // 183	[= Ed. 84]
śraddhayā bhojanair divyaiḥ satkṛtya prābhajan mudā / etatpuṇyavipākena lebhe 'nantaṃ sukhaṃ bhave // 184	[= Ed. 85]
atrā[260a]pi śāsane bauddhe śraddhayā samupāgataḥ / pravrajyāsamvaraprāptaḥ sāksād arhattvam āptavān // 185	[= Ed. 86]
iti yūyaṃ parijñāya caradhvaṃ sarvadā śubhe / tato bodhiṃ samāsādya saṃbuddhapadam āpnuyuḥ // 186	[= Ed. 87]
ity ādiṣṭaṃ munīndreṇa sarve te sāmghikā api / śrutvānumoditāḥ satyam ity uktvā parimenire // 187	[= Ed. 88]
iti me guruṇādiṣṭaṃ śrutam mayātra kathyate / tvayāpy evaṃ mahārāja caritavyaṃ śubhe sadā // 188	[= Ed. 89]
prajāś cāpi tathā rājan bodhayitvā prayatnataḥ / bodhimārge pratiṣṭhāpya pālaniyāḥ sadādarāt // 189	[= Ed. 90]
tena te sarvadā nityaṃ sarvatrāpi śubhaṃ bhavet / kramād bodhiṃ samāsādya saṃbuddhapadam āpnuyāḥ // 190	[= Ed. 91]
iti tenārhatādiṣṭaṃ śrutvāśokaḥ sa bhūpatiḥ / tathā hīti pratijñāya prābhyanandat prabodhitaḥ // 191	[= Ed. 92]
śāstrādiṣṭaṃ prasannā idam api manujā ye virūpāvadānaṃ śṛṇvanti śrāvayanti pramuditamanaso ye ca puṇyābhirāgāḥ / sarve te śrīsametāḥ sakalaguṇadharāḥ satsukhāni prabhuktvā saṃbuddhe bhaktiraktāḥ sugatavaragṛhe saṃprayānti pramodam // 192	[= Ed. 93]
// iti virūpāvadānaṃ samāptam // 34	

### Apparatus criticus

1d prārthayac] Ms. N: prārthayec Ed.

- 4c te 'tra vakṣyāmi] Ms. N: te pravakṣyāmi Ed.
- 5c sa jagacchāstā] Ms.: trijagacchāstā N Ed.
- 6b chrāvastyā] Ms. N: chrāvstyā Ed.
- 13d naigamāḥ] Ms.: nairgamāḥ N Ed.
- 14a kārvaṭikāś] Ms.: kārpaṭikāś N Ed.
- 15b samprasāditāḥ] N Ed.: samprasāditā Ms.
- 15c pradakṣiṇīkṛtvā] Ms. N: pradakṣiṇīkṛtya Ed.
- 19b śrāvastyāḥ] Ms. N: śrāvastyāḥ Ed.
- 20a \*svakulasamāḥ \*vāmāḥ (or \*rāmāḥ?)] ex con: svakulasamār(?v?)āmāḥ Ms.: svakulasamārāmāḥ: N Ed.
- 20d yathāvidhi] Ms.: yathāvidhiḥ N Ed.
- 21d pramoditaḥ] Ms. N: pracoditaḥ Ed.(as TAAKATA's conj. for A'): praboditaḥ A'.
- 24b viṣāditaḥ] corr.: viṣaditaḥ Ms.: viṣeditāḥ N Ed.
- 24c īdṛśātmajenāpi] Ms.: īdṛ ātmajenāpi N: īdṛ ātmajenāpi Ed.
- 24d mām iti vya°] Ms. Ed.(as TAAKATA's conj. for A'): māmāti vya° A' N.
- 28b daivān] Ms. N: daivāt Ed.
- 32d nirutsāho viṣāditaḥ] corr.: nirutsāhaviṣāditaḥ Ms.
- 35a bhāvino bhāvā] Ms. N: bhāvino Ed.
- 35d pālanīyas tayā] Ms.: pālanīyotmayāḥ N: pālanīyotmayā Ed.
- 36c pratibhinnāsyas] Ms. Ed.(as TAAKATA's conj. for A'): pratibhinnāsyās A' N.
- 37c vikhyātaḥ] Ms.: vikhyāte N Ed.
- 38b samṣkṛtvā \*sammatam] corr.: samṣkṛtvā samatam Ms. N Ed. Or read \*prakṛtvā (or \*'tra kṛtvā) \*sammatam?
- 38c tam grha°] ≈ taṅgrha° Ms.: tadgrha° N Ed.
- 40cd vivṛddho 'bhūd dhraḍa°] Ms.: vivṛddhābhū hraḍa° N: vivṛddhābhūd hraḍa° Ed.
- 41a tato] Ms. N: tadā Ed.
- 46c °virūpe] Ms. N: °virūpo Ed.
- 46d jīvite 'sprhā] corr.: jīvite sprhā Ms. N Ed.
- 47d tiṣtheya] Ms. N: tiṣtheyam Ed.
- 48c °puṇyaiḥ] Ms.: °puṇyaḥ N Ed.
- 50b pāpākulaḥ] Ms.: yāyāt kulaḥ N Ed.
- 51d vaseya] Ms.: vaseyam Ed. The text of 50d-52a is lacking in N.
- 53b °kuṭṭim] ≈ °kuṭṭim Ms.: °kuṭṭim N Ed.
- 54b tam virūpaḥ tathā] Ms. N: tam tathā Ed.
- 54d samaicchata] Ms.: samudyataḥ N Ed.
- 58d nirudhyābhyadhyatiṣṭhata] Ms.: nirudhyābhyatiṣṭhata Ed.

- 60a tataḥ sa] Ms. N: sa Ed.
- 60c °kuṭṭīsamālīnas] ≈ °kuṭṭīsamālīnas Ms.: °kuṭṭīsamāsīnas N: °kuṭṭīsamāsīnaṃs Ed.
- 65a bhoḥ] corr.: bho Ms. N Ed. || saḥāyaihi] Ms.: saḥāye hi N Ed.
- 65d sukhānvitau] Ms.: sukhānvitā N Ed.
- 66d samupāśrayat] Ms.: samupāśrayet N Ed.
- 67b virūpikaḥ] Ms.: virūpadhṛk N Ed.
- 67d surasāmṛta°] Ms. Ed.(as TAHAḲATA's conj. for A'): sarasomṛta° A': surasomṛta° N.
- 68b pramoditaḥ] Ms.: sa moditaḥ Ed.
- 68c paripuṣṭāṅga] Ms. Ed.(as TAHAḲATA's conj. for A'): paripuṣṭāṅgā A' N.
- 70a saumyaṃ bhadra°] Ms.: saumyabhadrā° N Ed.
- 71c puṇyavipākāt tad] = puṇyavipā<<kā>>t tad N: puṇyavipākān tad Ed.: puṇyavipāt tad Ms. (metre!).
- 73d \*mahābalā] ex conī: mahabalā Ms.: mahebalāḥ N Ed.
- 78a \*bhāgyaṃ mayā] ex conī: bhāgyā mayā Ms.: bhāgya mayā N Ed.
- 82c lakṣmīḥ] Ms.: lakṣmī N Ed.
- 83d sadguṇārthī] Ms.: sadguṇārthi N: sadguṇārtho Ed.
- 84b dṛṣṭvaitan] Ms.: dṛṣṭvaitan N: dṛṣṭvaitat Ed.
- 85a tata utthāya] Ms. N: tataḥ utthāya Ed.
- 86a bhavato] corr.: bhavatā Ms. N Ed.
- 86c lakṣmīr] Ms.: lakṣmī N Ed.
- 86d cātisundaraḥ] Ms.: yātisumḍaraṃ N: yātisumḍaraḥ Ed.
- 88b bauddhaśāsane] Ms. N: buddhaśāsane Ed.
- 94a tātodyāne] Ms.: tatrodyāne N: tatodyāne Ed.
- 94d dhyātvā] Ms. N: dhyatvā Ed. || yogivat] Ms.: yogavit N Ed.
- 95c bhogyam] Ms. N: bhogyam Ed.
- 98a etan mahac] Ms. N: etat mahac Ed.
- 100b sugatīṃ] Ms. N: sugatīṃ Ed.
- 100d yāyā] Ms.: yāyāj N Ed.
- 103b puṇyavāñcho 'si] corr.: puṇyavāñchāsi Ms.: puṇyavāñchāmi N: puṇyavāñchābhi Ed.
- 103d buddhas] Ms.: buddha N: buddhat Ed.
- 104a vāñchātra] Ms.: vāñchati N Ed.
- 104c buddhaṃ śaraṇaṃ] ex conī: buddhaśaraṇaṃ Ms. N Ed.
- 105c pādān] Ms. N: pādau Ed.
- 109a pravrajitaḥ] Ms.: sa vrājitaḥ N Ed.

- 109cd khikkhirīpātra\*hasto \*'bhūc cīvara] ex conī: khikkhirīpātrabhṛ{{kta}}ccīvara° Ms. (metre!): khikkhirīpātrabhṛc cīvara° Ed.: khikkhirīpātrabhṛ<<datra>>ccīvara° N. Cf. RAM, TAKAHATA (1984), p. 140 (XI 9cd): muṇḍitaḥ kṣiṣkhirīpātrahasto 'bhūc cīvarāvṛtaḥ //.
- 110e bodhipakṣa] Ms.: bodhipakṣe N Ed.
- 113d yogadhṛk] Ms. N: yogavit Ed.
- 116a bhagavañ chāstar] corr.: bhagavañ chāsta] Ms.: bhagavac chāsta N: bhagavāc chāsta Ed.
- 120c sarvaṃ] Ms. N: sarvaiḥ Ed.
- 121a tadyathābhūt] Ms. N: yathābhūt Ed.
- 124b hitārthabhṛt] N Ed.: hitābhṛt Ms. (metre!)
- 125b lokāḥ prabodhitāḥ] Ms. N: lokāḥ prabodhitāḥ Ed.
- 126a puṣyo] Ms. Ed.(as TAHA-KATA's conj. for A'): puṣyā A' N.
- 127c ubhāv etau] Ms. N: ubhav etau Ed.
- 128b paripācitā] corr. (or paripākinī?): paripākitā Ms. N Ed.(as TAHA-KATA's conj. for A'): paripākitāḥ A'.
- 133c phalamūlaṃ samāhartuṃ] corr.: phalamūlasamāhartuṃ Ms. N Ed.
- 135c ivojjvālaṃ] Ms. (m.c. for ivojjvalaṃ): ivojjvālaṃ N Ed.
- 137d pūjāṅgair ārcayan] Ms. pūjāṅgainārcayan N Ed.
- 139b marubhavane] Ed.(as TAHA-KATA's conj. for A') (cf. Avś): manudbhavane A' Ms. N.
- 139d tulyo 'nyo] ≈ tulyonyo Ms.: tulyānyo N Ed.
- 140a etayā] Ms.: etayo N Ed.
- 140d mudābhajat] corr.: mudā bhajan Ms. N Ed.
- 141b puṣyas tathāgato] Ms.: puṣyathāgato N Ed.
- 141c pariṣṭutas] corr.: paristutas Ms. N Ed.
- 142d saṃpannena] Ms. N Ed.(as TAHA-KATA's conj. for A'): sapannena A'.
- 144d 'vasat] Ms. N: 'hasat Ed.
- 147d abhīṣayat] Ms. N: abhīṣapat Ed.(as TAHA-KATA's conj. for A'): abhīṣayan A'.
- 148b bhīṣayitvāpi] Ms. N A': bhīṣapitvāpi Ed.(as TAHA-KATA's conj. for A').
- 150d parimaṇḍitaṃ] Ms. N Ed.(as TAHA-KATA's conj. for A'): parimaṇḍitaḥ A'.
- 154c jagannāthaḥ] Ms. N: jagannātha Ed.
- 155d bhajeya] Ms. N: bhajeyaṃ Ed.
- 161d samāhitā] Ms. Ed.(as TAHA-KATA's conj. for A'): samāhitāḥ A' N.
- 163a tathārthitaṃ] Ms.: tayārthitaṃ N Ed.
- 164c rakṣito loke] Ms.: rakṣitā loke N Ed.
- 170c triratnabhajanaṃ] Ms. N: triratnaṃ bhajanaṃ Ed.
- 174c eveti] Ms. Ed.(as TAHA-KATA's conj. for A'): evaiti A' N.
- 176b śubhataiva] Ms. N: śubhataivaṃ Ed.

179a bhaven] Ms.: bhava N Ed.

179c karma] Ms. N: karmaṃ Ed.

179d \*phaled] ex conī: kuled Ms. N Ed.

180d vyabhīṣayat] Ms. N A': vyabhīṣapat Ed.(as TAHAkata's conj. for A').

182c vibhramśyo] ≈ vibhransyo Ed.(as TAHAkata's conj. for A'): vibhratsyo Ms. N A'.

185d arhattvam] Ms.: arhatvam N Ed.

188b śrutam mayātra] Ms. N: mayātra Ed.

189c pratiṣṭhāpya] N Ed.: pratiṣṭhā Ms.

189d pālanīyaḥ] Ms.: pālanīyaḥ N Ed.

192a manujā] Ms. N: manuja Ed.

192d saṃbuddhe] Ms.: saṃbuddha N Ed.

(Colophon:) iti virūpāvadānaṃ samāptam // 34] Ms.: iti virūpāvadānaṃ samāptam // 32 N: iti ratnāvadānatatve virūpāvadānaṃ samāptam // Ed.

### SMRAM 第34章 『ヴィルーパ（醜異な姿）・アヴァダーナ』 Virūpāvadāna 和訳

#### vv. 15-192

彼らすべてはそこにかの光輝に充ちた方（仏）を見て、心に歓びを得て、拜んで右邊してから前方に進みました。[15] そこで彼らすべての生類は作法通りに敬意を示し、かの牟尼の王（仏）を拜礼して、法を聞かんと近坐しました。[16]

するとかの世尊は近坐した彼らすべてを見つめつつ、菩提行に関する正法を説かれました。[17]

その正法の甘露を飲んで、神々をはじめとする彼らすべての生類は「それが真実である」と知って、気づきを得て、歓喜しました。[18]

その頃、そのシュラーヴァステイー [の都城]（舎衛城）に市民として一人の資産家がありました。クベーラ神の如く大資産をもち、栄光を有する名士でした。[19] (#2)

彼は出自が自分の家系に等しい、自分の家の伝統法（svakuladharmā）に従う、若い美しい女を妻として娶って、作法どおりに正しく結婚しました。[20] (#3)

そして彼は愛を求める彼女と欲望に耽りました。欲するがままに快楽を味わい、歓喜して絶えず楽しみました。[21] するとかの資産家が欲するがままに享樂するうちに、時が来て、ほっそりした身体のかの善良な妻は妊娠しました。[22]

それから臨月が来て、彼女は息子を産しましたが、その子は忌まわしい容姿で、醜く、罪深い外見をもち、醜異な姿（virūpa）で、奇形の体をしていました。[23] (#4)

その子を見た母親は、心引き裂かれ、絶望し、「こんな子供をどうしよう。なんと私は惨めなことか」と考えました。[24]

そしてかの父も、彼が異形の身体をもって生まれ、醜悪で、忌まわしい姿をしていると聞いて、次のように考えました。[25]

「ああ、こんな不幸な姿をした、醜い息子が生まれるとは、私はかつて前世でどんな悪い事をしたのか。[26] ここではいかなる、なすべき方策も私には考えられない。なんと私は哀れなことか。息子が生まれて、恥ずかしさのため、幸福は私から奪われた。[27] しかしながら、私は何をすべきだろうか。運命によって私にこの子が生まれた。醜悪であっても、この子は息子として、私が守ってやらねばなるまい。」[28]

このように夫が言うのを聞いて、その妻も、次の様に言いました。—「私たち二人が悪い事をした結果なのですから、その報いを受けましょう。[29] 必然でないことは、味わうべきではありませんが、必然のことなら、そうなるしかありません。不可避の[事がら]はどこにもあります。あらゆる生き物は[必然に]味わわねばならないことを味わいます。[30] それ故、努力して私はこの赤ん坊を守ってやりましょう。」—こう言って、傷心のその妻は恥じながら、おりました。[31]

父もその生まれた醜い姿の息子をしげしげと見、羞恥に引き裂かれた心で、気力を失い、落胆に沈んでいました。[32]

「ああ、私が前生でどんな悪行をなしたのか、考えられぬ。そのため、この醜い、忌まわしい姿をした赤ん坊が生まれたのだ。[33] しかしそうはいっても、私は何をなすべきだろうか。運命によって私たちにこの子が生まれた。どんな生物でも、運命によって享受すべく与えられたものは、味わわねばならない。[34] どうしようもなく、あらゆる生き物は不可避の事がらをもつ。それ故、息子であるこの赤ん坊を彼女と私とで守ってゆかねばならない。」[35]

このようにその父は思い巡らして、その赤子の顔を見ながら、恥ずかしさのために顔をしかめて、運命のことを沈思しながら、いました。[36]

その後、親族を呼び集めて、誕生祭を行い、父は言いました。「[人々に]呼ばれるための名前をこの子に付けて下さい。」[37] (#5)

そこで彼ら親族たちすべては相談して、かの家長を呼んで、面前で次の様に命じました。[38]

「家長よ、あなたに生まれたこの息子は醜い姿（ヴィルーパ）であるから、それ故、この子供は[それを] 名前として（『ヴィルーパ』という名で）地上で認定されるべきである。」[39]

その後、母は愛情によりそのヴィルーパを苦勞して守りました。まるで蓮池の中の蓮のように、彼は養育されて次第に成長して、大きくなりました。[40] (#6)

その後、彼が思春期に達した時、異形の身体をもつヴィルーパは自分の姿を鏡で見て、恥ずかしさを感じました。[41]

恥じつつ、かのヴィルーパーは惑乱して、罪の意識に一杯になり、心で次の様に思いました。[42]

「ああ、私が〔前生で〕どんな悪行をしたため、罪深い姿になったのだろうか。こんな私の身体に、何の用があるだろうか。私はここで死んでしまうのが一番よいに決まっている。[43] 醜悪な私は何をすべきだろうか。醜い姿で、どこに行けばよいのだろうか。単に苦しみを味わうばかりの、私のこの生は無意味だ。[44] だからここで私は家を捨て、園林に行って、〔そこで〕仏・善逝を思念しながら、私は死に赴こう、〔生からの〕解放のために。[45] 〔輪廻の〕生存において、あらゆる生き物にとって死は避けられないことだ。それ故、私はこのような醜悪な今の身体において、生きることを欲しない。[46] もし私がこの世で長く生きても、非難され、苦しみを味わうだろう。それ故、かの仏・善逝を瞑想しつつ、〔園林で〕生からの解放を待ちながら、いよう。[47] もし今かの仏・勝者を瞑想しながら私が死ぬならば、その福德によって充たされて、必ず善趣に行けるだろう。[48] 自ら仏・善逝を憶念しつつ死ぬ者たちは、悪趣には堕ちず、スカーヴァティー（極楽）に行く。[49] それ故、彼ら賢明な善人たちは罪悪に満ちた家庭〔生活〕を捨てて、仏への憶念という瞑想に耽りながら、無人の森に住んでいる。[50] 同様に、私もそのことを観じて、仏に帰依し、常に瞑想して〔仏を〕憶念しながら、無人の森に住もう。」[51]

このように心で考えて、かのヴィルーパーは、清澄な思いをいだき、裕福な家を捨てて、廃れた園林に行きました。[52]

寂れた地にあるその園林で、彼は木葉の小屋に住みつつ、世尊を憶念しながら、瞑想に集中して、過ごしました。[53]

その時、かの世尊・師（釈尊）はそのヴィルーパーが浄らかな心でそのように過ごして居るのを観察して、救済しようと欲しました。[54] (#7)

そしてそのヴィルーパーを見つめつつ、比丘僧団と一緒に、かの世尊・守護主は輝きながらその園林にやって来ました。[55]

その〔仏の発する〕光明に触れたかのヴィルーパーは真の安らぎを得て、僧団を連れて訪れ来たその方を驚愕して見ました。[56]

かの牟尼の王（仏）を見ると、そのヴィルーパーは惑乱し、羞恥を感じ、起ち上がって、その人から逃げようと、あちらこちらへ走りました。[57]

其処で、かの世尊はそのヴィルーパーが逃げるのを見て、すぐさま神通によって〔その〕方角の道で〔逃げ口を〕塞ぎつつ、加持しました（靈的支配力を行使しました）。[58]

そのようにかの教令者〔の神力〕によって封じ込められたかのヴィルーパーは、逃げようと懸命に試みましたが、まったく出来ませんでした。[59]

その後、消耗し切ったかのヴィルーパーは、羞恥の心をもって、木葉の小屋に伏せて、まるでフクロウのごとく恐れつつ [その場に] 居ました。[60]

そこでかの世尊は恥じた心で横たわっている彼を見て、その時滅尽定に入られました。[61] (#8) そしてかの世尊・師はその定から出られると、[尊師は] 御自身を、異形の身体をもつ醜い姿に化作しました (魔術的に変化させました)。[62]

そして食べ物で充たした土製の皿を手を持って、ゆっくりとヴィルーパーの木葉の小屋に行きました。[63]

其処で、彼に近づいて来た異形の身体をもつ醜悪なその人 (仏) を、かのヴィルーパーは見て、歓喜して、次の様に語りました。[64]

「よく来たね、友よ。おいで。どこに行こうとしてここに来たの。ここに留まったらよい。我ら二人は楽しくこの家にずっと住もう。」[65]

このように彼が言うのを聞いて、かの醜悪な姿をもつ世尊は「お前に会うためにやって来たんだよ」と答えて、近づきました。[66]

其処に留まって、醜い容姿のかの世尊は話をしながら、とても美味な甘露のような食事をそのヴィルーパーに与えました。[67] (#9)

そのヴィルーパーは喜び、与えられたその食事を食べると、たちまち体の栄養状態がよくなり、感官は満足しました。[68]

するとかの世尊・師は悦ぶ彼を見て、その場で [本来の] 自分の姿に戻り、光を放って輝きました。[69] (#10)

その光輝に充ちた方 (仏) が見た目に快く、麗しい姿の身体をもち、感官も輝かしいのをかのヴィルーパーは見て驚愕し、次の様に言いました。[70]

「ああ、あなたはどのようにして、そのようにとても美しくなられたのですか。一体何による福德の異熟の結果ですか。私の前で、どうかお話し下さい。」[71]

このように彼に請われたかの世尊・牟尼の王は、そのヴィルーパーを覚知させるために、見つめて次の様に教えました。[72]

「善き人よ、私には偉大な明呪 (呪文・明知) がありますが、[それは] 悟りを達成させる最高のものであり、『心に浄信の生起を産出するもの』という名をもつ、大威力のものです。[73] その威力により、私は輝かしい感官の、あらゆる点で麗しい姿の身体をもつ、すべての有情から愛される者になったのです。」[74]

かの世尊・牟尼の王 (仏) はそう教えると、其処で端嚴な坐を組むと、光を発しつつ、正法を説き始めました。[75]

すると優美な姿をし清らかな感官をそなえたすべてのかの僧たちは、牟尼の王を取り囲み、その [仏] に侍従して、傍に仕えました。[76]

それらの優美な姿をした清らかな感官の、傍に仕えるすべての [僧] たちを見て、「この方は善逝 (仏) だ」と彼は思い、驚愕しました。[77] (#11)

「ああ、私はここで今〔何という〕幸運・大福德を得たのだろう。私のためにこの牟尼の王が僧団の人たちを伴って、やって来られるとは。[78] この牟尼の王は恐らく、私の業に促されて、慈悲をもって正法を説くために、僧たちを伴い、ここに来られたのだろう。[79] それ故、私は信仰心をもってかの牟尼の王に帰依し、敬重して、一心に仏の教えを聞くべきである。」[80]

このように心中で熟慮し、歓喜したかのヴィルーパーは〔仏に〕近づき、合掌し拝礼して、近坐しました。[81]

その時仏の功德の威力の結果、かのヴィルーパーには神々しい享樂を与える『めでたい美』(lakṣmī) がその場で出現しました。[82] (#12) その時かのヴィルーパーは、神々しく美形で端正になり、三身清浄なる者・善い徳性を求める者・清らかな肢体の者となりました。[83]

強い浄信の心をもつ彼はこの偉大な奇跡を見て、悦び、合掌して、かの牟尼(仏)に接足作礼しました。[84] そして起き上がると、僧団の者たちを伴ったかの世尊・主を見つめて、浄信をいやく彼は、丁重にお願いしました。[85]

「世尊、師よ、あなたの憐愍の視線の恩恵により、私に『めでたい美』(lakṣmī) が現れました。私はとても美しくなりました。[86] それ故、この偉大な希有なる出来事を見て、あなたという帰依処の許に居て、常に禁戒(戒律)を行じんことを私の心は望みます。[87] それ故、世尊、主よ、この場で憐れみをもって仏の教えに導引し、私を清らかな法に繋ぎ止めて下さい。[88] 世界の保護者よ、信心をもって私はあなたに帰依いたします。出家して、禁戒を保ち、一心に行をいたします。」[89]

このように彼が請うのを聞いて、かの世尊・牟尼の王(釈尊)は浄らかな心性をもつ彼を見て、語りかけて、次の様に教示しました。[90]

「いとしい子よ、もしあなたが仏の誓戒を行ぜんと欲するなら、父の許可を得て、戻って来なさい。その時〔出家戒を〕与えよう。」[91]

このように牟尼の王に教示された彼は、聞いて歓喜し、かの牟尼に悦んで接足作礼すると、歩み去りました。[92]

彼はその自分の家に戻ると、合掌して父親に接足作礼し、面前に坐し、丁重に次の様に語りました。[93]

「父よ、ヴィルーパーです。私はかく羞恥に絶望し、園林でヨーガ行者のように木葉の小屋に坐して、瞑想して暮らしていました。[94] 其処に、かの世尊・仏陀が僧団を伴って、自ら来て下さいました。方便を知るお方は〔私を〕覚知させ、不死の甘露という食べ物を与えてくれました。[95] かの方が与えて下さった不死の甘露を食べて、私は美しい姿になりました。『めでたい美』(lakṣmī) が現れ、このように私に幸福が生じました。[96] このすべては牟尼の王(釈尊)の、憐愍の視線の恩恵によるものです。それ以外ではありません。このようにお知りになり、常に善逝に浄信をおもち下さ

い。[97] このように、この偉大な驚異を目撃して、浄信を得た私の心は今日、仏の教えの許で誓戒を行ぜんと欲しています。[98] このことを請うために、私は今日、悦んでここに帰って来ました。それ故、父よ、憐愍によりこの場で、私にその〔出家の〕ご許可をお与え下さい。[99] その事の福德の分け前により、あなたも〔死後に〕善趣に行かれるでありましょう。其処で常に幸せを味わってから、仏の住まい（極楽）に行かれるでしょう。[100] このようにご理解になり、浄信をおもち下さい。ここで別の考えをなさってはいけません。信心により〔私に〕恩恵を施されて、その事のご許可を私にお与えください。」[101]

このように〔息子が〕請うのを聞いて、かの家長は驚愕し、そのわが子を父として長い間見つめてから、次の様に言いました。[102]

「ああ、息子よ、〔お前は〕幸せ者だ。今やお前は福德を望む者となった。かの仏が憐れみによって近づかれて、お前を守って下さったおかげだ。[103] それ故、もしお前がこの世で仏教の誓戒を行ぜんと欲するなら、仏に帰依をなして、一心に誓戒を行じなさい。」[104]

このように父が答えたのを聞いて、心悦ぶそのヴィルーパは、両親に接足作礼し、直ちに家から出ました。[105]

そして喜悅するかのヴィルーパは牟尼の両足を拝み、丁重に次の様にお願ひしました。[106]

「世尊、主、一切智よ、〔父の〕許可を得て、戻ってまいりました。それ故、憐愍によりあなた様は私に禁戒（律儀）をお与えくださいますように。」[107]

このように彼に請われて、世尊は彼の頭頂を左手で撫で、〔仏の〕教えに彼をおさめ取りました。[108] そこでかのヴィルーパは師によって出家せしめられ、剃髪して、杖と鉢を手に持ち、法衣を纏って、輝きました。[109]

そしてかの比丘は、自らを知る者・制御者・感官を克服した者として、輪廻の〔すべての〕造り出された現象（行）の趣くところ（行路）を、刹那に破壊があるものとみなし、無明の群を打ち砕きつつ、〔三十七〕菩提分法に努力しました。[110] そしてかの出家は陀羅尼・明呪・三昧を楽しみ、あらゆる煩惱の群を克服し、作証して阿羅漢果を得ました。[111]

〔彼は〕輪廻を得ることに恭しく敬われることにも欲求をもたず、清らかな心で、清浄な三身を有し、無分別で無欲の者として、梵行者・ヨーガ行者として、三界に住んで行為する神々とアスラを含む生き物たちから敬意を示されるべき者、供養されるべき者、礼拝されるべき者となりました。[112-113]

その時それらすべての比丘たちは最高の行者としての彼を見て、驚いて、かの牟尼に拝礼し、彼の前世の行為を尋ねました。[114] (#13)

「世尊よ、かの阿羅漢はいかなる業を前世で作ったのでしょうか、そのせいで罪深い姿をもつ醜い者として今世に生まれるとは。[115] そして世尊、師よ、あなた様のおかげでこの方は浄信を得て、めでたい美をもつ者、美貌の者、善い諸性質を楽しむ者になったとは。[116] そしてこの方は信心をもって仏の教えに帰依し、直ちに煩惱の集合体という敵に打ち勝ち、阿羅漢果を獲得したとは。[117] この方が前生で行ったこと、そのすべての出来事を詳しくお話くださり、私たちすべてに覚知を得させて下さい。」[118]

このようにそれらすべての比丘たちに請われたかの牟尼の王（釈尊）は、それら僧団の比丘たちすべてを眺めて、教示されました。— [119] (#14)

聞きなさい、すべての比丘たちよ。この者が前生で作った、そのすべての業を語りましょう、すべての生類を論ずるために。[120]

すなわち、かくの如くです。往古に、プシュヤという名の仏・如来・一切智・阿羅漢・世間師・法王・牟尼の王がいました。[121] (#15)

かの世尊・世界の守護者は、至る処で幸福を作りつつ、諸仏の法を説くためにあらゆる場所を訪れました。[122] すべての他所におけると同様に、魔の勝利者たる彼は [ある時] 僧団の者たちを伴って、東北の方角の区域にある王都に滞在しました。[123] (#16)

其処でかの世尊・師・あらゆる有情に益をもたらず者は、最初も途中も終わりもすばらしい、聖なる法を説かれました。[124] その正法の甘露を飲んで、すべての者たちは覚知し、三宝に奉仕をなし、常に善行を行いました。[125]

その地においてかの世尊プシュヤは、益をなすために、仏眼によって世間の至る処を観察した時、二人の仏子（菩薩）を見ました。[126] (#17)

一人は釈迦牟尼 (śākyamuni) という名の [賢者]、もう一人は弥勒 (maitreya) という賢者であり、その当時彼らは両方とも菩薩・仏子でした。[127]

聡明な者・弥勒の、『自らの相続』（心のあり方）は熟していましたが、その師（弥勒）によって教化されるべき有情たち（弥勒の弟子たち）は熟していませんでした。[128] 釈迦牟尼の教化されるべき者たち（釈尊の弟子たち）は熟していましたが、[師である釈迦牟尼の] 相続（心のあり方）はそうではありませんでした。このようにかの善逝プシュヤは見てとり、次の様に考えました。[129]

「ああ、釈迦牟尼の『自らの相続』は熟していない。彼の『自らの相続』を熟させるために、彼の近くで行をなそう。」[130]

このようにかのプシュヤ如来は思惟し、僧団の者たちを伴って、ヒマラヤの山に赴き、輝きながら歩みました。[131] (#18)

彼は其処の宝石の洞窟に入り、そしてかの牟尼の王は端嚴な坐を組み、火界定に入って、瞑想しつつ居りました。[132]

その時、そこに気高い心をもったかの釈迦牟尼が、果実や根を採るために、彼の近くにやって来ました。[133] (#19)

その宝石の洞窟において、三十二相八十種好によって飾られ、宝石の連りのように燦めいて、百の太陽にまさって輝いており、優美で、天を超える輝きをもち、どこから見ても美しい姿で、睡蓮のように清らかな容顔のおもちの法王、— 結跏趺坐を組んで、瞑想に没頭して、輝いているかの如来・牟尼プシュヤを、[釈迦牟尼菩薩は] 見ました。[134-136]

そこでかの [美しい姿の] 善逝を見て、かの釈迦牟尼は歓喜し、直ちに合掌して拝み、悦んで供養の品々をもって崇拜しました。[137] (#20)

そして彼は悦んで七夜の間一本足で立ち、合掌して拝礼しつつ、この偈頌をもって讃えました<sup>(8)</sup>。[138] (#21)

『 [もし] 山と林を有する広大な大地すべてをさまよい歩いたとしても、天空にも大地にも、この世界にも、毘沙門天の住まいにも、天宮という神々しい場所にも、四方にも四維にも、人間の最高者 (仏) に等しい偉大な沙門が、他にどうして存在するでしょうか。』 [139]

この偈頌をもってかの善逝・牟尼プシュヤを讃えつつ、かの釈迦牟尼は感激をもって七夜の間一心に崇拜しました。[140] (#22)

そして七日が過ぎた時、讃えられたかのプシュヤ如来は悦びつつ、その釈迦牟尼を見て、次の様に言いました。[141]

「みごと、みごとだ、大士よ。あなたがこのように努力したことは、再生族の最高者よ、[あなたの] その申し分のない力と努力により、今日 [あなたが] 如来を讃えたことで、[成仏までにかかる時間の] 九劫が消えた (短縮された)。次第に [六] 波羅蜜を完全なものにして、あなたは悟りを得るであろう。」 [142-143]

このようにかの牟尼の王・法王・勝者プシュヤは教えてから、偉大な者たちに囲まれて、其処で禅定を楽しみつつ、滞在されました。[144] (#23)

最高の再生族の者 (婆羅門) である賢者、かの釈迦牟尼菩薩も、強い信愛をもってかのプシュヤに帰依し、常に崇拜しました。[145]

其処に仏が居られる時、洞窟に住む一精霊がいましたが、その者はその洞窟に入ることがどうしても出来ませんでした。[146] (#24)

---

8. この *hāriṇī* 韻律からなる一偈頌は Avs 97話に出るものとほぼ同じである (pāda d が少し違う)。しかし大智度論巻四では次の簡潔な一偈頌をもって七日七夜讃えたとする：「天上天下無如佛、十方世界亦無比、世界所有我盡見、一切無有如佛者」 (T25 87c11-12)。

そこでその者はひどく醜異な目をして（恐ろしげに目をつりあげて）、異形の体で、醜悪な姿になって、禪定に耽るかの善逝ブシュヤを威嚇しました。[147] (#25)

そのようにして、悪い思いをもつその者が長い間威嚇したにもかかわらず、その牟尼の心を全く動揺させることは出来ませんでした。[148] (#26)

その時その〔精霊〕は、心は驚きに打たれ、不安になって意気消沈して、本来の姿をもってその〔仏〕に会おうとして、拝礼して近づきました。[149]

そこでかの善逝・如来・牟尼の王ブシュヤの、三十二相八十種好に飾られた姿、百の太陽にまさって、あらゆるものを凌駕する快い輝きを放つ、麗しい肢体の、禪定に耽っている寂靜な姿を、見ました。[150-151]

その〔精霊〕は見るや否や、浄信をいだき、「この方は福德に充ち、悉地をおもちの方だ」と思慮して、美しい姿で、彼の近くに行きました。[152]

そこでその者は合掌し、その牟尼の両足を拝して、面前に立ち、堪忍を求めため、頭を下げて次の様に請いました。[153] (#27)

「世尊、主、一切智よ、私があなた様に対して〔先に〕なしたことを堪忍なさってください。あなた様は実に世界の守護者であり、忍辱の法の王です。[154] それ故、世間師よ、ここで私はあなた様に帰依いたします。常に近侍し、信心をもって悦んで奉侍いたします。[155] ここであなた様と僧団の者たちに、作法どおりに供養をしたいと私は望みますので、世間師よ、そのことをご許可ください。」[156]

このように彼に請われて、かの世尊・牟尼の王ブシュヤは、清浄な心をもつその者を見て、沈黙をもってそれに同意されました。[157]

〔願いの〕とおりに師は認可されたと考え、彼は歡喜して、急いで直ちにそのための食事すべてを用意し終えました。[158] そして悦ぶその者はかの牟尼の王の許に行き、供養の品々をもって供養しつつ、神々しい食事によって仏と僧団を満足させました。[159] そして食事が済んだ後で、悦ぶ彼は拝み合掌して、寛恕を請いつつ、お辞儀して次の様お願いしました。[160]

「世尊、主、一切智よ、私はあなた様に帰依します。絶えず奉侍しつつ、一心に信奉いたします。[161] 世界の守護者よ、私が悪しく罪をなしたことを堪忍なさってください。あなた様は忍辱を行う師・仏として、恩恵をお授けください。」[162]

このように請うのを聞いて、かの世尊・牟尼ブシュヤはかの精霊 (devatā) を見つめて、正法を教示しました。[163]

「精霊よ、法を聴聞しなさい、この世とあの世で幸せを得るために。法によって護られた者は、世間の一切処で安樂を得る者となるでしょう。[164] それ故、まず最初に信心をもって諸仏の勝れた法を聴聞しなさい。それから三宝に奉仕しつつ、求める者に布施を与えなさい。[165] すると清浄な三身を有する者、清浄な戒を有する者、清らかな心性をもつ者になります。それから真理に専心する者、あらゆる有情に忍辱をなす

者となります。[166] 悟りの達成のために努力することで、あらゆる煩惱に打ち克つでしょう。それから禅定と三昧の中であって、般若（悟りの智慧）という宝石を獲得するでしょう。[167] そのすばらしい宝石の威力によって、あらゆる魔に勝ち、一切有情を益するという目的により、仏の位を得ることでしょう。[168] このように理解し、この輪廻界でつねに幸福を欲する者たちは、法を聴聞して、常に〔人の〕求めに応じて布施をなすべきなのです。[169] あなたも同様に、もし幸せを伴った安楽を常に欲するなら、三宝を尊崇（供養）しつつ、〔人の〕求めに応じて布施をなさい。[170] その福德を、悟りの達成に廻向しなさい。その福德の異熟によって、あなたは悟りをきつと得ることでしょう。」[171]

このように牟尼の王が教示されたのを聞いて、かの精霊は覚知し、「そのようにいたします」と約束して、〔その教えを〕喜んで受け入れました。[172]

そしてかの善逝・如来プシュヤは僧団と共に起ち上がって、輝きながら自分の僧院へと戻られました。[173]

このヴィルーパーは実にその洞窟に住する精霊だったのです。あなた方はそれが真実であると考えて、別様に考えてはなりません。[174] (#28)

このように理解し、この輪廻界で常に幸福を欲する者たちは、三宝を尊崇（供養）しながら、絶えず浄行を行うべきです。[175] (#30) 生存において、白浄の業が熟する時は、常に白浄さ（幸せ）があり、黒い業には苦が、また同様に〔白黒〕入り混じった業には入り混じった〔苦楽〕があります。[176] 享受されない業はどこにおいてもいつまでも消滅することはありません。業を作った者によって、その果が享受されます。[177] 業は火によって焼かれず、水によって湿らず、風によって乾涸らびず、地中でも滅しません。[178] 業は、どこにおいても如何にしても、別様になることはありません。定めて、作られた業はその通りに結果するのです。[179]

その場所で洞窟に住するかの精霊（devatā）は、悪心をいだいて、醜異な目をして（恐ろしげに目をつりあげて）、〔醜悪な〕異形の体になって、プシュヤを威嚇しました。[180] (#29) その罪の異熟により、五百生の間、この者は生存において常に異形の体となり、醜異な目をもつ者となっていたのです。[181] この罪から解放されないこのヴィルーパーは、異形の姿をもち、下落すべき忌まわしい容姿の者として、現世でこの地に生じたのです。[182]

しかしかの精霊は後から、後悔に苦しんだ心をもち、かのプシュヤ仏に浄信をいだく者となって、帰依しました。[183] そして信心をもって、悦んで神々しい食事をもって恭敬し、供養しました。そのことの福德の異熟によって、〔今世の〕生存において〔このヴィルーパーは〕尽きることがない幸せを得ました。[184] この地で信心をもって諸仏の教えに近づき、出家して禁戒を授かり、作証して阿羅漢果を得ました。[185]

このようにあなた方はよく認識して、つねに浄行をなしなさい。[そうすれば]後に菩提に達して、仏の位を得るでしょう。[186]

このように牟尼の王（釈尊）が説かれたのを聞いて、それらすべての僧団の人々は随喜し、「真実である」と言いつつ、全く同意しました。—[187] (#31)

以上、師がお教えになったことを私（ウパグプタ）が聴聞したとおりに、私はここでお話しました。大王よ、あなたもまたそのように常に浄行をなすべきです。[188]

王よ、努力して民衆をもこのように覚知せしめ、悟りへの道に安立させ、いつも注意して守護してください。[189] そのことによってあなたにはいつも絶えずどこにおいても幸せがあるでしょう。そして次第に菩提に達して、あなたは仏の位を得るでしょう。—[190]

以上のようにかの阿羅漢（ウパグプタ）が説かれたのを聞いて、かのアショーカ王は覚知し、「そのようにいたします」と約束して、[その教えを]喜んで受け入れました。[191]

もしこの師が教示したヴィルーパー・アヴァダーナを聞いて、浄信をいだく人々が、歓びの心もち、福德を欲して、[他の人々にもそれを]聞かせてあげるならば、それらの人々は皆、榮耀（繁栄）を得て、あらゆる善い性質を持して、真の幸福を味わい、仏への尊崇を楽しみつつ、最勝の善逝の住まい（極楽）において、歓喜に至るであろう。[192]

以上、『ヴィルーパー・アヴァダーナ』終わる。第34章。

## 第2節 Avadānaśataka 第97話 Virūpaḥ と SMRAM 第34章の比較

上の節でテキストの和訳を示した SMRAM 第34章 Virūpavadāna の原話である、Avadānaśataka (略号 Avś) 第97話 Virūpaḥ の全訳を次に示し、その後、それら二つのテキストを対照させてみたい。なお Avś のこの話では、梵文とチベット訳のテキストの間に（特に #6 の段落において）興味深い大きな伝承の相違が見られる。その点については脚注に記した。

### アヴァダーナ・シャタカ第97話『ヴィルーパー』（Virūpaḥ）和訳

SPEYER ed., ii.173.1-178.5

#1 仏・世尊は、王や大臣や財産家や市民や長者（富商）や隊商長や神や龍や夜叉や阿修羅やガルダやキンナラやマホーラガに敬意をもって遇され、重んじられ、尊ばれ、供養されておりました。このように神や龍や夜叉や阿修羅やガルダやキンナラやマホーラガに崇められた仏・世尊は高名で、大福德に恵まれた者であり、衣服・施食・臥具坐

具・病気治療のための薬といった日用品を得ており、弟子たちの僧団とともに、シュラーヴァステイーにあるジェータ林のアナータピンダダの園林に滞在しておりました。

#2 [バルガ (bharga) という国に<sup>(9)</sup>] 或る一人の資産家がいました。富裕で、大資産をもち、莫大な所有品を有して、毘沙門天 [ほど] の財をそなえて、毘沙門天と富を競うかのようでした。

#3 彼は相応しい家から妻を娶りました。彼は彼女とともに戯れ、娛しみ、悦楽の行為をしました。戯れ、娛しみ、悦楽の行為をしているうちに、彼の妻は子を孕みました。

#4 彼女は八箇月か九箇月経つと出産しました。男の子が生まれましたが、生まれたばかりの子の全身は奇形に満ちていました。その男の子は醜く、醜悪であり、欠点となる身体的特徴を十八もそなえていました。彼の父母は彼の肢体すべてが醜く、醜悪で、奇形の姿であるのを見てから、思いに沈んだままでした。

#5 彼が生まれると、誕生祭がなされ、名前が決められました。「子の名前は何かが良いでしょうか。」親族たちはいいました。「この [子] は生まれたばかりで [すでに] このような醜悪な姿をしていますから、子供の名はヴィルーパー (醜異な姿の者) がいいでしょう。」<sup>(10)</sup>

#6 やがて成長して大きくなった時、羞恥によって彼はひどく縮こまってしまいました。「どこか他所に私は行ってしまおう。どこに居ればいいだろうか」と考えて、とてもさびれた或る廃園に去りました<sup>(11)</sup>。

---

9. この国名の箇所は、ネパールの Avs 梵文写本ではなぜか記されてない。それは Avs の基幹写本となる Cambridge Add 1611 写本で 93b, l. 8 にあたる箇所であり、写本はそこで虫食い等のゆえに欠損しているわけではなく、'nāthapiṇḍasyārāme {{ya}} anyatamo gr̥hapatir と記されている。写経生が ya 文字 (か pa 文字) の上に削除記号を付して、削除したその {{ya}} の箇所が、チベット訳を見ると yul bha rga zhes bya ba na 「バルガ bharga という名の国に」となっている。そのため私はここでそのチベット訳によって、ネパールの梵本には欠けている都市名を補った。なお SMRAM 第34章 (Virūpāvadāna) ではシュラーヴァステイー (舎衛城) の市民として一人の資産家がいたことになっているが、これは Avs のその写本伝承の欠損に起因して、ネパールで勝手に補って出来た伝承とみなすべきであろう。

10. Avs チベット訳ではこの梵文の #5 の段落が存在しない。

11. 梵文 Avs とチベット訳では、この #6 の段落 (家出の場面) がかなり違っている。チベット訳を訳すと、次の如くである：「その後、彼は次第に成長して大きくなると、醜さの故に、父母によって家から追い出されました。彼はどこへ行っても、行く先々で嫌悪されるため、多くの人々によって追い払われました。彼は、動物たちによってすら、彼 [ら] における美しさの故に、軽蔑されるほどでしたから、まして人間によってどうして軽蔑されないことがありましようか。彼は都城の内から追い出されて、或るさびれた園林に住みました。彼はときどき果実や根を見つけて、食べました。時々、果実や根が見つからない時は、草や花や葉っぱを糧食としまし

#7 その時、尊師は大弟子たちに圍繞されて、荒れ果てた廃園に行きました。彼は尊師を見るととても恥じ入ってあちらこちらと逃げ回り始めました。すると尊師の神通により加持された（靈的支配力を行使された）彼は逃げ回ることができなくなりました。

#8 すると尊師は弟子たちとともに、滅尽定に入られました。そして滅尽定から再び出られると、[尊師は]御自身を醜悪な姿へと化作しました（魔術的に変化させました）。そして化作を終えてから、食べ物を充たした皿を手にもち、近づいて来た醜悪な者（尊師）を見て、彼（ヴィルーパー）は歡喜に満ちて、話しかけました。『友よ、おいで。[あなたは]どこから来たの。[ここにずっと]居なさい。我らは二人で仲良く一緒に住もう。』

#9 そして尊師は彼に食べ物を与えました。[食べ物により] 感官は満足しました。

#10 すると尊師は自らの[元の]姿をもって御自分を示されました。するとヴィルーパーは仏・尊師を見て、言いました。『あなたは今、とても美しくなりました。[そ

---

た。すると、尊師はヴィルーパーを教化する時が来たのを見て、四大弟子に告げました。『比丘たちよ、来なさい。ヴィルーパーを調伏します』と。」（*de nas gang gi tshé de mthar gyis cher skyes pa de'i tshé mi sdug pa'i phyir pha ma gnyis kyis khyim nas bskrad do // de gang dang gang du song ba de dang der yang yid du mi 'ong ba'i phyir skye bo mang pos bskrad do // de dud 'gro'i skye gnas su skyes pa'i srog chags rnams kyis kyang de la gzi brjid kyis brnyas par byed na mir gyur pa rnams kyis lta ci smos te / de grong khyer gyi nang nas bskrad nas skyed mos tshal dung yag cig tu 'dug ste / des res 'ga' ni 'bras bu dang rtsa ba rnyed na za bar byed do // res 'ga' 'bras bu dang rtsa ba ma rnyed na ni rtswa dang / me tog dang / lo ma dag gis 'tsho bar byed do // de nas bcom ldan 'das kyis mi sdug pa gdul ba'i dus la bab par gzigs nas nyan thos chen po bzhi la bka' tsal pa / dge slong dag tshur shog shig dang mi sdug pa gdul lo /*） — 以上のチベット訳の伝承を見ると、ヴィルーパーが家を出た理由が、両親による追放となっており、その点でヴィルーパーが自発的に家出したとする梵文の伝承と一致しない。またチベット訳の伝承では、まっすぐに廃園に向かったのではなく、あちこちを彷徨って人から追い払われたあげく、最後に廃園にたどり着いたことになる。チベット訳の伝承の方が、ヴィルーパーが次第に人生に追い詰められてゆく形になっているので、ヴィルーパーの人生における困窮・悲慘の度合をより一層高めようという編集者の意図が働いた伝承であるといえる。しかし簡素な梵文の伝承の方がチベット訳の伝承より古いとは言い切れない。漢訳『撰集百緣經』（大正 No. 200）の相当する文（T4, 253b21-28）はチベット訳の伝承とよく一致し、その段落記述の伝承の古さを支持するからである：「年漸長大。父母厭患。驅令遠棄。乃至畜生。見此醜陋。尚懷怖懼。何況人類。又於一時。詣林樹間。採取花果。以自存活。飛鳥走獸。有見之者。無不怖畏。絕迹此林。無敢住者。爾時世尊。常以慈悲。晝夜六時。觀察衆生。誰應可度。輒往度之。知彼醜陋善根已熟化度時到。佛告比丘。我等今者。皆當往詣山林中化彼醜陋」（T4, 253b21-28）。チベット訳の上記の段落は、Avs のチベット訳の伝承が局所的にはネパールの梵文よりも漢訳に近い伝承を有することを示す、ほぼ決定的な証拠となる。また梵文ではこの段落 #6 の全文がネパールの基幹写本（Cambridge Add 1611 の 93b）では葉の余白に記されていることも気になる。紙の狭い余白に書き込む都合から、テキストが簡略化されて記された可能性もあるからである。

れは] いかなる行いの威力によるものなのですか』。世尊は答えました。「私には『心に浄信 (prasāda 信仰) を生じさせるもの』という明呪 (vidyā) があり<sup>12)</sup>、これはその威力です。」

#11 すると彼は尊師に対して、心に浄信を起こしました。また彼らアーラヤ [の瞑想の境地] に入った<sup>13)</sup>偉大な比丘たちに対しても [浄信を起こしました]。

#12 すると彼に『めでたい美』 (lakṣmīḥ) が出現しました。出家して、阿羅漢果を見証しました (自ら見て知りました)。

#13 [この出来事について] 疑念を生じた比丘たちは、すべての疑念をはらす者である仏・尊師に質問しました。「尊師よ、いったいヴィルーパによっていかなる [前世の] 行いがなされたために、彼は醜く、醜悪になり、十八の欠点となる外見的特徴をそなえ、しかも出家して阿羅漢果を見証したのでしょうか。」

#14 世尊は答えられました。「比丘たちよ、まさしくヴィルーパは、以前の他の幾多の生において業を作り積み重ねました。得られた資糧 (材料) を有する [業] は、諸条件が熟すると怒涛のように押し寄せてきて、避けることは出来ません。ヴィルーパが作り積み重ねた業を、[本人以外の] 他の誰が享受しうるのでしょうか。比丘たちよ、作られ積み重ねられた業は、[自分の] 外にある地界でも、水界でも、火界でも、風界でも、熟すことはありません。[自分という] 取著された [五] 蘊・ [十八] 界・ [十二] 処においてのみ、作られた業は熟すのです、善い [業] であろうと、悪い [業] であろうと。

[韻文:] 百コーティ劫たつても、業は滅びることはない。  
[条件が] すべて集まり揃って、適した時を得た時、  
[業は] 生類に必ず果報をもたらす。

#15 比丘たちよ、むかし、過去の時において、プシュヤという、全きさとりを開いた人が世に出られました。明知と行ないとを具えた人、善逝、世間を知った人、調御さるべき人を御す無上の人、神々と人間との師、ブツダ、世尊でした。

#16 ある時、かの [仏] はある王都の近隣に滞在されていました。

#17 全きさとりを開いた人プシュヤは思念されました。その時に [彼の] 近くにいる二人の菩薩を観察しました。尊師・釈迦牟尼 (シャーキャムニ) と弥勒 (マイトレー

---

12. 本当はそんな明呪 (vidyā) つまり魔法の呪文は無いが、これは方便であり、その方便の目的は「心に [仏への] 信仰を (prasāda) 生じさせる」ことである。仏が明知 (vidyā) を有することは本当である。

13. 梵文の ālaya-samāpannānam をチベット訳は 'gog pa'i snyoms par zhugs pa 「滅尽定に入った」と訳す。

ヤ) でした。弥勒の、『自らの相続』(心のありかた)は熟しているのに、師によって教化されるべき者たち(弥勒の弟子たち)は熟していませんでした。釈迦牟尼の、『自らの相続』は熟していませんでしたが、師によって教化されるべき者たち(釈尊の弟子たち)は熟していました。

#18 その時、全きさとりを開いた人プシュヤは、菩薩たる釈迦牟尼の相続を成熟させるために、ヒマラヤの山に登り、宝石の洞窟に入って、結跏趺坐をして火界定(火炎を放つ禪定)に入りました。

#19 その時、菩薩たる釈迦牟尼は果実と根[を採る]ために、ヒマラヤの山に登りました。彼(釈迦牟尼)はあちこちを彷徨っているうちに、全きさとりを開いた人プシュヤを見ました。偉大な人物がもつ三十二相に飾られ、八十の副次的な特徴(種好)で身体が輝き、[全身から発する]一尋の光で飾られており、千個の太陽にまさる光輝をもち、動く宝石の山のように、どこから見ても美しい[姿]でした。

#20 見るやいなや、彼は一本の足で[立ったまま]七昼夜、[次の]一つの詩節をもって讃歎しつづける、一心に集中した状態に没入しました。

#21 [韻文:]

[もし人が] 山と林を有する広大な大地すべてをさまよひ歩いたとしても、  
天空にも大地にも、この世界にも、毘沙門天の住まいにも、  
天宮という神々しい場所にも、四方にも四維にも、  
人間の最高者よ、あなたに等しい偉大な沙門は他に存在しません。

#22 その時、全きさとりを開いた人プシュヤは、菩薩たる釈迦牟尼の相続が熟したのを見て、『みごと』(善哉)という言葉を与えました。

「みごと、みごとだ、尊い人よ、

[韻文:] 最高の再生族の者(婆羅門)よ、

[あなたの] その申し分のない力と努力によって、

今日[あなたが] 全き人を讃えたことによって、

[成仏までにかかる時間の] 九劫が消えた(短縮された)<sup>(14)</sup>と。

#23 その後、世尊(プシュヤ仏)は偉大な精霊(デーヴァター、地上の住処神)たちに囲まれて、その洞窟に居られました。

#24 其処で洞窟に住む精霊は、卑小の故に、[彼が住む] その洞窟の内奥に入れませんでした。

---

14. 釈迦牟尼菩薩の成仏までにかかる時間の九劫が短縮されたことに関して、大智度論卷四 T25 87b24-c25 と卷四十 T25 350a3-8 等に記述がある。和訳として平川彰(1987)『釈尊の過去世物語』、筑摩書房、33-35頁。また書誌学的情報については LAMOTTE, Mppś, p. 253, note 1 を参照。

#25 すると〔彼は〕醜惡に目をつりあげ（怖い目つきになって）、尊き師を威嚇しました。

#26 とても長い間威嚇しましたが、尊き師に害をはたらくことは出来なかったので、精靈は〔ブシュヤ仏に〕浄信を得ました。「この仙人は美しく輝いている。誓戒を成就させている」と〔考えて〕。

#27 そこでその〔精靈〕は尊い外見を化作して（魔法的に作り）、尊き師の両足に跪拜して、赦しを乞い、食べ物をさしあげました。—

#28 尊師（釈尊）は〔話を締め括って〕言われました。『比丘たちよ、あなたがたはどう思いますか。その時、その過去世に洞窟に住むその精靈であった者こそ、このヴィルーパなのです。』

#29 彼は、その業が熟したことによって、輪廻において無量の苦しみを味わいました。今〔この生〕においても、その〔業〕によって、醜惡となったのです。その後、彼は心に浄信を起こしましたが、そのことによって、彼から『忌まわしい醜さ』（*alakṣmī*）がなくなり、『めでたい美』（*lakṣmī*）が出現し、そして出家し、阿羅漢果を見証した（みずから見て知った）のです。

#30 このように、比丘たちよ、完全に黒い行為（業）には完全に黒い果報が熟し、完全に白い〔行為〕には完全に白い果報が熟し、〔白黒〕混じり合った〔行為〕には〔白黒〕混じり合った〔果報〕が〔熟するのです〕。それ故に、比丘たちよ、完全に黒い行為と〔白黒〕混じり合った〔行為〕を避けて、完全に白い行為だけをなすように努力しなさい。このようにあなた方は学びなさい。—

#31 このように尊師は説かれました。感激したかれら比丘たちは、尊師の説かれた言葉を喜んで受け入れました。

以上が Avś 第97話 Virūpa の全訳である。訳にある # 番号は、Avś のテキストを私が切り分けて付けた paragraph number であり、対照の便宜のためにテキストを細かく分割した上で付けた番号である。SMRAM は Avś 再話文献であるから、Avś に付したその # 番号を使って、以下に Avś 第97話と SMRAM 第34章（略号 S34）の内容的対応を示す対照表を挙げたい。Avś の # 番号の後に、その箇所 SPEYER 本の巻・頁・行と段落冒頭の語を（例えば ii.173.2-6 buddho bhagavān のように）示し、その次に = を挟んでその段落に内容的に関係する S34 の該当箇所を verse number で挙げる（例えば = S34 vv.5-18 のように）。また記号の○は Avś 97 の内容が S34 の詩形改稿において膨張している箇所を示す。◎は異常に膨張している箇所を示す。

#1 ii.173.2-6 buddho bhagavān = S34 vv.5-18○

#2 ii.173.6-7 anyatamo gṛhapatir = S34 v.19

#3 ii.173.7-9 tena sadṛśāt = S34 vv.20-22

- #4 ii.173.9-174.1 sāṣṭānām = S34 vv.23-36○  
 #5 ii.174.1-3 tasya jātau = S34 vv.37-39  
 #6 ii.174.4-5 yadā mahān = S34 vv.40-53○  
 #7 ii.174.5-7 atha bhagavān = S34 vv.54-60  
 #8 ii.174.7-10 tato bhagavān = S34 vv.61-66  
 #9 ii.174.10-11 tato 'sya bhagavatā = S34 vv.67-68  
 #10 ii.174.11-175.2 tato bhagavatā = S34 vv.69-76  
 #11 ii.175.2-3 tatas tena bhagavatā = S34 vv.77-81  
 #12 ii.175.3-4 tato 'sya lakṣmīḥ = S34 vv.82-113◎  
 #13 ii.175.5-7 bhikṣavaḥ saṁśaya- = S34 vv.114-118  
 #14 ii.175.7-13 bhagavān āha = S34 vv.119-120  
 #15 ii.175.14-15 bhūtapūrvam = S34 vv.121-122  
 #16 ii.176.1 so 'pareṇa = S34 vv.123-125  
 #17 ii.176.1-4 atha puṣyaḥ = S34 vv.126-130  
 #18 ii.176.4-6 atha puṣyaḥ = S34 vv.131-132  
 #19 ii.176.6-9 tasmimś ca = S34 vv.133-136  
 #20 ii.176.9-10 sahadarśanāc = S34 v.137  
 #21 ii.176.11-14 na divi bhuvī = S34 vv.138-139  
 #22 ii.177.1-4 atha puṣyaḥ = S34 vv.140-143  
 #23 ii.177.5 tato bhagavān = S34 vv.144-145  
 #24 ii.177.5-6 tatra guhānivāsīnī = S34 v.146  
 #25 ii.177.6-7 tato vikṛtanayanā = S34 v.147  
 #26 ii.177.7-8 yadā suciram api = S34 vv.148-152  
 #27 ii.177.8-9 tataḥ sā udāram = S34 vv.153-173○  
 #28 ii.177.10-11 bhagavān āha = S34 v.174  
 #29 ii.177.11-178.1 tasya karmaṇo = S34 vv.180-186  
 #30 ii.178.1-4 iti hi bhikṣava = S34 vv.175-179  
 #31 ii.178.5 idam avocad = S34 v.187

以上の両者の対照から、S34は、その最初と末尾にある話の『梓』の部分（vv.1-4, 188-192）を除いて、Avś 第97話『ヴィルーパ』の原話を種本として、話をかなり忠実に展開していること、また局所的に話を膨らませる場合にも、Avśの話の構造そのものを崩さないように配慮しながら再話していることが確認される。

ここで、上記の表において○（小膨張）と◎（大膨張）の印をつけた三つの膨張箇所について、説明しよう。

Avs の#1にあたる、S34の小膨張箇所 vv.5-18： 釈尊が或る時舎衛城の祇園精舎で集まった生類に説法をなされた。内容的に Avs の冒頭の段落に相当する。S34は SMRAM の他章と同様、聴聞に集まった聴衆の構成を細かく記述する。

Avs の#4にあたる、S34の小膨張箇所 vv.23-36： 生まれた赤ん坊（ヴィルーパー）の醜い姿を見て、父母が失望したことを Avs はこの#4の箇所で語るが、S34はその時の父と母の苦悩する心情について、より踏み込んで、生き生きと述べている。

Avs の#6にあたる、S34の小膨張箇所 vv.40-53： S34は成長したヴィルーパーが自分の醜さを鏡を見て、罪の意識を懐き、生に切望し、どのような決意で家を出て廃園に行ったかが、ヴィルーパー自身の心の動きとして、詳しく述べている。このような登場人物の内面の動的な描写は Avs には無い。

Avs の#12にあたる、S34の大膨張箇所 vv.82-113： Avs がこの #12 の箇所でごく大まかに説いているのは、ヴィルーパーに「めでたい美」（lakṣmī）が出現したこと・出家したこと・阿羅漢果を獲得したこと、という三つの出来事であるが、S34はその三つの出来事のうちの二番目の、ヴィルーパーが出家したという出来事を特に大きく膨らませた。如何にヴィルーパーが出家したかが、vv.87-109 において具体的に詳しく述べられる。ヴィルーパーが実家に戻って父に出家の許可を求める、という新しい要素が入れたことが、ここでの話の膨張の主因である。

Avs の#27にあたる、S34の小膨張箇所 vv.153-173： 精霊（devatā）がプシュヤ仏に食物をさしあげて供養したという Avs の短い記述を、S34はより具体的に、その経過について表現している。精霊は仏を含む僧団を食事に招待することの許可を仏にもらい、食事を準備し、僧団をもてなし、食事後に仏から正法を教示してもらった。ここには食事供養後の説法という、原話の Avs には無い要素が見られる。

### 第三部

#### 頭頂に宝石をつけて生まれたパドマークシャの話 — SMRAM 第35章 と Avadānaśataka 第66章 —

SMRAM 第35章『パドマークシャ (padmākṣa 蓮の眼をもつ者) アヴァダーナ』は、Avś 第66話『パドマークシャ』 (Padmākṣaḥ) を韻文で再話した梵文作品である。この第34章は、SMRAM のみが有する章であり、ネパールの別の説話集成写本 Ratnāvadānatattva には含まれない章なので、高島寛我の Ratnamālāvadāna 出版本 (1954年) にもこの章にあたるテキストは無い。

このSMRAM 第35章の種本である Avś 第66話『パドマークシャ』 (Padmākṣaḥ) は、漢訳の撰集百緣経では卷七、現化品第七の (66) 「頂上有寶蓋縁」にあたる (大正蔵第4巻、236頁中～下)。なお Avś にはこの第66話とよく類似する話として、第69話『スールヤ』 Sūryaḥ がある。

#### 第1節 SMRAM 第35章 Padmākṣāvadāna の梵文と訳

以下にまずSMRAM 第35章『パドマークシャ・アヴァダーナ』の校定梵文テキストを挙げ、続いて和訳 (vv.13-201) を挙げる。

#### 35 Padmākṣāvadāna

Ms. (= SMRAM) 260a7-267b8

athāśoko mahīpālaḥ sāñjaliś ca pramoditaḥ /  
upaguptaṃ yatiṃ natvā prārthayad evam ādarāt // 1  
bhadanta śrotum icchāmi punar anyat subhāṣitam /  
tad yathā guruṇādiṣṭaṃ tathādeṣṭuṃ ca me 'rhati // 2  
iti samprārthitaṃ rājñā śrutvā so [260b] 'rhan mahāmatih /  
upagupto narendraṃ taṃ samālokyaiṃ abravīt // 3  
śṛṇu sādhu mahārāja yathā me guruṇoditam /  
tathātrāhaṃ pravakṣyāmi tava puṇyavivṛddhaye // 4  
tadyathā so jagacchāstā śākyamunis tathāgataḥ /  
sarvajñaḥ sugato nātho dharmarājo munīśvaraḥ // 5  
ekasmiṃ samaye tatra puraḥ kapilavastunaḥ /

upāraṇye mahodyāne nyagrodhākhye jināśrame // 6  
 sarvasattvahitārthe sa prabhāsayan sabhāśritaḥ /  
 saddharmadeśanāṃ kartuṃ vijahāra sasāṅghikaḥ // 7  
 tadā te bhikṣavaḥ sarve bhikṣuṇyaś cailakā api /  
 bodhisattvā mahābhijñā upāsakā upāsikāḥ // 8  
 yatayo yoginaś cāpi tāpasāś ca maharṣayaḥ /  
 tīrthikā brāhmaṇāś cāpi nirgranthā brahmacāriṇaḥ // 9  
 tridaśā lokapālāś ca yakṣagandharvakinnarāḥ /  
 siddhā vidyādharāś cāpi nāgendrā garuḍā api /  
 daityendrā rākṣasāś cāpi tathānye 'pi maharddhikāḥ // 10  
 rājānaḥ kṣatriyā bhūpās tathā rājakumārakāḥ /  
 vaiśyāś ca mantriṇo 'mātyāḥ śreṣṭhinaḥ paurikā api // 11  
 gṛhasthāḥ sārthavāhāś ca vaṇijaḥ śilpino 'pi ca /  
 grāmyā jānapadāś cāpi tathā \*kārvaṭikā api // 12  
 evam anye 'pi lokāś ca saddharmaśravaṇaiṣiṇaḥ /  
 sarve te samupāgatya nyagrodhaparimaṇḍite /  
 jināśrame mahodyāne prādrākṣus taṃ muniśvaram // 13  
 dṛṣtvā te muditaḥ sarve praṇatvā samupāgatāḥ /  
 yathākramaṃ samabhyarcya kṛtāñjalipuṭā mudā /  
 natvā pradakṣiṇīkṛtvā sabhā[261a]ntikam upāśrayan // 14  
 tatas taṃ śrīghanaṃ dṛṣtvā sarve te muditāśayāḥ /  
 tat saddharmāmṛtaṃ pātum upatasthuḥ samāhitāḥ // 15  
 tataḥ sa bhagavān dṛṣtvā sarvāṃs tān samupasthitān /  
 bodhicaryāṃ samārabhya dideśa dharmam uttamam // 16  
 tat saddharmāmṛtaṃ pītvā sarve te saṃprabodhitāḥ /  
 sarvasattvahitārthāya bodhicittaṃ pralebhire // 17  
 tasmimś ca samaye tatra pure kapilavastuni /  
 āśic chākya mahādravya āḍhyaḥ prājño vicakṣaṇaḥ // 18  
 tasya putro mahāsattvo nīlapadmasamekṣaṇaḥ /  
 divyendranīlaratnābhibaddhoṣṇīṣaḥ praśobhitaḥ // 19  
 padmākṣo nāma vijño 'bhūc chrāddho bhadrāśayaḥ sudhīḥ /  
 pradānābhirato dhīraḥ śuddhaśīlo vicakṣaṇaḥ // 20  
 abhirūpaḥ subhadrāṅgo darśanīyo manoharaḥ /  
 kāruṇiko dayāluś ca dharmakāmo hitārthabhṛt // 21  
 sa sadā svagrhe dānaṃ dadau yathepsitaṃ mudā /  
 kriḍāsthāne sthito gacchan reme dattvā yathārthitam // 22

yatra yatrāpi deśe sa padmākṣo 'bhyacarad raman /  
 tatra tatra sadevaiḥ sa lokaiḥ saṃpūjito 'bhavat // 23  
 evaṃ krīḍārato gacchann ekasmin divase punaḥ /  
 bahir gatvā sa padmākṣo dadarśa tajjināśramam // 24  
 tad dr̥ṣṭvā sa mudā tatra draṣṭuṃ tat saugatāśramam /  
 sahasā saṃsaran dūrāt prādrākṣīt taṃ munīśvaram // 25  
 sabhāmadhyāsanāsītaṃ sarvalokapuraskṛtam /  
 dvātriṃśāllakṣaṇāśīti vyañjanaparibhūṣitam // 26  
 vyāmaprabhābhibhāsvantaṃ śatasūryādhikaprabham /  
 saumyaṃ śāntendriyaṃ kāmyaṃ samantabhadrarūpikam // 27  
 dr̥ṣṭvā samudito natvā saṃpaśyan samupāsa[261b]ran /  
 kṛtāñjalipuṭas tatra śāstuḥ pura upāśrayat // 28  
 tataḥ sa bhagavāṃs tasya dr̥ṣṭvāśayaṃ viśodhitam /  
 āryasatyaṃ samārabhya saddharmaṃ samupādiśat // 29  
 tat saddharmāmṛtaṃ pītvā padmākṣaḥ sa prabodhitaḥ /  
 saṃsāraśleśasaṃtrastas triratnaśaraṇāśritaḥ // 30  
 satkāyadr̥ṣṭibhūmīdhraṃ viṃśatīśikharodgamam /  
 bhittvā jñānāsinā śrotaāpattiphalam āptavān // 31  
 tataḥ sa dr̥ṣṭasatyas tatsaddharmaguṇālālasaḥ /  
 sāñjalis taṃ munim natvā pravrajyāṃ samayācata // 32  
 bhagavan nātha sarvajña bhavaddharmāmṛtaṃ varam /  
 pītvā tadamṛtāsvādais tṛptim nābhibhāmy aham // 33  
 tad atra śāsane bauddhe bhavatāṃ śaraṇaṃ gataḥ /  
 triratnabhajanaṃ kṛtvā precchāmi caritum vratam // 34  
 tad bhavān sugataḥ śāstā mahyaṃ saṃbodhivāñchine /  
 kṛpayānugrahaṃ kṛtvā pravrajyāṃ dātum arhati // 35  
 iti saṃprārthite tena bhagavān sa jagadguruḥ /  
 samālokyā kumāraṃ taṃ padmākṣam evam ādiśat // 36  
 kumāra yadi te vāñchā hy asti saṃbodhisamvare /  
 pitur ājñāṃ samāsādyā prāgaccha dāpayāmi te // 37  
 ity ādiṣṭaṃ munīndreṇa śrutvā sa pratimoditaḥ /  
 sāñjalis taṃ munim natvā sahasā prācarat tataḥ // 38  
 tatra gr̥he samāsadya kumāraḥ sa prasāditaḥ /  
 pituḥ pādau praṇatvaiiva sāñjalir evam abravīt // 39  
 tātādyāhaṃ care tatra vihāre saugatāśrame /  
 tatra sabhāsanāsīnaṃ paśyāmi taṃ munīśvaram // 40

tatsaddharmāmṛtaṃ cāpi pītvāgacchāmi sāmpratam /  
 tatsa[262a]ddharmarasātrpteḥ pātum icchāmy ahaṃ punaḥ // 41  
 tat tasya jagatām śāstur gatvāhaṃ śaraṇaṃ mudā /  
 pravrajyāsamvaram dhartum icchāmi sāmpratam khalu // 42  
 tad atra mayi te tāta kṛpāsti bodhivāñchine /  
 kṛpayānugrahaṃ kartum tadanujñāṃ pradehi me // 43  
 iti sampārthite tena śrutvā sa janakas tadā /  
 viyogaduḥkhaśaṅkārtas taṃ sutam evam abravīt // 44  
 śṛṇu putra hitaṃ vakṣye tac chrutvātra hite cara /  
 ahite hi pitā naiva yojayet svātmajaṃ kvacit // 45  
 tad atra me hitaṃ vākyaṃ śrutvā gr̥he śubhānvite /  
 yāvad yuvā sukhaṃ bhuktvā dānaṃ dattvā śubhe cara // 46  
 yadā vṛddhatve samprāpte tadā sambuddhaśāsane /  
 śraddhayā śaraṇaṃ gatvā cara vratam samāhitaḥ // 47  
 tathā me vacanaṃ śrutvā sukhaṃ bhuktvā gr̥hāśrame /  
 triratnabhajanaṃ kṛtvā dānaṃ kṛtvā śubhe cara // 48  
 evaṃ kṛte sadātrāpi sasukhaṃ maṅgalaṃ bhavet /  
 paratrāpi sadā bhadraṃ kramād bodhiṃ ca lapsyasi // 49  
 kiṃ ca tāvat kumāro 'si krīḍārasasukhotsavaḥ /  
 kṛtākṛtānabhijño 'pi tat kathaṃ pravrajeḥ suta // 50  
 pravrajito bahirdeśe niḥsaḥāyaś careḥ sadā /  
 tat kathaṃ tvam kumāro 'pi niḥsaṅgo nirjane vaseḥ // 51  
 pravrajyāvratabhṛd bhikṣur muṇḍitaś cīvarāvṛtaḥ /  
 nityaṃ paragṛhe bhikṣāṃ yācitvāśanam āhareḥ // 52  
 tat kathaṃ tvam mahādravyaḥ śākyavaṃśābhinandaṇaḥ /  
 mahāsampat samṛddho 'pi pravrajitum samutsaheḥ // 53  
 kathaṃ ca muṇḍitaḥ śaṅkaṇṭhācīvaraprāvṛtaḥ /  
 nityaṃ pare gr̥he bhikṣāṃ bhuktvāśobhaḥ suduḥkhitaḥ // 54  
 śītavātātapākṛantakhedito duḥkham āpnuyāḥ /  
 tadā kas te samāśvāsya tadduḥkhāni nivārayet // 55  
 kathaṃ śūnye gr̥he cāpi bhūta[262b]pretādhyuvāsīte /  
 ekākī nivases tatra nivartasva tad\*udyamāt // 56  
 śmaśāne ca kathaṃ bhūtapretasamghādhivāsīte /  
 dagdhasvinnaśavākīṛṇa ekākī nivaser abhīḥ // 57  
 tathā ca nirjane madhye duṣṭacaurādhyuvāsīte /  
 siṃhādīkrūrajantūnām ālaye nivaseḥ kathaṃ // 58

dai vāt rogābhībhūte ca kṣutpipāsāsamākule /  
kas te hitopacāreṇa snehāt samupacārayet // 59  
duṣṭā vā jantavo 'śvagokukkuramahīśādayaḥ /  
tvām bhinnaveṣam ālokya prahareyur upadrutāḥ // 60  
tathā ca bālakā duṣṭā mūḍhā matsariṇo 'pi ca /  
tvām bhikṣārtham āyātam dṛṣṭvā hanyuḥ praroṣitāḥ // 61  
evam ca pramadā vāpi dṛṣṭvā tvām atisundaram /  
lobhayitvā prayatnena nayeyuḥ svaveśe balāt // 62  
pramadāvaśago bhikṣur na parivrāṇ na cāgrhī /  
kulācāraparibhraṣṭo māracaryārataś caret // 63  
tataḥ kleśābhisaktātmā duṣṭamitravaśaṃgataḥ /  
lokāhitavahaṃ karma kṛtvā bhoktuṃ samutsahet // 64  
tataḥ pāparato nityaṃ durvṛttinirataś caret /  
daśākuśalakarmāni kṛtvā niḥśānkitaś caret // 65  
tataḥ sa duritāsaktaḥ kleśadagdhāśayaḥ kudhīḥ /  
triratnāni pratikṣīpya pracared ghorapātake // 66  
tataḥ sa tīvrāpāpiṣṭhaś cirarogābhikheditaḥ /  
tīvraduḥkhābhībhṛto hi mṛto yāyād yamālayam // 67  
tatra yamo 'pi taṃ dṛṣṭvā pāpiṣṭhaṃ duṣkṛtāratam /  
tatpāpāsāsanārthena nārake preṣayed drutam // 68  
tatra ye yamadūtās taṃ vadhā lohādiśṛṅghalaiḥ /  
bahudhā tādayitvā ca [263a] prakṣīpeyur hi nārake // 69  
tatra sa nārake gatvā svakarmasambhavāni vai /  
nānāvidhāni duḥkhāni bhuktvā khedam avāpnuyāt // 70  
evam sadaiva bhogyāni bhuktvā duḥkhāgnitāpitaḥ /  
yāvan na kṣīyate karma nārakeṣu bhramet sadā // 71  
evam etan mahadduḥkhahetuṃ matvā tvam ātmaja /  
pravrajyācaraṇe cittam mā kṛthās tan nivartaya // 72  
yady asti te manaḥ putra sambuddhaśāsane vrata /  
triratnaṃ samupāśritya dānaṃ kuru yathecchayā // 73  
evam te sukṛtaṃ karma mahat puṇyaṃ phaled dhruvam /  
tena sadā bhaved bhadram ihāmutra bhaved dhruvam /  
sarvatra satsukhāny eva bhuktvā yāyāj jinālaye // 74  
tatra sa saugataṃ dharmam śrutvā nityam upasthitaḥ /  
triratnabhajanaṃ kṛtvā saukhyaṃ bhuktvā śubhe caret // 75  
tatas tasya subhadrasya cittam kleśair na lipsyate /

tataḥ sa sukr̥tī dhīro bodhisattvo bhaved dhruvam // 76  
tataḥ sa pracaret ṣaṭsu pāramitāsu tat kramāt /  
mārāṇ jītvā śivām bodhiṃ prāpya buddhapadaṃ labhet // 77  
evam matvātra saṃsāre saddharmasukhasādhanam /  
bodhicittaṃ samādhāya bodhisattvavrataṃ cara // 78  
triratnabhajanaṃ kṛtvā śraddhayā samupasthitaḥ /  
yathābhiprārthitaṃ dravyaṃ dattvā dānavrate cara // 79  
iti me vacanaṃ śrutvā grhe bodhivrataṃ cara /  
pravrajyāsādhane cittaṃ mā kṛthās tan nivartaya // 80  
iti pitroditaṃ śrutvā padmākṣaḥ sa prabodhitaḥ /  
tatheti prativijñāpya tathā kartuṃ samaicchata // 81  
tatas tathā sa padmākṣas triratnasamupasthitaḥ /  
yathā samprārthitaṃ dāna[263b]m arthibhyaḥ pradadau mudā // 82  
tatpradānamahatkīrtiṃ śrutvā sarve 'rthino janāḥ /  
yathecchādravyasamprāptyai tatrāyayuh samantataḥ // 83  
tatra te samupāgatya padmākṣaṃ taṃ pradānikam /  
dṛṣṭvāśīrvacanaṃ dattvā yayācire yathecchayā // 84  
tān sarvān arthino dṛṣṭvā padmākṣaḥ sa pramoditaḥ /  
yathepsitapradānena toṣayitvābhyanandayat // 85  
tatas te kṛpaṇāḥ sarve taddattadravyatoṣitāḥ /  
tasmai jayāśiṣaṃ dattvā mudā svasvālayaṃ yayuh // 86  
tatra te yācakāḥ sarve bhuktvā saukhyaṃ yathecchayā /  
kṛtvārthibhyaḥ pradānāni saṃcerire śubhe sadā // 87  
evam sarvān daridrān sa padmākṣaḥ satsukhānvitān /  
kṛtvā tadudbhavaṃ puṇyaṃ sambodhau paryaṇāmayat // 88  
tatas tatpuṇyabhāvena tasya saddharmalābhinaḥ /  
pravrajyācaraṇo\*tsāho manasi samajāyata // 89  
tataḥ sa parīsuddhātmā padmākṣo bhavaniḥsṛhaḥ /  
nirvṛtipadasamprāptyai pravrajitūṃ samaicchata // 90  
tatas tadvrataprotsāhī pitur agre punar gataḥ /  
pādaḥ natvā sa padmākṣaḥ sāñjalir evam abravīt // 91  
śṛṇu tāta mayā hy atra yad dhitārthaṃ pravakṣyate /  
tac chrutvānugrahaṃ kṛtvā prasādam kuru mā ruṣam // 92  
anityaṃ khalu saṃsāram anityaṃ jīvitaṃ bhave /  
anityākṣaṇasampac ca sampattiś cāpi cañcalā // 93  
kṣaṇadhvaṃsi śarīraṃ ca sarvaṃ ca kṣaṇabhaṅguraṃ /

evaṃ dṛṣṭveha sambodhim icchāmi sāmpratam pitaḥ // 94  
 kiṃ cāpi bhagavān buddhaḥ kleśamāraśāsritān /  
 dṛṣṭvā loke hitārthena carati [264a] dharmam upādiśan // 95  
 sadā na tiṣṭhate buddho bodhicaryāṃ prakāśayan /  
 sarvalokāñ chube sthāpya nirvṛtiṃ samavāpnuyāt // 96  
 sarvadātra bhava loke buddho notpatsyate kvacit /  
 kadācit samaye loke hitārtham hi samudbhavet // 97  
 yad ayaṃ cāpi sambuddhaḥ sarvalokahitārthataḥ /  
 sarvatra maṅgalaṃ kṛtvā carate dharmam upādiśan // 98  
 tathāsmākaṃ hitārthena saśaṅgho 'yam ihāgataḥ /  
 tiṣṭhati bhāsayaṃ loke saddharmaṃ samupādiśan // 99  
 ayaṃ cāpi sadā nātra tiṣṭhed bodhiṃ prakāśayan /  
 anyatrāpi caren nūnaṃ nirvāṇaṃ cāgamiṣyati // 100  
 yadā na vidyate buddhas tadā dharmam ka uddiśet /  
 dharmābhāve kuto loke subhadratā katham bhavet // 101  
 bhadrābhāve 'tra lokāś ca sarve kleśābhimāniṇaḥ /  
 duṣṭāḥ krūrāśayā mūḍhā bhavyeḥ pāpacāriṇaḥ // 102  
 tadā kiṃ janma saṃsāre dharmārthasādhanam vinā /  
 varam tadā bhava janma pakṣimṛgādijantuṣu // 103  
 dharmārtham eva saṃsāre mānuṣye janmakāraṇam /  
 tad atra mānuṣe janma labdhvā ko 'rtho vratam vinā // 104  
 vratam tu saugataṃ śreṣṭham yal lokahitasādhanam /  
 tad aham tad vratam bhadram prāptum icchāmi sāmpratam // 105  
 dhanyās te subhagā bhadrāḥ sambodhipadalābhinaḥ /  
 ye caranti vratam bauddham śuddhaśīlā jitendriyāḥ // 106  
 dhanyās te 'pi subhāgyāś ca śrutvā ye saugataṃ vacaḥ /  
 saṃvaram satsukhādhānam dhṛtvā caranti sarvadā // 107  
 te 'pi dhanyāḥ subhadrā ye triratnaśaraṇam gatāḥ /  
 pravrajyāsamvaram dhṛtvā caranti vimalāśayāḥ // 108  
 te 'pi dhanyā mahātmānaḥ śraddhayā ye sadā da[264b]nāt /  
 triratnabhajanaṃ kṛtvā saṃcarante śubhe sadā // 109  
 ye buddham śaraṇam kṛtvā caranti saugataṃ vratam /  
 te lokeṣu hitam kṛtvā saṃprayāyur jinālaye // 110  
 ye ca dharmam sadā śrutvā saṃcarante śubhe vṛṣe /  
 durgatiṃ te na gacchanti saṃprayānti sukhāvatiṃ // 111  
 ye cāpi śraddhayā nityam kāraṃ kurvanti sānghike /

te 'pi loke śubham kṛtvā saṃyānti sugatālaye // 112  
 ye pravrajyāvratam dhṛtvā saṃcarante samāhitāḥ /  
 te 'rhanto vimalātmāno nirvṛtipadam āpnuyuḥ // 113  
 ity evaṃ munibhiḥ proktaṃ vidāṃvaraiḥ śrutam mayā /  
 tato 'tra saugataṃ dharmam dhartum icchati me manaḥ // 114  
 tad evam aham icchāmi pravrajyāvratam uttamam /  
 nirvāṇapadalābhāya tadanujñāṃ pradehi me // 115  
 \*
 tataḥ kramāc chivāṃ bodhiṃ prāpya buddhatvam āpnuyāḥ // 116  
 iti matvātra saṃsāre sadā bhadraṃ yadīcchasi /  
 tadanujñāṃ pradattvā me saddharme cara sarvadā // 117  
 iti putroditaṃ \*śru<tvā> sa śākyāḥ paribodhitāḥ /  
 viyogaduḥkhaśokārtāḥ kṣaṇam tasthāv adhomukhaḥ // 118  
 tataḥ sa janakaḥ snehāt parityaktum aśaknuvān /  
 galadaśrumukho dr̥ṣṭvā taṃ sutam abravīc cirāt // 119  
 evaṃ satyaṃ yathākhyātam tvayā putra śrutam mayā /  
 tathāpi me manaḥ snehāt tyaktum śaknoti nātmajam // 120  
 tenāham tadanujñāṃ te pradātum notsahe suta /  
 nānyathātrābhīmantavyaṃ yan mayā tvaṃ na mucyate // 121  
 yady evam icchase putra sambuddhaśāsane vratam /  
 śraddhayā samupāśriya cara satyasamāhitāḥ // 122  
 iti pitroditaṃ śrutvā padmākṣaḥ sa [265a] pramoditāḥ /  
 pitroḥ pādān praṇatvaiva sahasā nirgantum aicchata // 123  
 taṃ niryātum samicchantam dr̥ṣṭvā mātā vimohitā /  
 sahasotthāya taṃ putram pariṣvaktum upācarat // 124  
 tadā sa rudatoḥ pitroḥ padmākṣaḥ satvaras tataḥ /  
 vighnaśaṅkāparitrastaḥ sahasā niryayau gṛhāt // 125  
 tataḥ sa sahasā tatra nyagrodhārāma upācarat /  
 tatra taṃ śrīghanaṃ dr̥ṣṭvā mudīto 'ntikam upāśrayat // 126  
 tatra taṃ samupāyātam dr̥ṣṭvā sa bhagavāñ jinaḥ /  
 suprasannamukhāmbhojaḥ samāmantryaivam abravīt // 127  
 ehi vatsa sudhīras tvaṃ śraddhayātra samāgataḥ /  
 triratnaśaraṇam kṛtvā vratam cara samāhitāḥ // 128  
 ity uktvā taṃ munīndras taṃ mūrdhni savyena pāṇinā /

saṃspr̥ṣṭvā sāṃghike bauddhe samagrahīt prasādayan // 129  
 ehīty uktvā munīndreṇa śiraḥspr̥ṣṭaḥ sa śuddhadhīḥ /  
 sāñjalīs tasya nāthasya pādayor nyapatat mudā // 130  
 tata utthāya sa prājñāḥ śrīghanam taṃ munīśvaram /  
 praṇatvā sāñjaliḥ paśyaṃs tasthau vratasamīhayā // 131  
 tatas tasya jagacchāstuḥ kṛpādṛṣṭiprasāditaḥ /  
 muṇḍito 'bhūt sa padmākṣaḥ pātrabhṛc cīvarāvṛtaḥ // 132  
 tadā sa saviśuddhāṅgaḥ pariśuddhatrimaṇḍalaḥ /  
 sarvāvidyāgaṇam bhittvā prāptavidyāviśāradaḥ // 133  
 samādhidhāraṇīvidyāghaṭamānaḥ samudyataḥ /  
 sarvakleśagaṇāñ jivā sāksād arhattvam āptavān // 134  
 tataḥ sa nirjitakleśo nirvikalpo nirañjanaḥ /  
 saṃsāravirato yogī babhūva brahmavid yatiḥ // 135  
 sadevāsu[265b]ralokānāṃ traidhātukanivāsīnāṃ /  
 mānyaḥ pūjyo 'bhivandyaś ca bhikṣur arhann abhūt sudhīḥ // 136  
 tataḥ sa bhikṣur ātmajño lokānāṃ hitakāmyayā /  
 khikkhirīpātram ādāya bhikṣārtham nagare 'carat // 137  
 evaṃ caran sa padmākṣaḥ puraṃ nīlāvabhāsitam /  
 svaśirojendranīlābhaiḥ kṛtvā babhrāma sarvataḥ // 138  
 tatra taṃ bhikṣum āyātaṃ śiromaṇivirājitam /  
 dṛṣṭvā sarve 'pi te lokā vismitā evam abruvan // 139  
 aho bhikṣor yater asya śiromaṇir virājate /  
 tat kim artham ayaṃ bhikṣāṃ yācitum bhramate pure // 140  
 nūnam ayaṃ sarāgaḥ syān na tv arhan nirjitendriyaḥ /  
 yac chirāsthendraratnābhair bhāsayañ carate pure // 141  
 kim artham ayam āḍhyo 'pi bhikṣārtham carate pure /  
 yasyāsty evaṃ mahad ratnaṃ vāñchitārthādhikapradam // 142  
 nūnam atra mahad dhetu yad ayaṃ maṇimān api /  
 pravrajito yatir \*bhūtvā bhikṣārtham aṭate pure // 143  
 evaṃ taiḥ paurikaiḥ sarvaiḥ proktaṃ śrutvā sa ātmavit /  
 lajjayāti viṣaṇṇātmā parisamkocito 'carat // 144  
 tataḥ so 'rhan yatir bhikṣur padmākṣo lajjitāśayaḥ /  
 nyagrodhamaṇḍitārāme sahasā samupācarat // 145  
 tatra taṃ śrīghanam dṛṣṭvā padmākṣaḥ sa kṛtāñjaliḥ /

purogataḥ prañatvaivam vyajñāpayat samādṛtaḥ // 146  
 bhagavan nātha sarvajña vijānīte mamāśayam /  
 yad idaṃ me śīroratnaṃ lajjāyai bhavate 'dhunā // 147  
 tad idaṃ me śīroratnam antarhitam yathā bhavet /  
 tathā bhavāñ jagacchāstā kartum arhati sarvathā // 148  
 iti tatprārthitam śrutvā bhagavān sa munīndraḥ /  
 padmākṣam taṃ mahāvijñam samālokyavim ādiśat // 149  
 idaṃ bha[266a]dra mahāratnam tava karmasamudbhavam /  
 sahaḥam tan na śakyeta hy antardhāpayitum kvacit // 150  
 api tv evaṃ kariṣyāmi yac chraddhā eva sajjanāḥ /  
 drakṣyantīdam śīraḥstham te naiva duṣṭā yathā janāḥ // 151  
 ity uktvā sa jagacchāstā yathā tasya chiromaṇim /  
 sajjanair eva tad dṛṣṭam durjanair na tathākarot // 152  
 evaṃ kṛtam munīndreṇa dṛṣṭvā sa suprasannadhīḥ /  
 sāñjalis taṃ muniṃ natvā vijñāpya prācarat tataḥ // 153  
 tato 'sau 'rhan mahābhijñāḥ padmākṣaḥ yatir ātmavit /  
 pure lokahitārthena bhikṣārtham prācalat tathā // 154  
 tatas tasya tad ālokyā sarve te sāṃghikā api /  
 vismitās taṃ muniṃ natvā papracchus tatpurākṛtam // 155  
 bhagavan kiṃ purānena padmākṣeṇa kṛtam vṛṣam /  
 yad ayam padmapatrākṣaḥ śīromaṇiprasobhitaḥ // 156  
 yac cāyam śāsane bauddhe śraddhayā samupāgataḥ /  
 pravrajyārhattvam āsādyā brahmacārī bhavaty api // 157  
 bhagavan yat puro 'nena sukṛtam karma sādhitam /  
 etat sarvaṃ samākhyāya sarvān naḥ paribodhaya // 158  
 iti saṃprārthite sarvair bhikṣubhiḥ sa munīśvaraḥ /  
 tān sarvān sāṃghikān bhikṣūn dṛṣṭvaivaṃ samupādiśat // 159  
 śṛṇvata bhikṣavo 'nena yat karma prakṛtam purā /  
 tat sarvaṃ saṃpravakṣyāmi yuṣmaccittābhībodhane // 160  
 tadyathābhūj jagacchāstā vipaśyī nāma sarvavit /  
 tathāgato munīndro 'rhan dharmarājo vināyakaḥ // 161  
 bhagavān sajjagalokahitam kurvan sasāṃghikāḥ /  
 bandhumatīpuropānte vijahāra jināśrame // 162  
 tatra sa bhagavāñ chāstā bodhicaryāṃ prakāśayan /

sarvalokahitārthena saddharmaṃ samupādiśat [266b] // 163  
 tat saddharmāmṛtaṃ pītvā sarve lokāḥ prabodhitāḥ /  
 triratnabhajanam kṛtvā babhūva bodhicāriṇaḥ // 164  
 tadaitatpūnyabhāvena tatra sarvatra maṅgalam /  
 nirṛtikam mahotsāham kṛtayuga ivābhavat // 165  
 tataḥ sa bhagavān chāstā sarvāṃ lokān chubhānvitān /  
 kṛtvā bodhau pratiṣṭhāpya parinirvṛtim āyayau // 166  
 nirvṛtaṃ taṃ munim matvā bandhumān sa narādhipaḥ /  
 taddeham arcayitvāgnisatkāram vidhinā vyadhāt // 167  
 tatas taddhātum ādāya garbhe suratnasamṣutam /  
 nidhāya vidhinā stūpaṃ ratnamayam akārayat // 168  
 tataḥ tat saugataṃ stūpaṃ pratiṣṭhāpya yathāvidhi /  
 satkāraiḥ sarvadābhyarcya mahotsāhair mudābhajat // 169  
 tatra stūpe tathānye 'pi lokāḥ śuddhālavo mudā /  
 satkṛtya vidhinābhyarcya mahotsāhaiḥ prabhejire // 170  
 tatsukṛtavipākena sarve te vimalāśayāḥ /  
 sadgatisukhasamprāptā yayuś cānte jinālaye // 171  
 tasmimś ca samaye tatra sārthavāhaḥ śubhānviṭaḥ /  
 ratnavīpāt suratnāni gṛhya pratyāgato 'bhavat // 172  
 tatra taṃ saugataṃ stūpaṃ dṛṣṭvā sa sārthahṛn mudā /  
 indranīlaṃ mahāratnaṃ varṣasthālyām nyabandhayat // 173  
 tadindranīlaratnābhaiḥ sarvā diśo 'vabhāsitaḥ /  
 babhur imāḥ subhadrāṅgā nīlavastrāvṛtā iva // 174  
 tataḥ sa suprasannātmā sārthavāhaḥ sahotsavaiḥ /  
 nīlapadmaiḥ samabhyarcya taṃ stūpaṃ samaśobhayat // 175  
 tataḥ sa muditas tatra praṇatvā sāñjalir mudā /  
 taṃ buddham sugataṃ smṛtvā manasaiṃ vyabhāvayat [267a] // 176  
 yad etatsukṛte puṇyam tenāham īdṛśam jinam /  
 samāryedyedṛśānāṃ sadguṇānāṃ syāṃ sulabdhavān // 177  
 iti evaṃ manasā dhṛtvā praṇidhānam sa sārthabhṛt /  
 natvā pradakṣiṇīkṛtya prābhajat sarvadādarāt // 178  
 tadā yaḥ sārthavāho 'bhūt padmākṣo 'yaṃ na cāparaḥ /  
 yat stūpe satkṛtaṃ tena tenāyam susamṛddhimān // 179  
 yat tena saugate stūpe maṇiratnaṃ nidhāpitam /

tenāsya jāyate mūrdhni svindranīlamahāmaṇiḥ // 180  
 yac ca nīlotpalais tena stūpe pūjākṛtā mudā /  
 tena saṃjāyate 'trāyaṃ nīlotpaladalekṣaṇaḥ // 181  
 yac ca stūpe mudā tena praṇidhānaṃ kṛtā tadā /  
 tathātra śāsane bauddhe pravrajyārhan bhavaty ayam // 182  
 evaṃ yat prakṛtaṃ karma yathā yena yadīhayā /  
 tathā tasya vipāke hi phalaṃ tenaiva bhujyate // 183  
 abhuktaṃ kṣīyate naiva karma kvāpi kadācana /  
 nānyathāpi bhavet karma yat kṛtaṃ tat phalaṃ dhruvam // 184  
 nāgnibhir dahyate karma klidyate na jalair api /  
 śuṣyate nānilaiś cāpi kṣīyate nāpi bhūmiṣu // 185  
 yathā kṛtāni karmāni tathā sarvāṇi sarvataḥ /  
 sāmagrīm prāpya kāle hi phalanti sarvadehinām // 186  
 śubhasya karmaṇaḥ pāke śubhataiva sadā bhavet /  
 pāpasya duḥkhataiva syān miśritasyāpi miśritam // 187  
 evaṃ matvātra saṃsāre sadā śubhasukhārthibhiḥ /  
 triratnabhajanaṃ kṛtvā caritavyaṃ śubhe sadā // 188  
 triratnabhajanodbhūtaṃ puṇyaṃ mahac chubhārthadam /  
 aprameyam asaṃkhyeyaṃ sambodhipadasādhanam // 189  
 evaṃ vijñāya kṛṣṇāṇi vihāya miśritāny api /  
 śubhāny eva sadā kṛtvā triratnaṃ bhajatādarāt // 190  
 [267b] ye 'pi nityaṃ samādhāya saṃcaritvā śubhe sadā /  
 triratne satkṛtiṃ kṛtvā prabhajanti samādarāt // 191  
 durgatiṃ te <\*na> gacchanti sadā te sadgatiṃ gatāḥ /  
 śubhasaddharmasaukhyāni bhuktvā yāyur jinālaye // 192  
 tatra jinaprasādena sambodhisādhanodyatāḥ /  
 trividhāṃ bodhim āsādyā nirvṛtipadam āpnuyuḥ // 193  
 ity evaṃ bhikṣavo matvā yadīcchatha sadā śubham /  
 triratnaśaraṇaṃ kṛtvā caradhvaṃ sarvadā śubhe // 194  
 etatpuṇyānubhāvena pariśuddhatrimaṇḍalāḥ /  
 samyaksambodhim āsādyā sambuddhapadam āpsyatha // 195  
 ity ādiṣṭaṃ munīndreṇa śrutvā sarve sabhājanāḥ /  
 te tathety anumodivā tathācaran prabodhitāḥ // 196  
 iti me guruṇādiṣṭaṃ śrutaṃ mayā tathocyate /

tvam apy evaṃ triratnāni bhaja śubhe caran nṛpa // 197  
 prajāś cāpi tathā rājan bodhayitvā prayatnataḥ /  
 bodhimārge pratiṣṭhāpya pālayasva sadādarāt // 198  
 tathā te maṅgalaṃ nityaṃ sarvatrāpi bhaved dhruvam /  
 kramād bodhiṃ samāsādy sambuddhapadam āpnuyāḥ // 199  
 iti tenārhatādiṣṭaṃ śrutvāsokaḥ sa bhūpatiḥ /  
 tathety abhyanumoditvā prābhyanandat sapārśadaḥ // 200  
 padmākṣasyāvadānaṃ jinagaditam idaṃ śraddhayā ye prasannāḥ  
 śṃvanti śrāvayanti pramuditamanasā ye ca puṇyābhirāgāḥ /  
 te sarve sadguṇādhyāḥ sakalahitakarāḥ satsukhāni prabhuktva  
 bodhijñānādhirājā jinavaranilaye saṃprayānti pramodam // 201  
 // iti padmākṣāvadānaṃ samāptam // 35 //

### Apparatus criticus

- 3a saṃprārthitaṃ] corr.: saṃprārthite Ms.  
 12d \*kārvaṭikā] ex con: kārpaṭikā Ms. Cf. BHSD, s.v. kārvaṭika.  
 23b 'bhyacarad raman] corr.: bhyacaran raman Ms.  
 26d °vyañjanapari°] corr.: °vyañjapari° Ms.  
 27a °ābhibhāsvantaṃ] sic Ms. Read °ātibhāsvantaṃ?  
 54b °kaṅṭhācīvara°] sic Ms. Cf. kaṅṭhā (f., = Tib. tshem bu) in *Saddharmapuṇḍarīka* (KERN & NANJIO ed.), 272.2.  
 56d tad\*udyamāt] ex con: taduttadyamāt Ms.  
 64d bhoktuṃ] corr.: bhāktuṃ Ms.  
 65b durvṛtti°] corr.: durvṛti° Ms.  
 67a sa tīvrāpāpiṣṭhaś] ≈ so tīvrāpāpiṣṭhaś Ms.(post corr. marg): so tipāpiṣṭhaś Ms.(ante corr.).  
 68b duṣkṛtārataṃ] corr.: duḥkṛtārataṃ Ms.  
 69a prakṣipeyur] corr.: prakṣepayur Ms.  
 82cd dānam arthibhyaḥ] corr.: dānammarthibhyaḥ Ms.  
 89c °caraṇo\*tsāho] ex con: °caraṇotsānaṃ Ms.  
 90b °niḥsprhaḥ] corr.: °nisprhaḥ Ms.  
 95d dharmam] corr.: dha [264a] dharmam Ms.  
 99c bhāsayaṃl] corr.: bhāsayaḥ Ms.  
 110c lokeṣu hitaṃ] corr.: loke <su>hitaṃ Ms.

- 116a \*etatpuṇya] ex conī: tatpuṇya Ms. (metre!)  
 118a \*śrutvā] ex conī: śru Ms.  
 130b śiraḥsprṣṭaḥ sa] corr.: śiraḥsprṣṭa sa Ms.  
 130d pādayor] corr.: pādayo Ms.  
 132a jagacchāstuḥ] corr.: gajacchāstuḥ Ms.  
 141b nirjitendriyaḥ] corr.: nirjindriyaḥ Ms.  
 141c chiraḥsthendra°] corr.: chirosthendra° Ms.  
 142c yasyāsty evaṃ] corr.: yasyāsty aivaṃ Ms.  
 143c \*bhūtṽ] ex conī: bhūtṽr Ms.  
 144c lajjayāti°] ex conī: lajjayābhi° Ms.  
 146d vyajñāpayat samādr̥itaḥ] corr.: vyajñāpaya samādr̥itaḥ Ms.  
 149d samālokyaiṃ] corr.: samālokyaim Ms.  
 152b tasya śiromaṇiṃ] corr.: tasyacchiromaṇiṃ Ms.  
 156c padmapatrākṣaḥ] corr.: padmapatrākṣeḥ Ms.  
 170b lokāḥ śuddhālavō] corr.: loko śraddhālavō Ms.  
 171cd prāptā yayuś] corr.: prāptār yayuś Ms.  
 173d varṣasthālyām] corr.: varṣāsthālyām Ms.  
 174c babhur imāḥ] corr.: babhur amāḥ Ms.  
 177d syāṃ] corr.: syān Ms.  
 192a te <\*na> gacchanti] ex conī: te gacchanti Ms.

### SMRAM 第35章 『パドマークシャ・アヴァダーナ』 Padmākṣāvādāna 和訳

#### vv.13-201

同様に他の人々も正法を聞かんと欲して、ニアグローダ樹に飾られた仏の修行場である大園林に集まり来て、かの牟尼の王（仏）を見ました。[13]

見て、彼らすべては歓び、お辞儀して近づきました。作法通りに敬意を示し、合掌し拝礼してから、右邊して、集会場の隅に坐りました。[14] そしてかの光輝に充ちた方（仏）を見て、彼らすべては歓喜した心で、その正法の甘露を飲まんと心を集中し、近坐しました。[15]

するとかの世尊は、近坐するかれらすべてを見つつ、菩提行に関する最高の法を説かれました。[16] その正法の甘露を飲んで、彼らすべては覚知を得て、あらゆる有情の福利のために菩提心を獲得しました。[17]

その頃、かの都城カピラヴァストゥには或る一人の釈迦族の者がいました。大財をもち、富裕で、知恵深く、聡明な人でした。[18] (#2)

彼の息子は偉大な者（大士）であり、青い蓮に似た両目を〔生まれつき〕もち、頭頂部に神々しいサファイアの宝珠が〔生まれつき〕付いていて、光輝いていました。[19] (#3)

〔彼は〕パドマークシャ（蓮の眼をもつ者）という名前で、信仰心篤く、仁徳の心をもち、頭がよく、布施を喜び、心堅固で、清らかな戒を保ち、賢明でした。[20] (#4) すぐれた容貌ときれいな四肢をもち、見目よく魅力的で、憐れみ深く同情心あり、利他を望む者でした。[21]

彼は常に自分の家で存分に、自ら進んで布施をしましたし、出かけて遊興の地にいても、求められるままに布施をして喜びました。[22] かのパドマークシャが愉しみつつ赴くあらゆる場所で、神々を含む生類たちは彼を奉事しました。[23]

そのように遊興を愉しみつつ出かけていたかのパドマークシャはある日、再び外出して、かの勝者（仏）の精舎を見ました。[24] (#5)

それを眺めて、彼は悦び、その仏教徒の寺院を見ようと欲し、そこにすぐさま行くと、遠くからかの牟尼の王（仏）を見ました。[25] 集会場の中央の座に坐り、すべての人々の首座にいて、三十二相八十種好に飾られた〔身体で〕、一尋の光明によって輝き、百の太陽を超える光明を発し、見目麗しく、鎮めた感官をもち、美しく、あらゆる面ですばらしい姿の方（仏）を〔彼は〕見ました。[26-27]

見て、彼は立ち上がり、お辞儀し、見つめながら近づき、そこで合掌して、師（仏）の前に坐りました。[28] (#6)

するとかの世尊は心性浄らかな彼を見て、四諦に関する正法を説かれました。[29] (#7)

その正法の甘露を飲んで、かのパドマークシャはよく理解し、輪廻の苦悩を恐怖し、三宝に帰依しました。[30] 二十の峰々によって高い『有身見』の山を、智慧の剣によって断ち切り、『流れに乗った境地』の果（預流果）を証得しました。[31]

すると真理を観た彼は、その正法の徳性を欲して、合掌してかの牟尼を拜し、出家することを願い出ました。[32] (#8)

「世尊、主、一切智よ、あなた様のすぐれた法の甘露を飲み、私はその甘露の美味に飽きることがありません。[33] それ故この仏の教えにおいて、あなた様に帰依いたします。三宝に奉仕し、誓戒を行ぜんと私は欲します。[34] それ故、善逝・師であるあなた様は、慈悲をもって菩提を欲する私に恩恵をたまわり、出家の法をお与えくださいますように。」[35]

このように彼に請われて、かの世尊・世間師はその青年パドマークシャを見て、次の様に言いました。[36]

「若者よ、もし悟りの律儀 (sambodhisamvara) をあなたが欲するなら、父の許可をもらってから、戻って来なさい。〔出家律が〕あなたに与えられるようにしましょう。」[37]

このように牟尼の王 (仏) が教示されたことを聞いて、彼は歓喜し、かの牟尼に合掌し拝礼して、ただちにそこから去りました。[38]

かの家に着くと、心悦ぶその青年は、父に接足作礼し、合掌して、次の様に言いました。[39]

「父よ、今日私は仏教徒の修行場である、かの僧院に行きました。そこで集会場の座にお坐りになっているかの牟尼の王を見ました。[40] かの方の正法の甘露を飲んで、今戻って来ました。その正法の美味を飲み足りないの、私はさらに飲みたいと思います。[41] それ故、今私はかの世間師に悦んで帰依をなし、出家の禁戒を受持したいと望んでいます。[42] それ故、父よ、ご助力くださるほどに私に憐愍をあなたがお持ちでしたら、悟りを欲する私にここでその〔出家の〕許可を下さい。」[43]

このように彼が請うのを聞いて、かの父はその特別離の苦しみと恐れに悩み、その息子に次の様に語りました。[44]

「聞きなさい、息子よ、〔お前の〕益を私は語ろう。それを聞いて、ここで益のために行動しなさい。なぜなら父親というものは自分の子を決して害には導かないものだ。[45] だから私の有益な言葉を聞き、この幸福が具わった家庭で、若い間は安楽を享受しつつ、布施をして、善行をしなさい。[46] お前は年老いた時に、信心をもって仏の教えに帰依し、一心に誓戒を行じなさい。[47] 今この私の言葉を聞いて、〔お前は〕家住期において安楽を享受しつつ、三宝を信奉し、布施をしながら、善行をしなさい。[48] このようにするなら、〔お前には〕常にこの世界でも、安楽を伴った幸いがあるだろう。またあの世でも常に幸があつて、お前は次第に悟りを獲得することだろう。[49]

しかもお前はまだ未熟な若者 (童真) であつて、遊戯や美味や快樂を喜び、事の良し悪しが分からないのに、それでどうしてお前が出家できるだろうか、息子よ。[50] もし出家すれば、お前は異国で友達もなくいつも彷徨うだろう。お前は未熟な若者なのに、どうやって交際なく無人の地に暮らせようか。[51] お前は、出家の誓戒をもつ比丘として剃髪し、〔三〕衣を纏い、いつも他人の家で施食を乞いながら、食物をもらうだろう。[52] お前は どうして大財をもち、釈迦族の〔わが〕家系の息子であり、大いに成功し、富裕なのに、出家することをあえて欲するのか。[53] 〔お前は〕剃髪し、麻の襤褸の衣を纏って、いつも他人の家で施しを食べて、見映え悪く、苦しむだろう。[54] 〔お前は〕冷たい風や熱気に襲われて疲れ、苦しみを得るだろう。その時誰がお前を元気づけて、その苦悩を退けてくれるのか。[55] 〔お前は〕 どうして化け物や餓鬼が棲む無人の家に独り住むことができよう。そのような試みをやめるがよい。[56]

〔お前は〕 どうして化け物や餓鬼の群が棲む墓地、焼かれて汗をかく死体に充満した所

で、恐れずに独り住むことができようか。[57] 同様に、[お前は] どうして悪漢や盗賊が棲む無人の地の真ん中に、ライオンなどの獐猛な獣の住まい[の地]に、住むことができよう。[58] 運命によって、お前が病気に罹り、飢えと渇きに充ちた状態の時に、お前に誰が、役立つ世話をもって、愛情深く看病してくれるのか。[59] 或いはまた、馬や牛や犬や水牛などの悪い生き物が、ぼろぼろの外見をもつお前を見て、襲いかかって攻撃するのではないか。[60] 同様に、悪くて愚かで意地汚い子供らが、お前が乞食のためにやって来るのを見て、怒って攻撃するのではないか。[61] 同様にまた、若い女たちがお前がとても美形なのを見て、誘惑し、なんとか力づくで自分の家に引き込もうとするのではないか。[62] 女に服従してしまった比丘は、もはや遊行者でもなく、無家住者でもなく、家の良俗を破壊する者、魔の所行を楽しむ者として、振舞うだろう。[63] そして煩惱に執した者は、悪友たちの言うがままになり、世間に害をもたらす行いをして、享楽しようとするだろう。[64] そして罪惡を喜び、悪行を楽しむ者としていつも行動し、十不善業道の行為をなしつつ、畏れなく振舞うだろう。[65] そして悪しき行為に愛着し、煩惱に焼かれた心をもつ愚か者として、三宝をないがしろにして、恐ろしい罪の生活をするだろう。[66] そしてその極悪人は久しく病んで苦悩し、恐ろしい苦しみを得て、死んでヤマ(閻魔)の住まいに赴くだろう。[67] 其処でヤマはその者が極悪人で[生前に]悪行を楽しんでいたのを見て、その罪を罰するために必ず地獄に行かせるだろう。[68] 其処でヤマの使いである処刑人たちは、鉄などの鎖で多数回、彼を打ちすえて、地獄に投げ落とすだろう。[69] 其処で彼は地獄に墮ちて、自分の業から生じた様々な種類の苦しみを味わい、苦悩を得るだろう。[70] このように絶えず[業果の]味わうべきものを味わいつつ、苦しみの火に焼かれて、業が尽きない限り、いつまでも諸地獄を彷徨うことになるだろう。[71]

このように、息子よ、それが大変な苦の原因になることを理解して、お前は出家行に思いを寄せるのはやめなさい。それを思いとどまりなさい。[72] 息子よ、もしお前の想いが仏の教え・警戒にあるのなら、むしろ三宝に親近しつつ、好きなだけ布施をきなさい。[73]

そうすればお前には善業を作り、大福德は必ず果を結ぶだろう。それによって[輪廻の]生存において常にこの世でもあの世でも幸いが必ずあるだろう。一切処において真の幸福を味わいながら、仏の住まい(極樂)に赴くだろう。[74] 其処で、その者は仏の教法を聞いて、いつも奉侍し、三宝に奉仕をなし、幸福を味わいながら浄行をなすだろう。[75] そしてとても幸に恵まれた彼の心は煩惱に汚れることもないだろう。そして徳行をなす賢者としてその者は必ず菩薩となるだろう。[76] そしてその者は六波羅蜜を行じ、その後次第に、魔どもに打ち勝ち、めでたい悟りに達して、仏の位を得るだろう。[77]

このように理解して、この輪廻界で菩提心を懐きつつ、正法と幸福を実現させる、菩薩の誓戒を行じなさい。[78] 三宝への奉仕を行いつつ、信心をもって奉侍し、乞われるがままに財を与えつつ、布施の誓戒を（dānavrata）行じなさい。[79]

以上の私の言葉を聞いて、家で菩提の誓戒（bodhivrata）を行じなさい。お前は出家の成就に思いを掛けるのはやめなさい。それを思いとどまりなさい。」[80]

以上のように父がいうのを聞いて、かのパドマークシャは覚知し、「そのようにいたします」と返事をし、その通りになさんと欲しました。[81]

その後、かのパドマークシャは、乞う者たちに求められたものを悦んで布施しながら、三宝に仕えました。[82]

彼の布施についての大評判を聞いて、あらゆる乞う者たちが、欲しい限りの財を得んとして、至る処から彼の許にやってきました。[83] 其処にやって来ると、彼らはかの布施者パドマークシャを見て、祈りの言葉を与えながら、欲しいだけを乞い求めました。[84] それらすべての乞う者たちを見て、かのパドマークシャは歡喜して、欲しいだけの布施をもって満足させてやり、喜ばせました。[85] すると彼から与えられた財に満足した彼ら貧しい者たちすべては、成功祈願の言葉を彼に与えて、悦んで自分の家に帰って行きました。[86] 其処で、彼ら乞う者たちは誰もが望む限りの幸せを享受し、彼らは求める者たちに布施を行って、常に善行をなしました。[87]

このようにかのパドマークシャはすべての貧窮人たちを、真の幸せを得た者に変えて、そのことから生じた福德を、悟りのために廻向しました。[88]

その後、彼の福德の力によって、正法を求める彼に、出家行への意欲が心に生じました。[89] そしてその心清らかなパドマークシャは〔輪廻の〕生存を厭い、涅槃の境地を獲得するため、出家することを熱望しました。[90]

そこで、その〔出家のための〕誓戒（戒律）を意欲するかのパドマークシャは、父の前に再び行き、接足作礼し、合掌して次の様に言いました。[91]

「父よ、お聞き下さい。私はここで〔自他の〕福利のため、次のこととお話したいのですが、それを聞いてどうかお怒りにならずに、恩情をたまわり、恵みを与えて下さいますように。[92]

実に諸行は無常です。〔輪廻的〕生存における命は無常です。瞬時の成功も無常です。成功は不安定なものです。[93] 身体は刹那に滅びています。一切は刹那にもろく壊れます。今ここでこのように観て、父よ、私は今や悟りを欲します。[94]

さらにまた、世尊・仏は煩惱の魔の支配下に置かれている者たちを觀察され、法を説かれながら、世の福利のために遊行されています。[95] 仏は常におられるわけではありません。菩提行を明示しつつ、あらゆる生類を浄行に安立せしめてから、涅槃に入られるでしょう。[96] この〔輪廻的〕生存における世界に仏はいつでも生じるのではありません。何処で、いつの時節に、福利のために世界に〔再び〕出現されるのでしょうか。[97]

この仏（釈尊）も一切世間の福利のために、あらゆる場所で幸を作りつつ、法を説きつつ、遊行されています。[98] そのように私たちの福利のために、僧団を伴ってこの方はこの地にやって来られ、正法を説きながら、世界を照らしつつ滞在されています。[99] この方はいつまでもこの地には滞在しないでしょう。悟りを説き明かしつつ、他所でも遊行をしてから、必ず涅槃に入られるでしょう。[100]

もし仏がおられなければ、法を誰が説くでしょうか。法が無ければ、どうして世界において善性があるでしょうか。[101] 善〔なる法〕がなければ、この世であらゆる生類は煩惱に慢心もち、墮落した者・残酷な心をもつ者・痴愚者・罪行をなす者となるでしょう。[102] その時、法という目的の達成がないのであれば、輪廻において〔人間としての〕生〔の価値〕とは何でしょうか。〔輪廻的〕生存において、鳥や獣に生まれたほうがましです。[103] 法のためにこそ、輪廻の中で人界に生まれる理由があるのです。それ故、この人界に生を得て、誓戒を得ずして、いかなる意味があるでしょうか。[104]

誓戒とは諸仏の〔説かれた〕最高の、世に益をなす成就法です。それ故私はこのすばらしい誓戒を今や得んと欲するのです。[105] 清浄なる戒律を持し、感官を制御して、諸仏の〔説かれた〕誓戒を行ずる者たちは、恵まれた者・幸運な者・幸いなる者であり、仏の位を得ることができます。[106] 諸仏の〔説かれた〕言葉を聞いて、真正の幸福の出所である禁戒を持しつつ、常に行ずる者たちは、恵まれた者・幸運な者です。[107] 三宝に帰依し、出家の禁戒を堅持して、汚れなき心をもって行をなす者たちは、恵まれた者・幸いなる者です。[108] 信心をもって、常に布施により三宝への信奉をなし、常に浄行をなす者たちは、恵まれた者・心の偉大な者です。[109]

仏に帰依をなして、諸仏の〔説かれた〕誓戒を行ずる者たちは、生類に福利をなして、仏の住まい（極楽）に赴きます。[110] 法を絶えず聴聞して白浄の善行をなす者たちは、悪趣に墮ちることなく、スカークヴァティー（極楽）に赴きます。[111] 信心により常に僧団に対して奉仕をする者たちは、世において白浄の業を作り、仏の住まい（極楽）に赴きます。[112] 出家の誓戒を堅持して、専心して行をなす者たちは、汚れない心をもつ阿羅漢として、涅槃の境地を得るでしょう。[113]

このように、最高の智者たちである牟尼たち（諸仏）によって説かれたことを私は聞きました。それ故に私の心は今ここに、諸仏の教法を堅持したいと望んでいます。[114]

このようなわけで、私は無上なる出家の誓戒を〔授からんことを〕願うのです。涅槃の位を獲得するため、その〔出家のための〕ご許可をどうか私に下さい。[115]

この〔出家の〕福德の分け前により、あなたも〔死後に〕善趣に行かれるでしょう。そしてやがて吉祥なる菩提を獲得して、仏の位を得られるでしょう。[116]

どうかこのように理解されて、もしこの輪廻界で常に幸せを願うなら、その〔出家の〕ご許可を私に与えて、絶えず正法を行ってください。」[117]

以上のように息子が語るのを聞いて、かの釈迦族の者（父）は覚知しましたが、別離の苦しみと悲しみに悩み、わずかな間、うつむいたままでいました。[118]

それから、愛情の故に〔息子を〕捨てることができないかの父は、顔に涙を流しながら、その息子をみつめて、やがて徐々に語りました。[119]

「その通りだ。息子よ、真理はお前が語るとおりであり、〔それを〕私は聞いた。しかし愛情により、私の心はわが息子を捨てることが出来ない。[120] それ故、私はその〔出家の〕許可をお前に与えることに堪えられないのだ、息子よ。私はお前を捨て放つことができないが、そのことは別様にありうると考えるべきではない。[121] 〔しかし〕息子よ、もし仏の教えにおける禁戒をこのようにお前が欲するなら、信心をもって〔仏のもとに〕行き、真理に専念して、行じなさい。」[122]

このように父が答えたのを聞いて、かのパドマークシャは歓喜し、両親に接足作礼し、直ちに出て行こうとしました。[123]

〔家を〕出て行こうとする彼を見て、母親は惑乱し、すぐ立ち上がって、その息子を抱きしめるために近づきました。[124]

その時、両親は泣いていましたが、かのパドマークシャは〔出家への〕妨げになることを恐れて、急いでその家から出て行きました。[125] そしてただちに彼はかのニアグロード園林に赴きました。そこでかの光輝に充ちた方（仏）を見て、喜悅し近くに行きました。[126]

其処で、かの清らかな蓮の如き顔を有する方・世尊・勝者は、やって来た彼を見て、話しかけて、次の様に言いました。[127]

「来なさい、いとしい子よ。賢明なあなたは信心をもってここに戻って来た。三宝に帰依して、一心に誓戒を行じなさい。」[128]

このように牟尼の王（仏）は彼におっしゃって、左手で頭を撫でて、いたわりつつ、彼を仏の僧団に受け入れました。[129]

「来なさい」と牟尼の王に言われて、頭を撫でられた彼は、清らかな思念をもって合掌し、悦んでかの師の両足を跪拝しました。[130]

そして起き上がると、かの智慧者は、かの牟尼の王・光輝に充ちた方（仏）に拝礼し、合掌して見つめつつ、誓戒を熱望して立ちました。[131] それからかの世間師（仏）の慈悲の視線によって心の浄明なるを得た、そのパドマークシャは、剃髪し、鉢を手にもち、〔三〕衣を纏いました。[132]

その時、彼は三昧と陀羅尼と明呪を勤修しつつ、精励努力して、清浄なる肢体をもつ者、清浄な三輪を得た者、あらゆる無明の群を破碎し、獲得した明知（vidya）に通達した者となり、〔ついに〕あらゆる煩惱の群に打ち克って、作証し、阿羅漢果を得ました。[133-134] (#9)

そして煩惱に打ち克った彼は、無分別智を得、〔欲望の〕汚れなく、輪廻をやめ、ヨーガ行者・出家として、ブラフマンの知をもつ者 (brahmavid) となりました。[135]

神々とアスラを含む、三界に棲む〔あらゆる〕生類から尊敬され、供養され、敬礼されるに価する比丘として、勝れた知を有する阿羅漢となりました。[136]

その後、〔悟りの境地を〕自ら知った者であるその比丘は、生類を饒益せんと欲する故に、杖と鉢を手に持って、乞食のために都城を歩き回りました。[137] (#10)

そのように歩き回る時、かのパドマークシャは、自分の頭頂に生えているサファイアの光明によって都城を青色に照らしながら、至る処を遊行しました。[138]

其処では、頭頂の宝珠によって光輝くかの比丘がやってくるのを見て、そのすべての人々は驚愕して、次の様に口々に言いました。[139]

「ああ、この比丘・出家は頭に宝珠を持っていて、照り輝いている。何のためにこの者は乞食の食を求めながら、都城を歩き回っているのだろうか。[140] 定めし、こいつは貪欲をもつ者であって、感官を支配した阿羅漢ではないに違いない。それで、頭に置いたサファイアの輝きで照らしながら、都城を歩き回っているのだ。[141] どうして、この者は金持ちでありながら、乞食のために都城を歩き回るのだろうか。求めている以上のものを与えてくれる大きな宝石を、このように彼は持っているではないか。[142] 疑いなく、そこには大きな理由があるのだろうか、この者が宝珠を所有しつつ、出家して行者となり、乞食のために都城を彷徨っているとは。」[143]

このようにそれらすべての市民たちが言っているのを聞きながら、かの賢者は、羞恥のためにひどく気落ちして、身を縮こめて歩き回りました。[144]

そしてかの阿羅漢たる出家・比丘パドマークシャは、羞恥心をいだきつつ、ニアグロード樹に飾られた園林にすぐさま赴きました。[145]

其処でそのパドマークシャはかの光輝に充ちた方 (仏) を見て、合掌し、恭しく面前に出て、お辞儀をして、つぎのように告げました。[146]

「世尊、主、一切智よ、〔あなた様も〕私の心をお知りでしょう。今や私にとってこの頭上の宝石は恥ずかしいものになりました。[147] それ故、是非どうか、世間師たるあなた様が、私のこの頭の上の宝石を消え去るようにしてくださいませように。」[148]

このように彼が懇願するのを聞いて、かの世尊・牟尼の王は、その大智者パドマークシャをみつめて、次の様に教示しました。[149] (#11)

「麗しい姿の者よ、この大宝石はあなたの業から生じたものです。生まれつき具わったそれは、どこにも消し去ることは出来ません。[150] しかし、信心ある善人たちがあなたの頭の上にあるそれを見、悪しき人々には見えないように、私はしましよう。」[151]

このようにかの世間師（仏）はおっしゃって、彼のその頭頂の宝珠を、善人だけには見え、悪人には見えないようにしました。[152]

牟尼の王（仏）がそのようにされたのを見て、彼は浄信に喜悅した心で、かの牟尼に合掌し、挨拶をして、そこから歩き去りました。[153]

その後、かの阿羅漢・大通知者・智者である出家パドマークシャはそのようなあり方で、世間を利するために乞食に都城を歩き回りました。[154]

するとそれらすべての僧団の者たちは、彼のその〔不思議な出来事〕を見て驚き、かの牟尼を拜んでから、彼の前生の行為について質問しました。[155] (#12)

「世尊よ、前世のパドマークシャがいかなる善行をしたため、この者は蓮の花弁のような目を持ち、頭頂の宝珠によって輝く者になり、そしてまた信心をもって仏の教えに赴き、出家して阿羅漢果を達成し、〔立派な〕梵行者になったのでしょうか。[156-157]

世尊よ、前世に彼が作り達成した善き業（行為）について、その一切をお話しになって、私たちすべてに気づきを得させてください。」[158]

このようにすべての比丘たちに請われたかの牟尼の王（釈尊）は、それらすべての僧団の比丘たちを見て、次の様に説かれました。— [159] (#13)

聞きなさい、比丘たちよ。彼がかつていかなる業（行為）を作ったのか、そのすべてを語りましょう、あなた方の心の覚知のために。[160]

すなわちかくの如くです。往古にヴィパッシン（vipaśyin）という名の世間師・一切智・如来・牟尼の王・阿羅漢・法王・指導者がいました。[161] (#14)

世尊は僧団の者たちを伴って、善良な人々・世間に益をもたらしながら、都城バンドゥマティーの近くの精舎に滞在されていました。[162] (#15)

其処で、かの世尊・師は菩提行を説明し、あらゆる人々を益するため、正法をお説きになりました。[163] その正法の甘露を飲んで、すべての人々は覚知し、三宝に奉事しながら、菩提行をなす者になりました。[164]

その当時は、この福德の状態の故に、そのの〔国の〕一切処において吉事があり、災害なく、まるでクリタ・ユガ〔の時代〕におけるように、大きな歓喜がありました。[165]

その後、かの世尊・師は、あらゆる人々を浄行（幸福）を得た者に変えて、菩提〔への道〕に安置せしめてから、般涅槃されました。[166] (#16)

かのバンドゥマット（bandhumat）王は、般涅槃されたその牟尼を想いつつ、その遺体を崇め敬い、規定どおりに火葬を行いました。[167] (#17) それからその遺骨を取って、宝石を伴ってそれを胎室（garbha）に安置し、宝石で出来た仏塔（stūpa）を規則どおりに作らせました。[168]

そしてその仏塔を建立してから、作法どおりに種々の供養法をもって絶えず供養しつつ、悦んで大きな熱意で崇拜しました。[169] その仏塔では他の者たちも同様に、清

らかな水瓶をもち、悦んで正しい作法で恭敬し、供養をなして、大きな熱意で崇拜しました。[170] (#18)

その善業の異熟によって、汚れない心をもつそれらの者たちすべてが、善趣の安樂を得て、[生の] 終わりに仏の住まい（極樂）に行きました。[171]

その頃、浄行を具えた一人の隊商主が、寶石島（ratnadvīpa）から妙なる宝石を獲得して、その地に戻って来ました。[172] (#19)

其処で、かの善逝の仏塔を見て、その隊商主は心悦んでサファイアの大宝石を[ストーパーの] 雨うけに取り付けました。[173]

そのサファイアの宝石の光輝によって、あらゆる方角が照り輝きました。それら（諸方角）はまるで美しい肢体の女たちが青い衣を纏ったかのように見えました。[174] (#20)

それからその浄信の心の隊商主は、大歓喜をもって多数の青蓮を供養し、その仏塔を美しくしました。[175]

そして喜悅する彼はその[仏塔]を拜し、欣然と合掌して、かの仏・善逝を憶念しつつ、心で次の様に強く念じました。[176]

「この善行における福德によって、私は[未来世に]かくの如き勝者（仏）を喜ばせ、かくの如きすぐれた性質を私も得ますように。」[177]

このようにかの隊商主は心に誓願をいだいて、拜礼し右邊して、絶えず恭しく供養しました。[178]

その[往古の]時に[その]隊商主であった者が、[現世の]このパドマークシャであり、別人ではありません。[その時]彼が仏塔に供養したので、この者はとても富裕になったのです。[179] (#21) [その時]彼が仏塔に宝珠を取り付けたので、この者の頭頂にサファイアの大宝珠が生じたのです。[180] [その時]彼が多くの青蓮をもって、悦んで仏塔に供養したので、この者は青蓮の花弁の目をもつ者として、この世に生まれたのです。[181] その時その彼が仏塔において欣然と誓願をなしたので、この世でこの者は仏の教えのもとに出家し、阿羅漢になったのです。[182]

このように、もし願いによって或る者が或る業を作れば、異熟においてその通りにその者はその果を味わうのです。[183] (#22) 享受されない業は、どこにおいてもいつまでも決して滅することはありません。定めて、業を作ったならば、その果報は別様にはなりません。[184] 業は火によって焼かれず、水によっても湿らず、風によっても乾涸らびず、地中でも滅しません。[185] [条件が]集まり揃って、適した時に、あらゆる業は作られた通りに、どこであろうと、すべての生類に果報をもたらします。[186] 白浄の業には、果においても常に白浄さ（幸せ）のみがあるでしょう。悪の[業には]苦があり、[白黒]混成の[業]には[苦樂が]混じった[果が]あるでしょう。[187]

このように考えて、この輪廻界において幸せと安樂を望む者は、三宝への尊崇（供養）をしつつ、常に浄行をなささい。[188] 三宝への尊崇（供養）から生じる福德は偉大で、無量・無数で、幸せの利益をもたらすものであり、悟りの位を達成させます。[189]

このように認識して、黒い〔業〕と混成の〔業を〕捨てて、白浄の〔業〕のみを常に作り、三宝を熱心に尊崇（供養）なささい。[190] 絶えず常に専心して浄行をなし、三宝に奉事して、熱心に信奉する者たちは、悪趣には行かず、常に善趣に行きます。白浄の正法の幸福を味わいつつ、仏の住まい（極樂）に赴くでしょう。[191-192] 其処（極樂）で仏の恩恵により、悟りの成就に努力する者たちは、三種の悟りを達成して、涅槃の境地を得るでしょう。[193]

比丘たちよ、このように理解し、もし常に白浄の幸せを欲するなら、三宝に帰依し、たえず浄行をなささい。[194] その福德の威力により、三輪清浄の者となって、正等覚を達成し、仏の位を得るでしょう。— [195]

このように牟尼の王（仏）は教示されましたが、それを聞いて、彼ら集会の人々すべては「そういたします」と随喜し、覚知を得て、そのように行じました。[196] (#23)

— 以上、師がお教えになったことを私（ウパグプタ）が聴聞したとおりに、そのままお話しました。王よ、あなたも同様に、浄行をしながら、三宝への尊崇（供養）をなささい。[197]

王よ、努力して民衆に同じ様に覚知を得せしめ、悟りへの道に安立させ、常に注意深く護りなさい。[198] かくして、必定にあなたにはいつも至る処で幸せがあるでしょう。漸次に悟りに到達し、仏の位を得ることでしょう。— [199]

以上のように阿羅漢が説かれたのを聞いて、かのアショーカ王は「そういたします」といって随喜しつつ、同座の者たちと共に、〔その教えを〕喜んで受け入れました。[200]

もしこの勝者が説かれたパドマークシャ・アヴァダーナを聞いて、浄信をいだく者たちが信心により、喜悦の心をもち、福德を欲して、〔他の人々にそれを〕聞かせてあげるならば、彼らすべては善い性質に富んだ者となり、あらゆる益をなし、真の幸福を味わいながら、菩提の智慧の王となって、最高の仏の住まい（極樂）において、歡喜に至るであろう。[201]

以上、『パドマークシャ・アヴァダーナ』（padmākṣāvadāna）終わる。第35章。

## 第2節 Avadānaśataka 第66話 Padmākṣaḥ と SMRAM 第35章の比較

上の節でテキストを和訳を示した SMRAM 第35章 Padmākṣāvādāna の原話である Avś 第66話の全訳を次に示し、その後、それら二つのテキストを比較してみて、SMRAM 第35章の作者がどのように Avś 第66話を膨らませて、再話したのかを確認してみたい。

### アヴァダーナ・シャタカ第66話『パドマークシャ』 (Padmākṣaḥ) 和訳

SPEYER ed., i.367.1-370.14

#1 仏・世尊は、王や大臣や財産家や市民や長者（富商）や隊商長や神や龍や夜叉や阿修羅やガルダやキンナラやマホーラガに敬意をもって遇され、重んじられ、尊ばれ、供養されておりました。このように神や龍や夜叉や阿修羅やガルダやキンナラやマホーラガに崇められる仏・世尊は、有名な大福德者であり、衣服・施食・臥具坐具・病氣治療のための薬といった日用品を得ており、弟子たちを有する僧伽とともに、カピラヴァストゥにあるニアグローダ園林に滞在しておりました。

#2 [その頃] カピラヴァストゥに一人の釈迦族の者がおり、富裕で、大財をもち、大資産をもち、莫大な所有物を有して、[まるで] 毘沙門天の財をそなえて毘沙門天と富を競うかのようなようでした。

#3 彼は相応しい家から妻を娶りました。彼は彼女とともに戯れ、楽しみ、悦楽の行為をしました。戯れ、楽しみ、悦楽の行為をしているうちに、彼に息子が生まれましたが、[その子は] 美しく見目よく端正であり、とても青くて蓮の[ような] 目をもち、また神々しいサファイア（帝釈青）の宝玉が頭頂に[生まれつき] 付いており、その[宝玉の輝き] によって都城カピラヴァストゥはサファイア色になりました。

#4 彼が生まれたので、誕生祭がなされ、名前が決められました。「子の名前は何かよいだろうか。」親族たちはいいました。「この[子] は蓮のような目をしていきますから、子供の名はパドマークシャ（蓮の目をもつ者）にしましょう。」

幼子パドマークシャは八人の乳母に預けられました。二人はおんぶの乳母、二人は授乳の乳母、二人は襁褓の乳母、二人はあやすための乳母です。八人の乳母は彼を生乳・酸乳・バター・バター油（ギー）・サルピマンダ[の乳製品] と、その他のよく加熱した特別の食材によって養い、育てました。彼は池に生えた蓮のようにすみやかに成長しました。

彼は信仰心が篤く、仁徳あり、善なる心性をもち、自利と他利のために働き、憐れみ深く、気高い精神をもち、法を愛し、捨施を好み、布施を喜び、大きな捨施を実行していました。彼がどこに赴いても、あらゆる場所で人々や神々によって奉事され、敬意を表されました。

#5 ある時、若者パドマークシャはニアグローダ園林に行きました。そして彼は仏・世尊にまみえました。偉大な人物がもつ三十二相に飾られ、八十の副次的な特徴（種

好) で身体が輝き、[全身から発する] 一尋の光で飾られており、千個の太陽にまさる光輝をもち、動く宝石の山のように、どこから見ても美しい[姿]でした。

#6 見るやいなや、たちまち世尊に対して心に浄信を起こしました。浄信を生じた彼は世尊の両足を跪拝し、法を聞くために面前に坐りました。

#7 世尊は[彼の]心性・性向と本性と自性(素質)を知って、それに合ったかたちの四聖諦を洞察させる法の教示を彼のためにしましたので、それを聞いてパドマークシャは、二十の峰々によって高い、有身見の山を智慧という金剛杵で砕いて、「流れに乗った境地」の果(預流果)を証得しました。

#8 真理を観た彼は、布施・大施をしながら、沙門や婆羅門や貧窮人や乞食者や苦しむ者たちを満足させ、[やがて]父母の許しを得て、世尊の教誡のもとに出家しました。

#9 彼は勤め励み努力して、五つの区分(五趣)から成る輪廻の車輪が動転しやすい(安定の無い)ものであると知り、すべての造り出された現象(行)の行路を、滅びや落下や散壊や破壊に導く法であるがゆえに、うち捨てて、すべての煩惱を滅することにより、阿羅漢の境地を見証しました。阿羅漢となり、三界より離欲し、土くれと黄金とが等しい[とみなす]者になり、[無限の]虚空と[自分の]掌とが等しい[と知る]心を有し、斧[で体を切られること]と栴檀[を体に塗ってもらうこと]が等しい者になり、明知によって殻を打ち割り、[三]明[六]通[四]無礙を得て、生存[の欲求]・獲得し貪ろうとする心・尊敬[されたい欲求]から顔を背け、インドラ神とインドラに準じる神をふくむ神々によって崇められ、尊ばれ、拝まれる者となりました。

#10 やがて[時が経ち]、彼は托鉢[行]に入っている時に、多くの人々によって[宝珠を頭に載せたその姿を]注視されて、恥ずかしさを感じました。そこでかのパドマークシャは世尊のもとに赴き、世尊に告げました。「どうか世尊は宝珠が私から消え去るようにしてくださいますように。」

#11 世尊は答えました。「これは業から生じたものであり、消失させることはできません。しかし信心ある者たちにはそれが見え、信心ない者たちには見えないように私はしまししょう。」そして世尊はそのようにしました。

#12 疑念を生じた比丘たちは、あらゆる疑いを断たれる方である仏・世尊に尋ねました。「尊師よ、パドマークシャがこのように大威勢ある者として、阿羅漢果を得たのは、いかなる業が作られたからでしょうか。」

#13 世尊は答えられました。—

比丘たちよ、かつて他の多くの前生においても、パドマークシャは業を作り、蓄積しました。他の誰が[その業を]享受するのでしょうか。比丘たちよ、業が作られ、蓄積された業は[本人の]外で、地界でも、水界でも、火界でも、風界でも熟すことはありません。[自分という]取著された(upātta)蘊・界・処においてのみ、作られた業は熟するのです。善い[業]であろうと、悪い[業]であろうと。

[韻文:] 百コーティ劫経っても、業は滅びることはない。

[条件が] すべて集まり揃って、適した時を得た時、

[業は] 生類に必ず果報をもたらす。

#14 比丘たちよ、往古、過去時において、第91劫において、ヴィパッシンという、真の全きさとりを開いた方（正等覚）が世に生まれました。明知と行いを具えた人、善逝、世間を知った人、調御さるべき人を御す無上の人、神々と人間との師、仏陀、尊師でした。

#15 彼は王都バンドウマティーの近くに滞在していました。

#16 やがて[時が経ち]、正等覚ヴィパッシンは仏としてなすべき事をすべてなし終えて、燃料が尽きた火のように、生存の素因の残余がない（無余依の）涅槃界に般涅槃されました。

#17 バンドウマツト王は彼の遺骨に対して遺骨供養（*śarīrapūjā*）をなして、四種の宝石から成る、周囲1ヨージャナ（由旬）、<高さ1クローシャ><sup>(15)</sup>の仏塔（*stūpa*）を建てました。

#18 数十万の生類がそこで崇拜行をなし、最終目的として生天と解脱をめざしました。

#19 その頃、或る隊商主が航海を成功させて、大海から戻りました。彼はそこに巨大なサファイアの宝石をもたらしました。彼はヴィパッシンの仏塔を見て、如来のすぐれた性質を思い出し、その宝珠をヴィパッシンの仏塔の雨うけ（*varṣasthālī*）の上に取り付けました。

#20 その[宝珠]の威力によって、あらゆる四方四維[の空間]が青く見えるようになりました。そして彼は多くの蓮華を供養して、誓願をしました：「私も、同様のすぐれた性質を得ますように。かくの如き師を喜ばせることができますように。失望させませんように」と。

#21 世尊はいわれました。比丘たちよ、あなた方はどう思いますか。その時その時節に、かの商主であった者がこのパドマークシャなのです。彼はヴィパッシンの仏塔に宝珠を載せましたが、その業の異熟によって、彼の頭頂に宝珠が出現しました。彼は青蓮をもって供養をしたので、そのことによって、とても青くて蓮華の[ような]目をもつ者となりました。彼は誓願をしたので、そのことによって、この生において阿羅漢果を証得しました。

---

15. Avs チベット訳にあるが梵文写本のこの箇所には欠けている \**krośam uccatvena*（高さ1クローシャ）の語句を補った。

#22 このように、比丘たちよ、完全に黒い行為（業）には完全に黒い果報が熟し、完全に白い〔行為〕には完全に白い果報が熟し、〔白黒〕混じり合った〔行為〕には〔白黒〕混じり合った〔果報〕が〔熟するのです〕。それ故に、比丘たちよ、完全に黒い行為と〔白黒〕混じり合った〔行為〕を避けて、完全に白い行為だけをなすように努力しなさい。このようにあなた方は学びなさい。—

#23 このように世尊は説かれました。感激したそれらの比丘たちは世尊のお説きになった〔教え〕を喜んで受け入れました。

以上が Avś 第66話 Padmākṣa の全訳である。訳にある # 番号は、Avś のテキストを私が切り分けて付けた paragraph number であり、対照の便宜のためにテキストを細かく分割した上で付けた番号である。Avś に付したその # 番号を使って、以下に Avś 第66話と SMRAM 第35章（略号 S35）の内容的対応を示す対照表を挙げたい。Avś の # 番号の後に、その箇所の SPEYER 本の巻・頁・行と段落冒頭の語を（例えば i.367.2-5 buddho bhagavān のように）示し、その次に = を挟んでその段落に内容的に関係する S35 の該当箇所を verse number で挙げる（例えば = S35 vv.5-17 のように）。また記号の○は Avś 66 の内容が S35 の詩形改稿において膨張している箇所を示す。◎は異常に膨張している箇所を示す。

- #1 i.367.2-5 buddho bhagavān = S35 vv.5-17○
- #2 i.367.6-7 kapilavastuny = S35 v.18
- #3 i.367.7-10 tena sadṛśāt = S35 v.19
- #4 i.367.10-368.3 tasya jātau = S35 vv.20-23
- #5 i.368.4-6 atha padmākṣo = S35 vv.24-27
- #6 i.368.6-8 sahadarśanāc = S35 v.28
- #7 i.368.8-10 tasmai bhagavatā = S35 vv.29-31
- #8 i.368.10-12 sa dṛṣṭasatyo = S35 vv.32-132◎
- #9 i.368.12-16 tena yujyamānena = S35 vv.133-136
- #10 i.369.1-3 yāvad asau = S35 v.137-148○
- #11 i.369.3-4 bhagavān āha = S35 vv.149-154
- #12 i.369.5-6 bhikṣavaḥ saṃśaya- = S35 vv.155-158
- #13 i.369.6-13 bhagavān āha = S35 vv.159-160
- #14 i.369.14-16 bhūtapūrvam = S35 v.161
- #15 i.369.16 sa bandhumatīm = S35 vv.162-165
- #16 i.369.16-17 yāvad vipaśyī = S35 v.166
- #17 i.369.17-18 tasya rājñā = S35 vv.167-169
- #18 i.369.18-370.1 tatrānekāni = S35 vv.170-171

#19 i.370.1-4 yāvad anyatamaḥ = S35 vv.172-173

#20 i.370.4-6 tasyānubhāvena = S35 vv.174-178

#21 i.370.7-10 bhagavān āha = S35 vv.179-182

#22 i.370.10-13 iti hi bhikṣava = S35 vv.183-195

#23 i.370.14 idam avocad = S35 v.196

以上の両者の対照から、S35は、その最初と末尾にある話の『杵』の部分 (vv.1-4, 197-201) を除いて、Avś 第66話『パドマークシャ』の原話を種本として、話をかなり忠実に展開していること、また局所的に話を膨らませる場合にも、Avś の話の構造そのものを崩さないように配慮しながら再話していることが確認される。

ここで、上記の表において○ (小膨張) と◎ (大膨張) の印をつけた三つの膨張箇所について、説明しよう。

Avś の#1にあたる、S35の小膨張箇所 vv.5-17: 釈尊が或る時舎衛城の祇園精舎で集まった生類に説法をなされた。SMRAM で常套的に見られる、章の冒頭部分の定型的な出だしであり、内容的に Avś の冒頭の段落に相当する。S35は SMRAM の他章と同様、その場に集まった聴衆が神や人のいかなるグループから構成されるかを細かく記述する。

Avś の#8にあたる、S35の大膨張箇所 vv.32-132: Avś がこの #8 の箇所で語るのは、パドマークシャが釈尊の説法を聞いて後に在家信者として布施を行ったこと、やがて父母の許可を得て出家したこと、の二つである。このたった1行の非常に簡潔な Avś の記述を S 35は百詩節に膨らませた。S 35では、パドマークシャは説法を聞いた後、釈尊に出家を請い、父母による出家の許可が必要と知って、家に戻り、父に自分が出家することを認めるように請う (32-43)。父は出家を思いとどまるよう、息子パドマークシャを説得する (45-80)。パドマークシャは父の説得を受け入れ、しばらく在家信者として布施等に励む (81-88)。やがてパドマークシャは再び出家を熱望するようになり、自分の出家を認めるよう、仏教の真理をもって父を説得する (89-118)。父は子への愛情に悩みつつも、息子の言葉に諭されて、彼に出家の許可を与える (119-123)。パドマークシャは家を出て、仏の許に行き、出家する (124-132)。

Avś の#10にあたる、S35の小膨張箇所 vv.137-148: パドマークシャは乞食のために歩くうちに、頭上に宝珠を載せた自分の姿を人々が熟視することに羞恥を感じ、頭から宝珠を消してくれるように釈尊に頼む。この Avś. の簡潔な記述に対して、S35はその羞恥の原因について踏み込んで記述し、都城の人々がどう考えながらパドマークシャの乞食する姿を眺めていたのかを、人々の口から出た言葉として具体的に表現している。

## 参照文献

岩本裕 (1967): 『佛教説話研究序説』、法蔵館。

MAJUMDAR, Prabhas Chandra (1948): “The Kāraṇḍavyūha: Its Metrical Version.”, *Indian Historical Quarterly*, XXIV, 4, pp. 293–299.

TATELMAN, Joel (1996): *The Trials of Yaśodharā: a Critical Edition, Annotated Translation and Study of Bhadrakalpāvadāna II-V*. Thesis (Ph. D.), University of Oxford.

## 前号論文の梵文正誤表

先年の『南アジア古典学』第8号の拙稿に掲載した TJAM 第1章の梵文テキストの正誤表を次に挙げたい。

Corrigenda for SACS 8, pp. 227-241, the text of the 1st chapter of TJAM

Line	Instead of	Read
55a	bho	bhoḥ
66b	°patra°	°pattra°
100b	°patra°	°pattra°
141a	'trā	'tra
149a	ghoṣaḥ	ghoṣāḥ
166a	°pannaḥ	°pannāḥ
209d	bhaved	bhavet
238b	purohitādaya	purohitādayo

※本研究は科研費 (24520054) の助成を受けたものである。

<キーワード> Subhāṣitamahāratnāvadānamālā, Avadānanaśataka, Avadānamālā, Virūpāvadāna, Padmākṣāvadāna, Tathāgatajanmāvadānamālā, Padyalalitavistara

(九州大学大学院教授, Ph.D.)